

上福岡市

い さ じま
伊 佐 島 遺 跡

県道東大久保大井線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 2

序

首都圏の一翼を担う埼玉県における道路網の整備は、近年の交通事情の変化に対応しながら、地域開発や環境整備事業をも加えて継続的に計画・実施されております。

これに基づき、県道東大久保大井線の建設も計画されましたが、路線の一部に埋蔵文化財包蔵地である伊佐島遺跡が存在しておりました。そこで、この伊佐島遺跡の取り扱いについて関係各機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存を目的とした発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成2年度に実施いたしました。

発掘調査の結果、弥生時代・平安時代の住居跡や土壙、室町時代の溝など数多くの遺構と弥生式土器や平安時代の土師器・須恵器など貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護に関する資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

刊行に当たりまして、発掘調査に関する調整にご尽力していただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご協力くださいました埼玉県土木部道路建設課、同川越土木事務所、並びに上福岡市教育委員会、地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成4年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

例 言

1 本書は、埼玉県上福岡市大字駒林字南伊佐島1151-2番地他に所在する伊佐島遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は平成3年6月7日付委保第5の570号である。

遺跡名の略号は、I S J Mである。

2 発掘調査は県道東大久保大井線の建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は今井 宏・野中 仁が担当し、平成2年11月1日から平成3年3月31日まで実施した。整理作業は今井が担当し、平成3年12月1日から平成4年3月31日まで実施した。

なお 発掘調査・整理作業の組織は2ページに示した。

4 本書の執筆は第I章第1節を県文化財保護課が、他を今井が行った。

5 図版作成、写真撮影は下記の者が行った。

図版作成 今井

発掘調査撮影 今井・野中

遺物撮影 今井

6 本書の編集は、資料部資料整理第1課の今井が行った。

7 本書にかかる資料は、平成4年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

8 本書内の挿図における指示は次のとおりである。

・ X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を表わし、方位はすべて座標北を示す。

・ 挿図類の縮尺は次の率を基本とし、それ以外のものは個別に示した。

遺 構 住居跡・掘立柱建物跡・柵列跡・土壇・柱穴群・溝跡・井戸跡 1/60

遺 物 土器 1/4 土製品 1/3

・ 土器の断面は、土師器・中世陶器は白抜き、須恵器は塗りつぶして表現している。

・ 土器体部のトーン部分は、赤彩の範囲を示す。

・ 土器実測図の中心線が—・—の一点鎖線は、その径が推定不可能なものである。

9 本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表したい。

(敬称略)

浅野晴樹 笹森健一 早坂廣人 平田重之 柳沢健司

泉美智子 加茂野ひな子 栗原朝子 小松和子 斉藤芳子 長谷川清美 吉田ちい子

目 次

序

例言

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査と報告書刊行事業の組織	2
3	調査の経過と方法	3
II	遺跡の立地と環境	6
III	遺跡の概要	10
IV	検出された遺構と遺物	14
1	住居跡	14
2	掘立柱建物跡	27
3	土 壙	28
4	柵列跡	34
5	柱穴群	34
6	溝 跡	43
7	井戸跡	56
8	グリッド出土遺物	57
V	まとめ	59

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	4	第31 図	第 1 号溝跡	44
第 2 図	遺跡周辺 (左迅速図・右地形図)	6	第32 図	第 1 号溝跡出土遺物 (1)	45
第 3 図	周辺の遺跡	8	第33 図	第 1 号溝跡出土遺物 (2)	46
第 4 図	基本層序	10	第34 図	第 1 号溝跡出土遺物 (3)	47
第 5 図	調査区全測図 (1)	11	第35 図	第 2・3 号溝跡	49
第 6 図	調査区全測図 (2)	13	第36 図	第 2・5・6・8 号溝跡出土遺物	50
第 7 図	第 1 号住居跡 (1)	15	第37 図	第 4・5 号溝跡 (1)	51
第 8 図	第 1 号住居跡 (2)	16	第38 図	第 4・5 号溝跡 (2)	52
第 9 図	第 1 号住居跡遺物出土状態	17	第39 図	第 6・7・9 号溝跡 (1)	53
第10 図	第 1 号住居跡出土遺物	18	第40 図	第 6・7・9 号溝跡 (2)	54
第11 図	第 2 号住居跡 (1)	19	第41 図	第 8 号溝跡	55
第12 図	第 2 号住居跡 (2)	20	第42 図	第 1・2 号井戸跡	56
第13 図	第 2 号住居跡遺物出土状態	21	第43 図	グリッド出土遺物	57
第14 図	第 2 号住居跡出土遺物	23	第44 図	遺構分布図	60
第15 図	第 3 号住居跡	25			
第16 図	第 3 号住居跡出土遺物	25			
第17 図	第 3 号住居跡遺物出土状態	26			
第18 図	第 1 号掘立柱建物跡	28			
第19 図	第 1・2・4・5・6・7・8 号土壙	29			
第20 図	第 3 号土壙	30			
第21 図	第 3 号土壙出土遺物	30			
第22 図	第 9 号土壙出土遺物	31			
第23 図	第 9 号土壙遺物出土状態	32			
第24 図	柵列跡	35			
第25 図	B 区柱穴群全体図	36			
第26 図	B 区柱穴群 (1)	37			
第27 図	B 区柱穴群 (2)	38			
第28 図	B 区柱穴群 (3)	39			
第29 図	B 区柱穴群出土遺物	40			
第30 図	C 区柱穴群	41			

写真図版目次

- 図版扉 調査区航空写真
- 図版 1 遺跡遠景
A区航空写真
- 図版 2 B区航空写真
C区航空写真
- 図版 3 第1号住居跡床面検出状態
第1号住居跡完掘状態
- 図版 4 第2号住居跡床面検出状態
第2号住居跡完掘状態
- 図版 5 第2号住居跡土層
第3号住居跡完掘状態
- 図版 6 第1号掘立柱建物跡
第1号掘立柱建物跡 P 3
- 図版 7 第1号土壙
第2号土壙
第3号土壙
第4号土壙
第5号土壙
第6号土壙
第7号土壙
第7号土壙土層
- 図版 8 第8号土壙
第8号土壙土層
第9号土壙
第9号土壙土層
柵列跡
柵列跡 P 3・4
柵列跡 P 5
- 図版 9 B区柱穴群
G 58P9土層
F 58P5・7
G 58P7
- 図版10 第1号溝跡
第1号溝跡土層
第1号溝跡遺物出土状態
第2号溝跡
第3号溝跡
- 図版11 第4号溝跡
第4号溝跡
第4号溝跡土層
第5号溝跡
第4(右)・5(左)号溝跡
第5号溝跡土層
- 図版12 第6号溝跡
第6号溝跡土層
第6号溝跡遺物出土状態
第7号溝跡
第6(右)・7(左)号溝跡
第7号溝跡土層
- 図版13 第8号溝跡
第8号溝跡土層
第9号溝跡
第1号井戸跡
第2号井戸跡
- 図版14 E区航空写真
E区1～4トレンチ
E区17～19トレンチ
- 図版15 第1・2号住居跡出土遺物
- 図版16 第3号住居跡出土遺物
第3・9号土壙出土遺物
第6号溝跡出土遺物
- 図版17 第1号溝跡出土遺物1～6(表)
第1号溝跡出土遺物1～6(裏)
- 図版18 第1号溝跡出土遺物7～11(表)
第1号溝跡出土遺物7～11(裏)

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため、各種の道路建設工事が進められており、県道東大久保大井線の建設工事は、埼玉県南西部の交通量の増大と地域交通網の整備を図る目的をもって、埼玉県土木部によって計画された。こうした開発事業に対応するために、県教育局指導部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行ない、文化財保護と開発事業との円滑な調整を進めているところである。

平成2年2月20日付け道建第900号で、道路建設課長から文化財保護課長あて「県道東大久保大井線改良事業、橋梁架換事業地内の埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づき、平成2年6月11日付け教文第247号により次のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
伊佐島遺跡 (25-041)	集落跡	平 安 時 代	上福岡市大字駒林字伊佐島

2. 取扱い

上記埋蔵文化財は、現状保存することが望ましい。計画上やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のため発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査を実施する場合は当課と協議すること。

この確認調査の成果に基づいて、道路建設課と文化財保護課は上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、道路網の整備を目的とした建設計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむをえず記録保存の処置を構ずることになった。

発掘調査の実施については、道路建設課、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により、調査方法、調査期間、調査経費について協議を行なった。その結果、平成2年11月から平成3年3月まで調査を実施することが決定された。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届けが提出され、発掘調査は平成2年11月から開始された。調査届に対する文化庁長官からの支持通知番号は、平成3年6月7日委保第5の570号である。

(文化財保護課)

2. 発掘調査と報告書刊行事業の組織

a. 発掘調査（平成2年度）

理事長 荒井修二
副理事長 早川智明
常務理事兼
管理部長 古市芳之

庶務経理

庶務課長 高田弘義
主査 松本晋
主事 長滝美智子
経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 本庄朗人
主事 齐藤勝秀
主事 菊池久

発掘

理事兼
調査部長 吉川国男
調査副部長 塩野博
調査第3課長 宮崎朝男
主任調査員 今井宏
調査員 野中仁

b. 報告書作成事業（平成3年度）

理事長 荒井修二
副理事長 早川智明
常務理事兼
管理部長 倉持悦夫

庶務経理

庶務課長 高田弘義
主査 松本晋
主事 長滝美智子
経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 福田昭美
主事 腰塚雄二
主事 菊池久

整理

資料部長 中島利治
資料部副部長兼
資料整理第1課長 増田逸朗
主任調査員 今井宏

3 調査の経過と方法

1 発掘調査

伊佐島遺跡の発掘調査は、県道東大久保大井線の道路改良事業に伴い平成2年11月1日より平成3年3月31日までの5か月間にわたって実施された。現道と拡幅部分を調査対象とし、総長550m幅12mの東西に非常に長い調査区で、調査対象面積は3,000㎡におよんでいる。調査以前は、未舗装の現道と水田として利用された平坦な地形であった。

11月上旬 現地において川越土木事務所担当者と調査区の確認および調査工程の打ち合わせを行なう。調査区は、便宜的に交差する農道を境に新河岸川寄りからA～E区と呼称し、中甸からD区より調査を開始することとした。調査開始前に調査事務所や囲柵の設置、地元教育委員会へ補助員募集など協力を依頼する。

中甸から表土剥ぎを開始する。D区は、砂が基盤層であり遺構は存在していないことが判明したので、写真撮影や測量を行ない排土置場として埋め戻しを行なう。以後、E区を除き下甸まで表土剥ぎを行なう。26日からB-A-C区の順に補助員による遺構確認作業を行ない、12月上旬に遺構確認を終了する。

12月中旬～1月中旬 A区の第1号住居跡から遺構精査を開始する。第1号溝跡の写真撮影終了後遺構保護のため全遺構にシート掛けを行ないB区の調査にかかる。

1月下旬～2月中旬 B区の遺構精査実施するとともに、E区に細かくトレンチを設定して遺構確認を重機で行なう。E区では、遺構が確認できなかったため、安全確保のため各トレンチとも調査が終了次第順次埋め戻しを行なった。

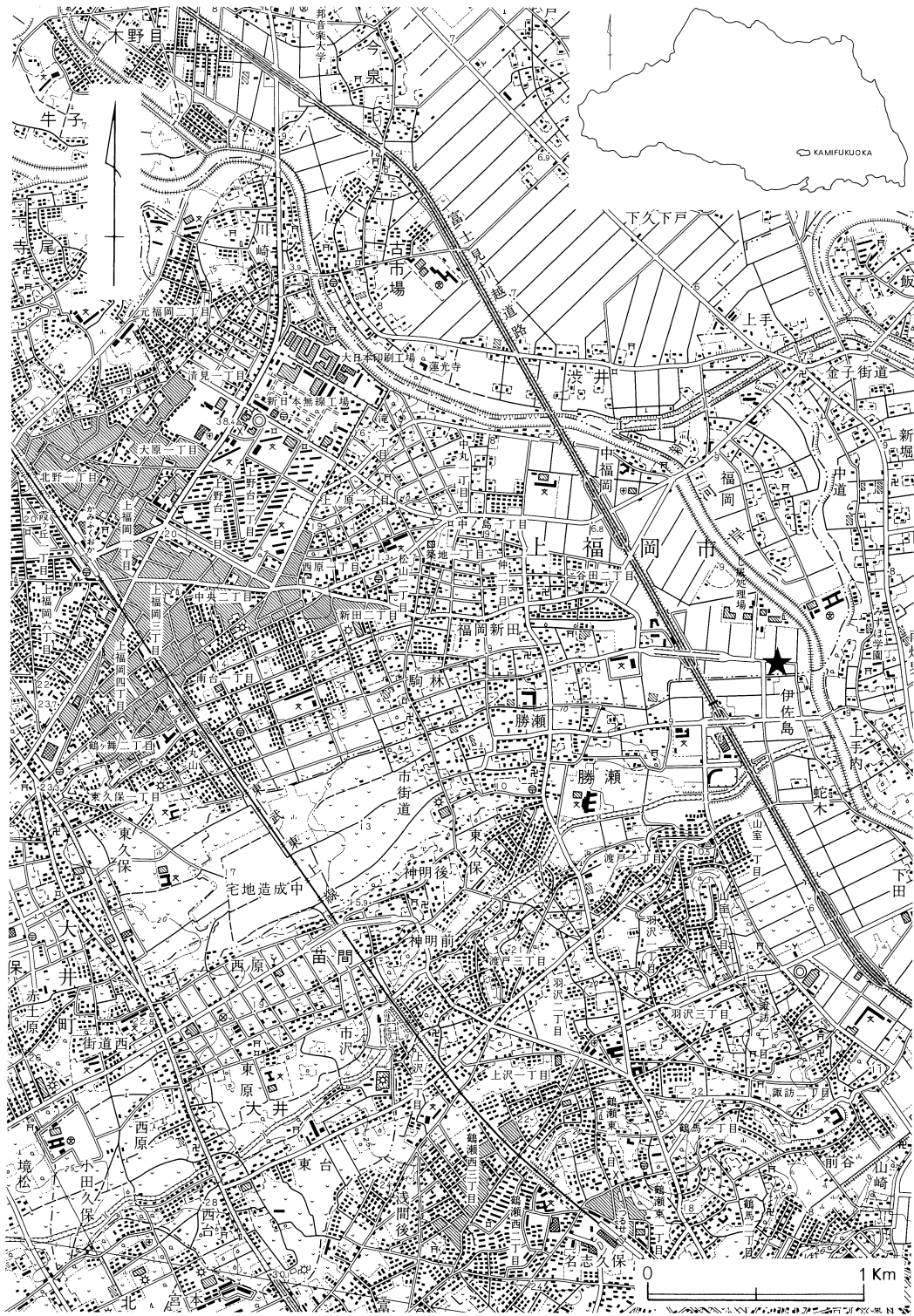
2月下旬～3月下旬 C区の遺構精査を行なう。遺構精査をすべて終了し、実測や広範囲の写真撮影を行なう。中甸に航空写真・航空写真測量を実施する。下甸に調査事務所・器材の撤収、調査区の埋め戻しを行ない、すべての調査を終了した。

2 整理事業

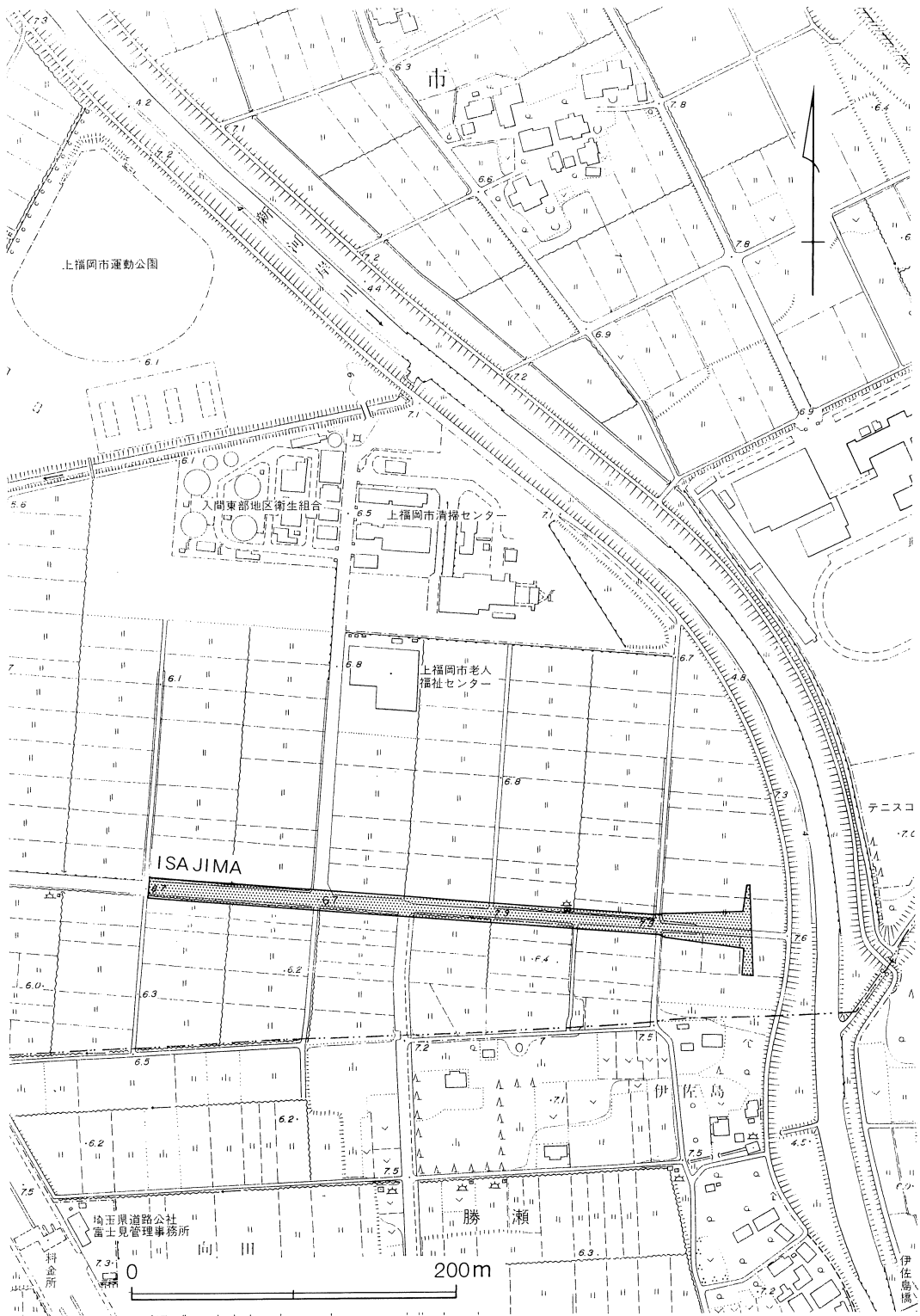
報告書作成作業は、平成3年12月1日から平成4年3月31日まで実施した。

12月～1月 遺物の注記および接合・復元、並行して図面整理を行なう。図面整理終了後、遺構図面のトレースを開始する。下甸、復元を終了した遺物から実測を始め、実測の終了したものから随時トレースを行なう。

2月～3月 遺構・遺物のトレースを終了したものから、順次版下作成を開始する。同時に遺構写真選択・遺物写真撮影を行なう。報告書の割り付けを行ない、資料収集および原稿執筆を始める。原稿執筆および編集を終了し、報告書を刊行する。



第1図 遺跡の位置



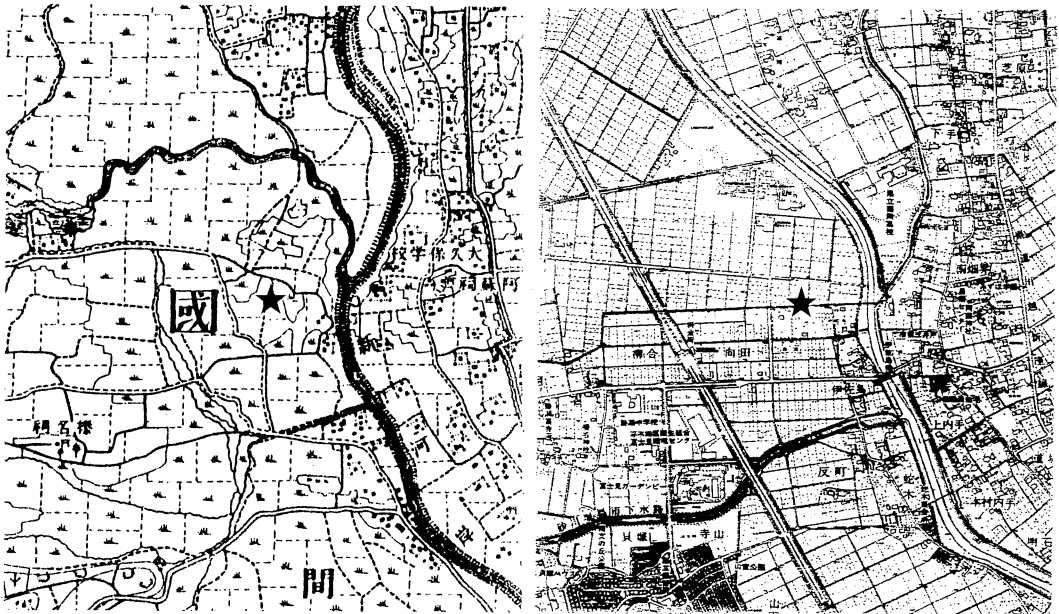
II 遺跡の立地と環境

伊佐島遺跡は、東武東上線「上福岡駅」から東方へ3 kmほど離れた上福岡市大字駒林字南伊佐島に所在する平安時代の集落遺跡である。荒川水系の一つで入間台地の水流を集め、川越市の北をめぐり荒川に沿って南下し、墨田川にそそぐ新河岸川の右岸に立地している。

遺跡のある地域は、大宮台地と武蔵野台地との間で、荒川を中心とする大小の河川群が形成した沖積地の荒川低地に該当している。低地内には無数の自然堤防が存在しているが、この地域は荒川と新河岸川の流路が最も接近する地点であり、特に自然堤防が発達した地域である。上福岡市下福岡地区や富士見市東大久保・下南畑地区などが所在する自然堤防がその代表例として挙げられる。伊佐島遺跡もそれらに含まれる小規模な自然堤防上に所在している。

現在、遺跡が所在する自然堤防の大部分は、第二次世界大戦中の耕地整理で削平され水田化し、伊佐島地区の集落周辺と水田中の道路部分にのみ旧地形が残るだけである。明治18年に作製された迅速図（第2図）を見ると、遺跡の所在する自然堤防は、新河岸川に沿ってほぼ南北に長く発達し周囲を新河岸川とその支流で囲まれ、現在の地形が人為的に変更されたことが理解される。

遺跡周辺の自然堤防上には、城山遺跡（第3図14）・上福岡No34遺跡（15）・上内手遺跡（16）・山形遺跡・難波田氏館跡が確認されている。これらの遺跡で発掘調査が実施されたのが、富士見市教育委員会による伊佐島遺跡と難波田氏館跡・山形遺跡である。伊佐島遺跡では2地点行なわれているが、遺構は検出されていない。難波田氏館跡は、10数次にわたる調査によって現存する「城絵図」と細部の遺構まで一致することが確認され、遅くとも14世紀には中世城館として機能を開始していたことが判明しつつある。また、同調査では古墳時代前期五領期の壺形土器が検出され、自然



第2図 遺跡周辺（左 迅速図・右 地形図 縮尺1:25,000）

堤防上の遺跡形成の初現と考えられていたが、今回の伊佐島遺跡の調査で弥生時代後期にまでさかのぼることが確認された。

遺跡の西に展開する台地は、多摩川古扇状地の北辺に形成された武蔵野台地の扇端部に相当し、標高16～18mの武蔵野段丘面と標高 8～10mの立川段丘面の高位・低位 2 段の台地で構成されている。荒川低地との比高差は、武蔵野段丘面で約10mを測る。台地上には、昭和12年に発掘調査が実施され縄文前期関山・黒浜期の土器と遺構の研究史上重要な位置を占める上福岡貝塚 (1) を初めとする各時代の遺跡が、大小の開析谷を挟んで存在している。これらの遺跡には、上福岡・富士見の両市教育委員会が開発のたびに発掘調査を実施し、それぞれの詳細が解明されつつある。

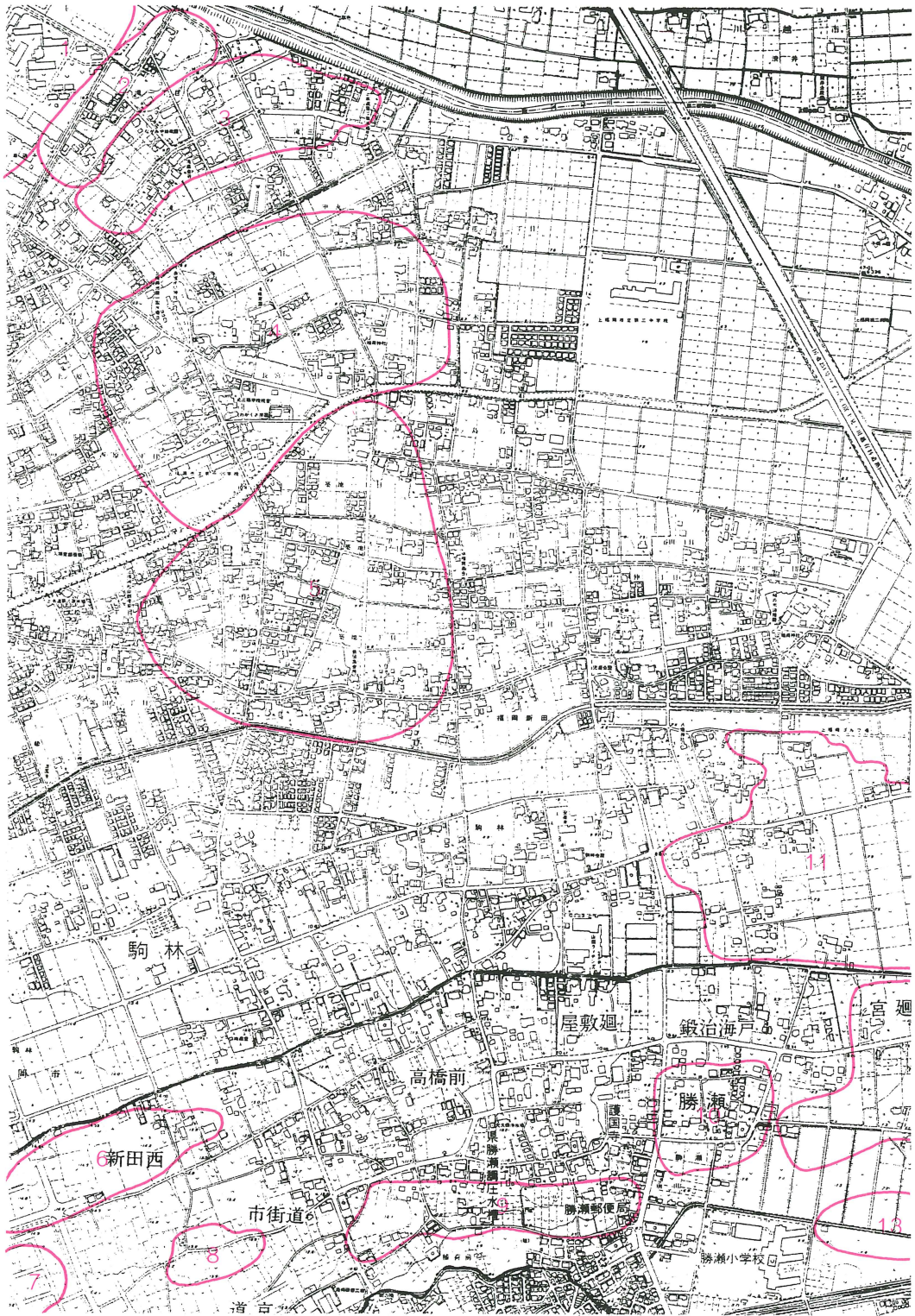
ここでは、掲載した遺跡ごとにその概略を説明することとする。上福岡貝塚は、高位の武蔵野段丘面に立地している。先述の調査では、縄文時代前期住居跡 8 軒と古墳時代前期五領期住居跡数軒が確認され、近年の調査で新たに奈良時代の住居跡が加えられている。隣接する権現山遺跡 (2) も武蔵野段丘面に展開しているが、台地崖線に沿って分布する35m級の前方後方形周溝墓を主墳とする 9 基の周溝墓群で良く知られている。前方後方形周溝墓は、前方部がやや短く、後方部が撥形に開く形状が想定され、周溝内から五領 I 式の高坏が出土している。そのほか縄文中期加曾利 E 式期、古墳時代五領・鬼高期、奈良・平安時代の住居跡が総数10軒程調査されている。滝遺跡 (3) は、武蔵野・立川両段丘面にまたがる広範囲の遺跡である。これまでの 8 次にわたる調査で権現山周溝墓群と同時期の住居跡を主体として、鬼高期や奈良時代の住居跡などが検出され、墓域と集落域という権現山周溝墓群と密接な関係が想定されよう。長宮遺跡 (4) は、滝遺跡と小開析谷を挟み立川段丘面に立地している。17次の調査が実施されており、遺跡の中心をなす中世から近世にかけての溝跡・井戸跡・土壇・ピット群などの遺構と縄文前期関山期・古墳時代後期鬼高期の住居跡が検出されている。松山遺跡 (5) は、長宮遺跡に続く遺跡で標高10mの立川段丘面に立地している。9 次にわたる調査で、規則性を持った 9 世紀前半の単一時期と思われる住居跡が 4 軒確認されている。

伊佐島遺跡に近接した鷺森遺跡 (11) は、標高 7 m の上福岡市域で最も低い立川段丘面に立地している。昭和55年の小学校建設時の調査では、縄文前期の集落遺跡であることが明らかになり諸磯期住居跡が14軒と多数の土壇が検出された。市境を挟み宮廻遺跡 (12) と対峙するが、両遺跡間には埋没谷が存在し、遺跡は連続しない事が確認されている。宮廻遺跡は、富士見市教育委員会が第 1～15 地点の調査を実施し、縄文前期黒浜期および平安時代の集落を確認している。

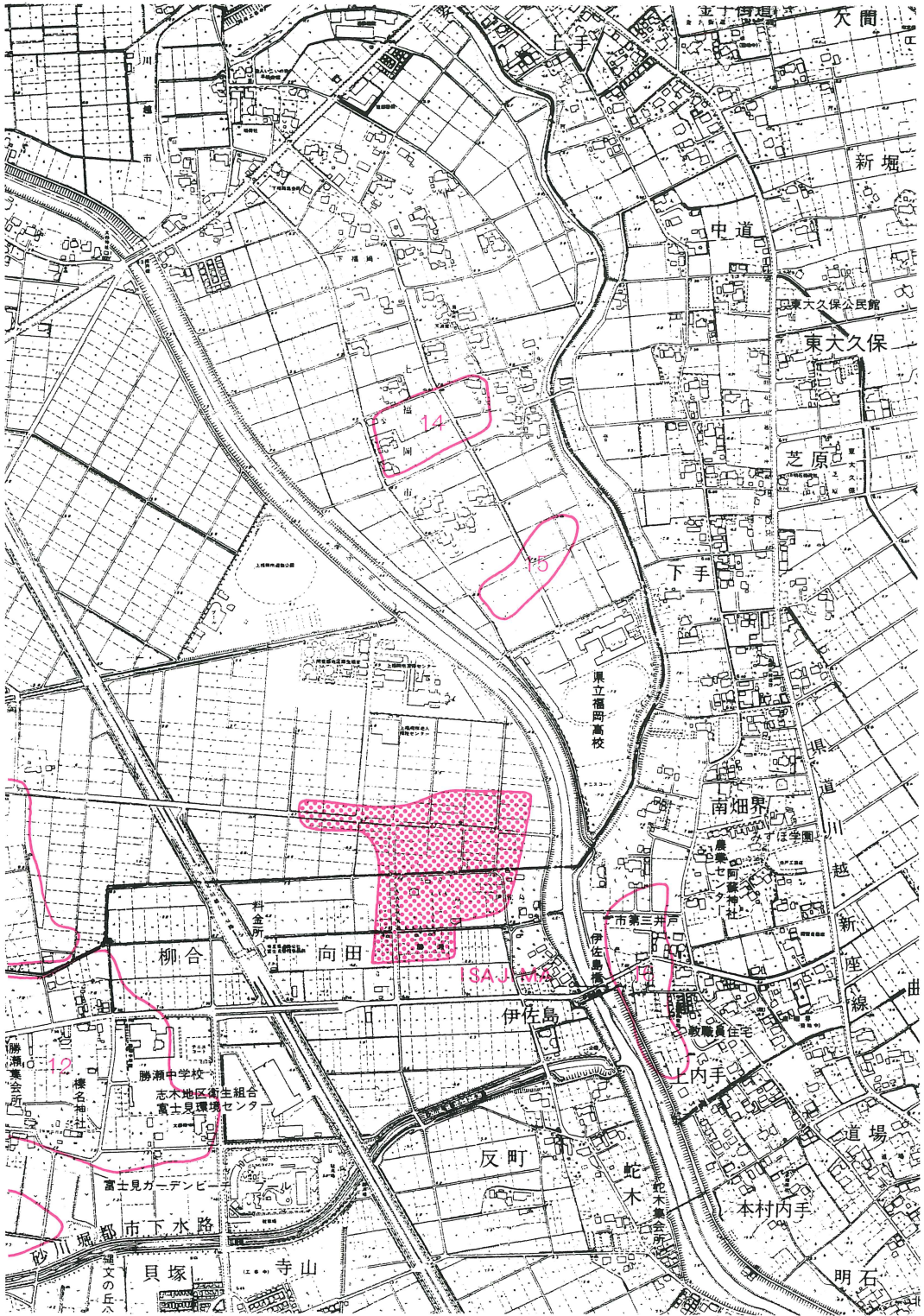
以上、調査結果の羅列を行ってきたが、上福岡市域では台地・自然堤防を問わず、伊佐島遺跡で確認された弥生時代終末期の遺構が初めて検出されたことがわかる。今後当遺跡周辺の調査が進めば、台地上の拠点集落として知られる富士見市打越・中通遺跡との比較を通し該期の様相が少しは進展するものと思われる。

第 3 図掲載遺跡

1. 上福岡貝塚
2. 権現山遺跡
3. 滝遺跡
4. 長宮遺跡
5. 松山遺跡
6. 稲荷久保遺跡
7. 稲荷久保南遺跡
8. 市街道遺跡
9. 稲荷前遺跡
10. 鍛冶海戸遺跡
11. 鷺森遺跡
12. 宮廻遺跡
13. 谷田遺跡
14. 城山遺跡
15. 上福岡市No34遺跡
16. 上内手遺跡



第3図 周辺の遺跡



Ⅲ 遺跡の概要

伊佐島遺跡は、荒川低地内の標高7～8mの自然堤防状に立地しており、弥生時代後期と平安時代には集落が形成され、中世には居館が営まれた遺跡である。

遺構は、現道のおよそ40cm下から検出されているが、水田化のための耕地整理とその後の耕作によって、遺構の多くは削り取られ、また、調査区が道路幅という制約があり、全形を知ることのできた遺構が無い状態であった。遺構確認面の標高は、6.5～7mで西から東へ緩く下っている。

今回の調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土壇9基、柵列跡1列、柱穴群2群、溝跡9条、井戸跡2基である。出土した遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・常滑を初めとする中世陶器などの土器類であった。

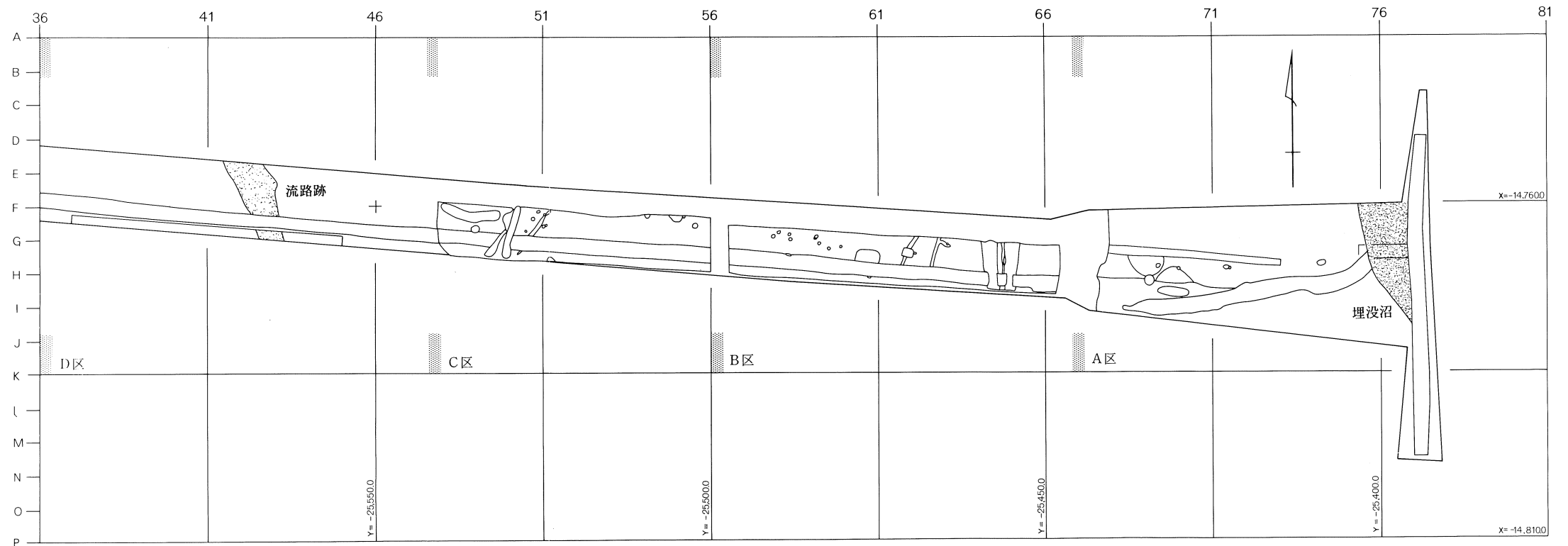
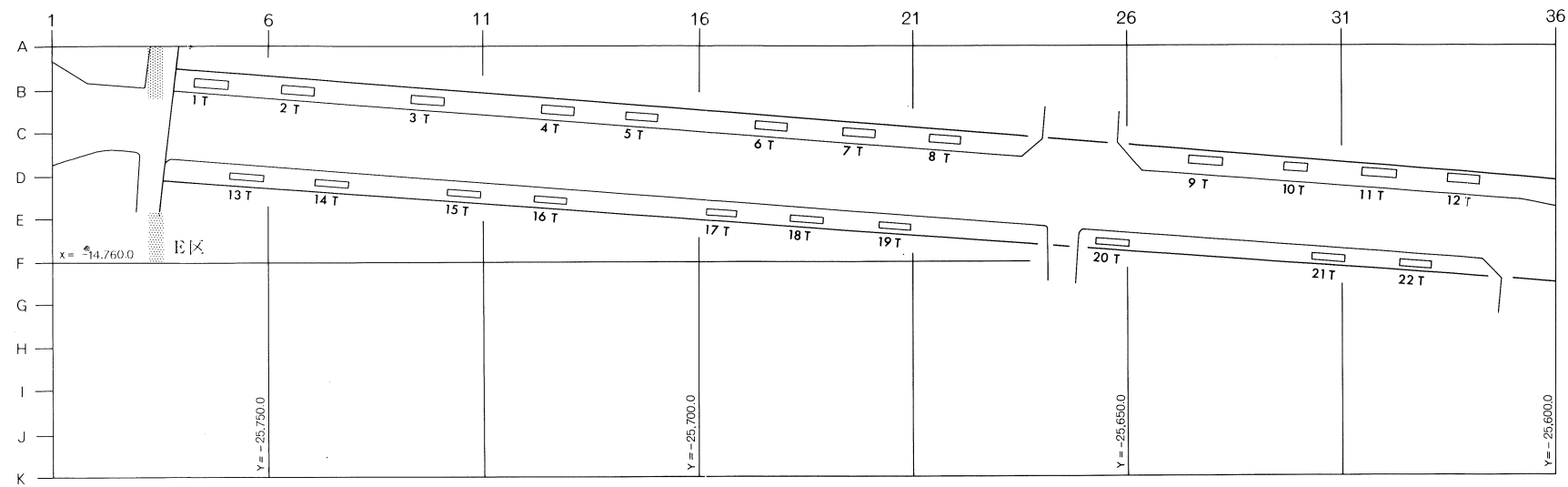
弥生時代の2軒の住居跡は、調査区の東端部側に存在している。ほぼ同時期の住居跡であるが、軒を接する様に近接して確認されている。2軒とも検出状態は不良であるが、第2号住居跡から台付甕を中心として高坏や壺などを含む11点の資料が出土している。また、第4号溝跡は、これらの住居を囲む環濠と考えられる。

平安時代の遺構としては、住居跡・掘立柱建物跡・土壇・溝跡・柱穴群があり、伊佐島遺跡の中核を成すものである。住居跡は、調査区中央から検出され、9世紀代の土師器甕や須恵器蓋・坏が出土している。掘立柱建物跡と柱穴群は、B・C区に集中して分布している。柱穴群は、本来掘立柱建物跡であったと考えられたので、調査時に平・断面観察を丹念に行なったが、検出状況が思わしく無く、掘立柱建物跡として把握することができなかった。土壇も同区に集中するが、第3・9号土壇から住居跡と同時期の須恵器坏を中心とする遺物が検出されている。溝跡は、住居跡や掘立柱建物跡などを囲む状態で検出されており、区画としての機能が考えられる。

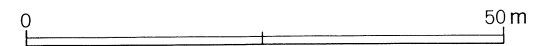
中世の遺構は、溝跡と柵列跡がある。断定は不可能であるが、中世居館の一部と推定され、同時期に機能していた難波田氏館跡との関連が予想される。遺跡の基本層序は次の通りである。

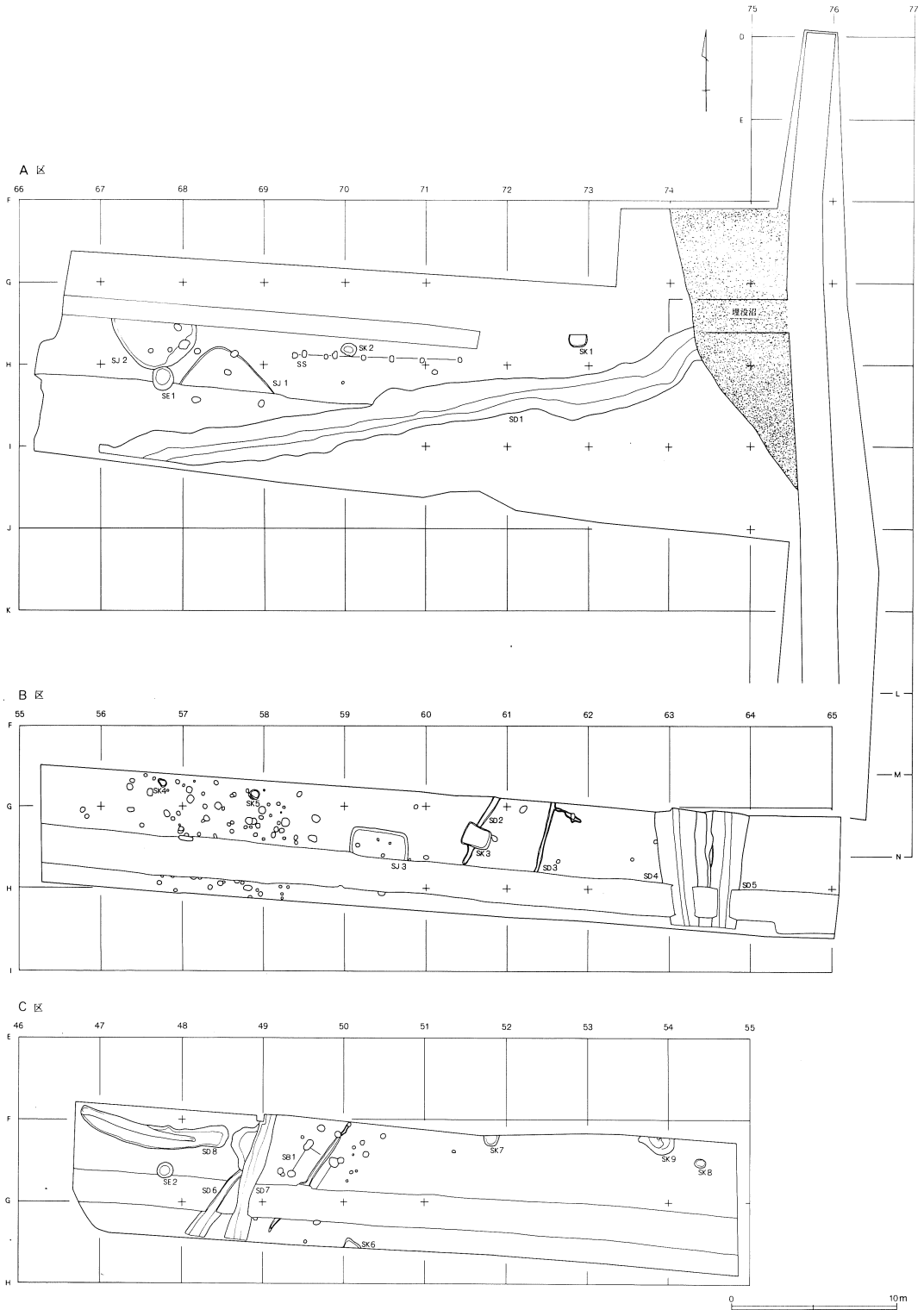
<p>480</p>	<p>I 暗褐色土</p> <p>II 暗褐色土</p> <p>III 褐色土</p> <p>IV 明黄褐色土</p> <p>V 明黄褐色砂質土</p> <p>VI 茶褐色砂</p> <p>VII 青灰色粘土</p>	<p>水田耕作土</p> <p>水田床・多量の赤褐色鉄分が沈着している。</p> <p>中世遺構の掘り込み面・少量の炭化物と白色火山灰を含む。下部に遺構確認面の明黄褐色土が混入し、弱い粘性がある。</p> <p>中世以前の遺構確認面・明黄褐色土粘質土と茶褐色砂の混土層。V層に比べ砂の混入量が少ない。</p> <p>明黄褐色土粘質土と茶褐色砂の混土層。IV層に比べ砂と粘質土の比率が逆転している。</p> <p>茶褐色鉄分を多量に含む。</p> <p>部分的に茶褐色砂が混入する。</p>
------------	--	--

第4図 基本層序



第5図 調査区全測図(1)





第6図 調査区全測図(2)

IV 検出された遺構と遺物

1 住居跡 (S J)

第1号住居跡 (第7・8・9図)

A区の西端よりのG・H69Gridに位置し、住居の南側約3/4が水田化のため削平され消滅し、北側コーナーに近い東辺も掘り方底面に達するG69P1に切られている。そのため全体の形態・規模・主軸方位など不明である。残存しているのは、北側のコーナーを含む北辺と東辺の一部で、それぞれ3.2m・4.45mを測る。検出された柱穴から推定すると4.8m×6.0mほどの南北を主軸とする隅丸長方形を呈する住居跡と推定される。

覆土は、掘り方を中心に4層に分層できたが、確認面から床面まで5~15cmと浅く、埋没過程は明瞭でない。床面は典型的な貼床で、土層断面(6層)でも明瞭に観察できた。全体に堅く踏み固められ概平坦で、一部に炭化物が層状に薄く堆積していた。掘り方は、床面から25cmの深さで、底面の凹凸が著しいが、床下土壌などの施設は存在していなかった。壁は、地山の明黄褐色土をほぼ垂直に掘り込んでいる。

柱穴は、水田下から2基(P2・P3)、住居内から1基(P1)の3基が検出された。柱穴の位置関係から4本支柱穴の住居と考えられる。また、床面検出時に確認できなかったことや覆土の状態から、3本の柱とも抜き去った後に埋没したものと推定される。柱穴の掘り込みは、直径40~45cm、深さ41~52cmと深くしっかりしたものである。炉跡および周溝は、存在していなかった。

遺物は、遺構の状態が不良であるため点数としてはわずか26点であり、完形もしくは完形に近い土器は見られず、すべて破片の状態出土している。出土状態(第9図)は良好で、すべて住居に伴うものと推定される。平面分布では北壁側に集中し、垂直分布では4点がわずかに貼床内に食い込むが、他はすべて床面上の出土状態を示している。

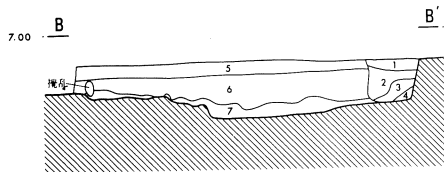
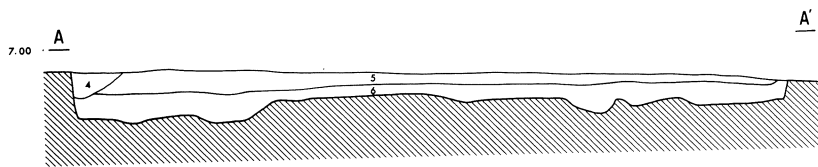
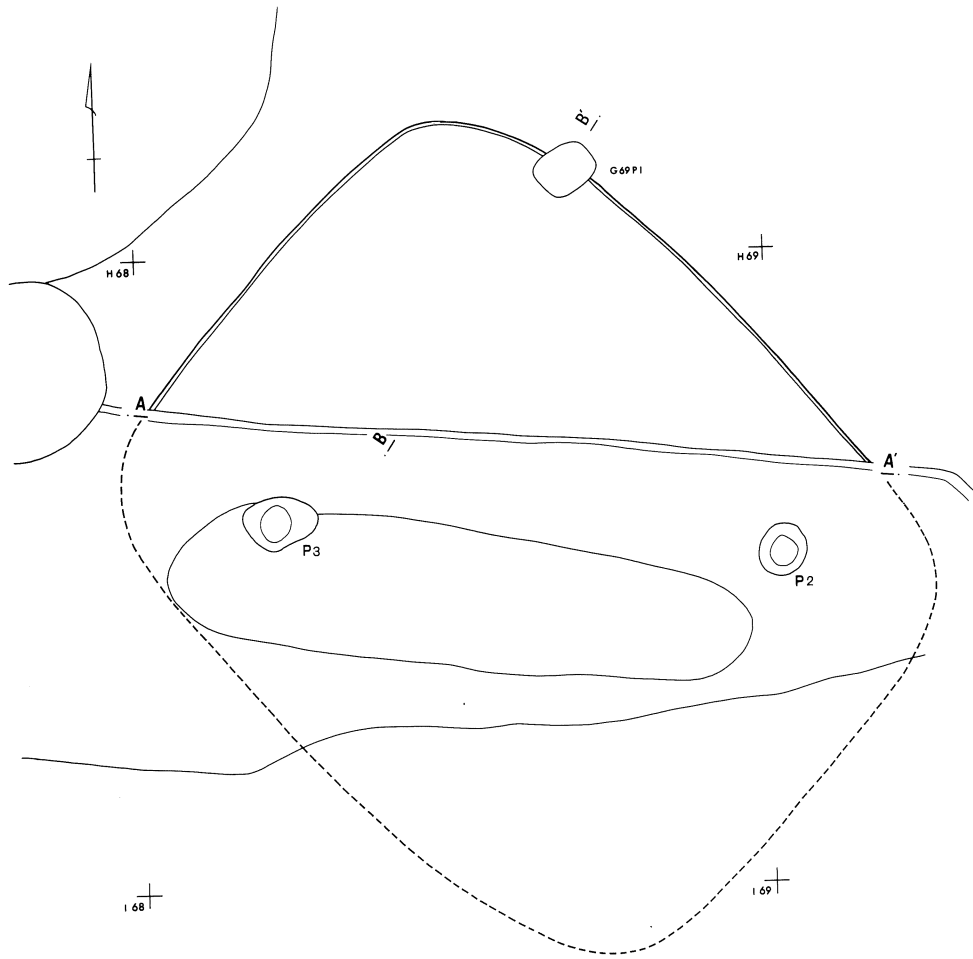
第1号住居跡出土遺物 (第10図)

1 鉢 推定口径26cm、脚が付くものと推定され、赤彩は不明である。胴部外面は、一部にハケ整形痕が残されているが、ハケ整形後ヘラ削りが施され概平滑面となっている。内面は、より丁寧なヘラ磨きが行なわれ滑沢面を呈し、ハケ整形痕が消滅している。

口縁部は、内外面ともナデ整形が施され、また、指で押えられ体部に比べ薄く仕上げられている。口唇部は丸く収められわずかに外側に突出している。胎土には、白・黒色砂粒を多量に含む。焼成は良好、色調は茶褐色である。

2 壺 推定口径10.8cm・器高17cm、口唇部と底部を欠失している。胴部下半が下膨れの小形壺。器面が荒れているため細かい整形は不明であるが、ハケ整形の後ヘラ削りが施されていたものと推定される。内面には不明瞭であるがヘラ削り痕が認められる。

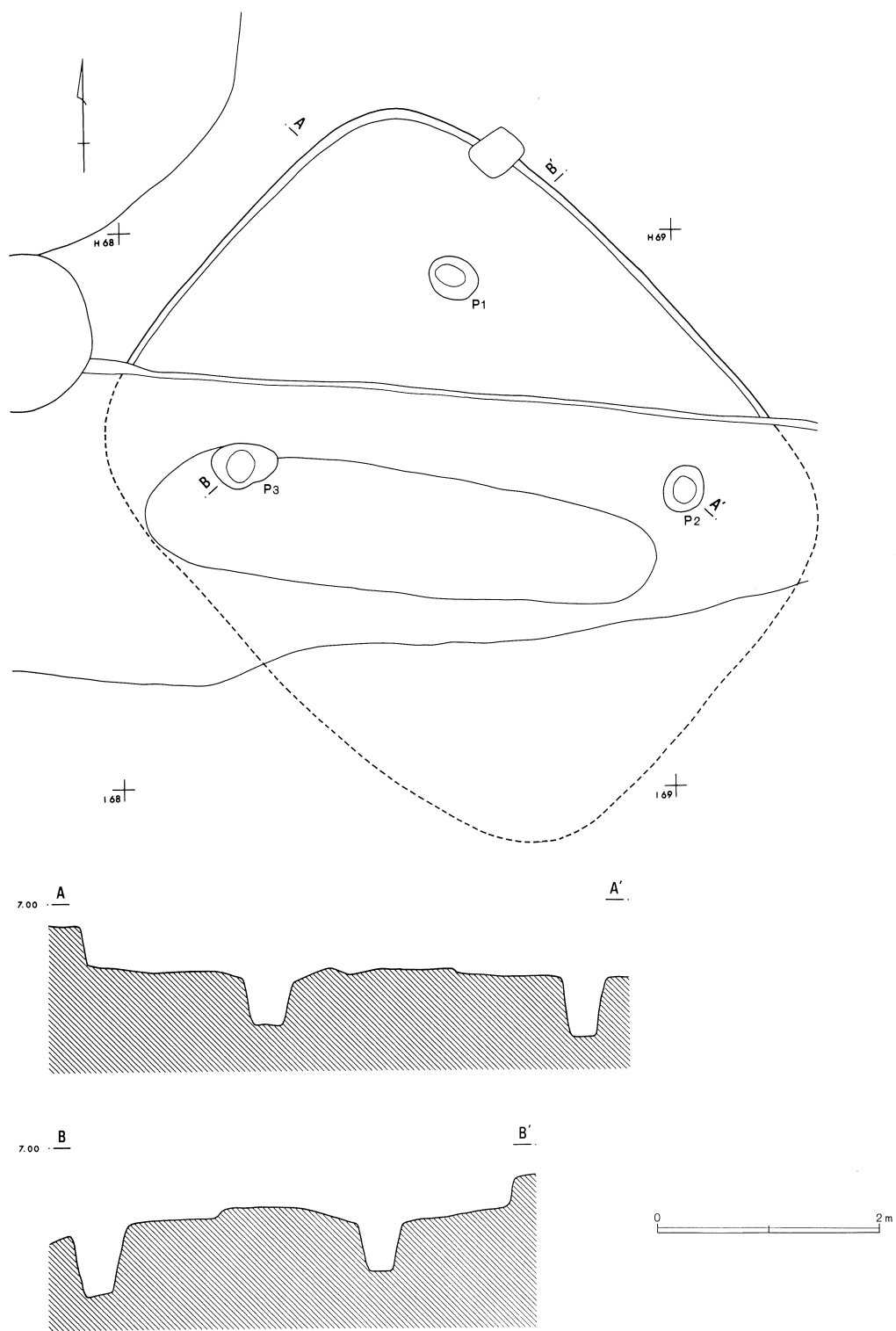
胎土には、赤色・透明砂粒を多量に含むため器面がザラついている。焼成は、良好で赤褐色を呈している。



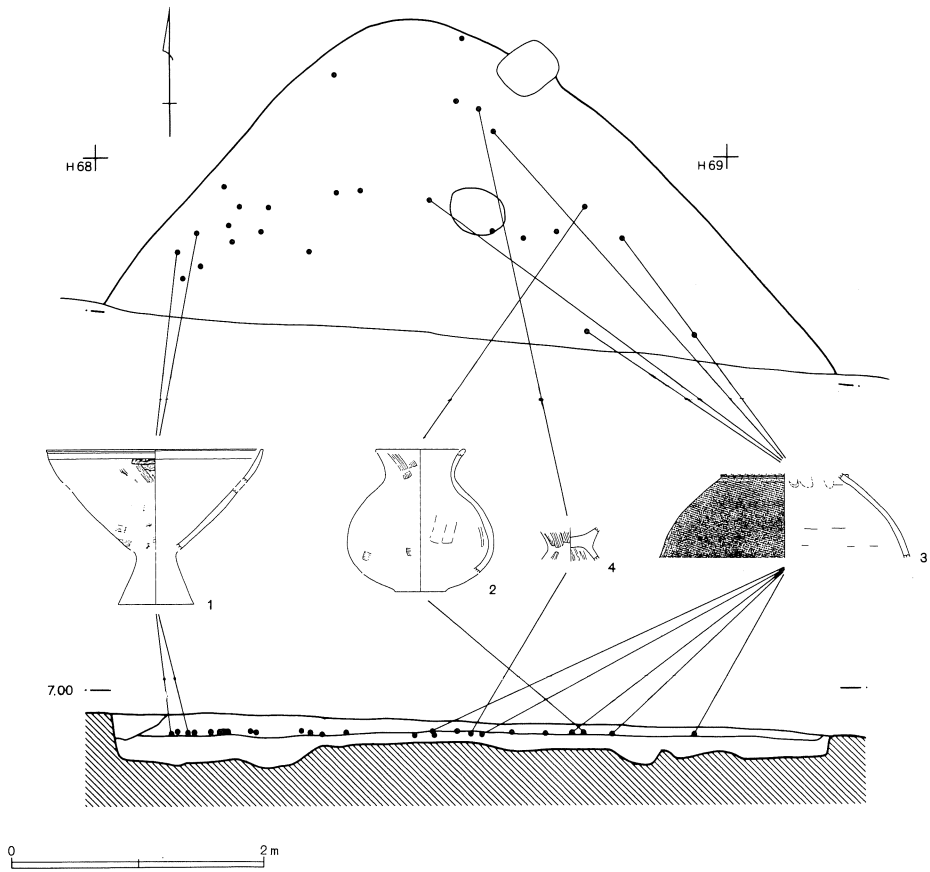
- | | | |
|---|------|--------------------------------|
| 1 | 褐灰色土 | 明黄褐色砂質土をブロック状に多量に含む。粘性弱い。 |
| 2 | 褐灰色土 | 明黄褐色砂質土ブロック少量含む。弱い砂質。 |
| 3 | 灰褐色土 | 明黄褐色砂質土ブロック・炭化物粒・焼土粒を少量含む。 |
| 4 | 褐色土 | 基盤層の明黄褐色土を多量に含む。粘性強い。 |
| 5 | 黒褐色土 | 明黄褐色土を極少量含む。粘性強い。住居跡床面炭化物微量含む。 |
| 6 | 黒褐色土 | 明黄褐色土をブロック状に多量に含む。やや砂質が強い。 |
| 7 | 明黄褐色 | 基盤層に黒褐色土をブロック状に含む。 |



第7図 第1号住居跡(1)



第8图 第1号住居跡(2)



第9図 第1号住居跡遺物出土状態



第1号住居跡遺物出土状態

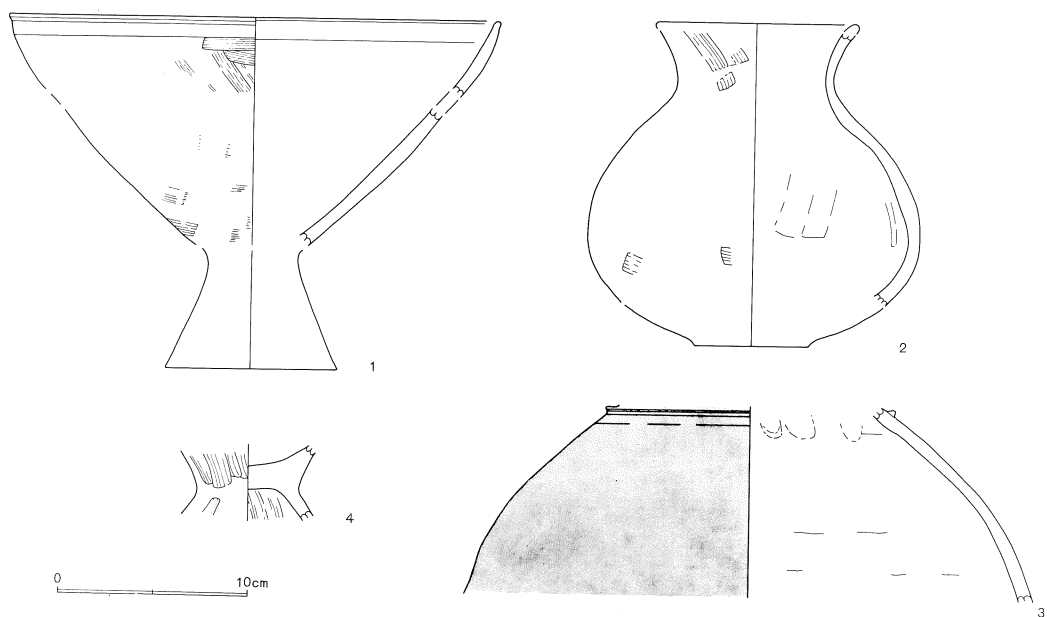


第1号住居跡遺物出土状態

3 壺

頸部での推定径14.2cm、球形の胴部から直立ぎみに口縁部が立ち上がるものであろう。頸部の接合部には、上部が平坦面をなす断面三角形の隆帯が貼付されている。

外面は器面調整の整形痕がまったく観察できないほど丁寧にヘラ磨きが行なわれて、赤彩が施されている。内面もヘラ削りが加えられているが、胴部中位にわずかに



第10図 第1号住居跡出土遺物

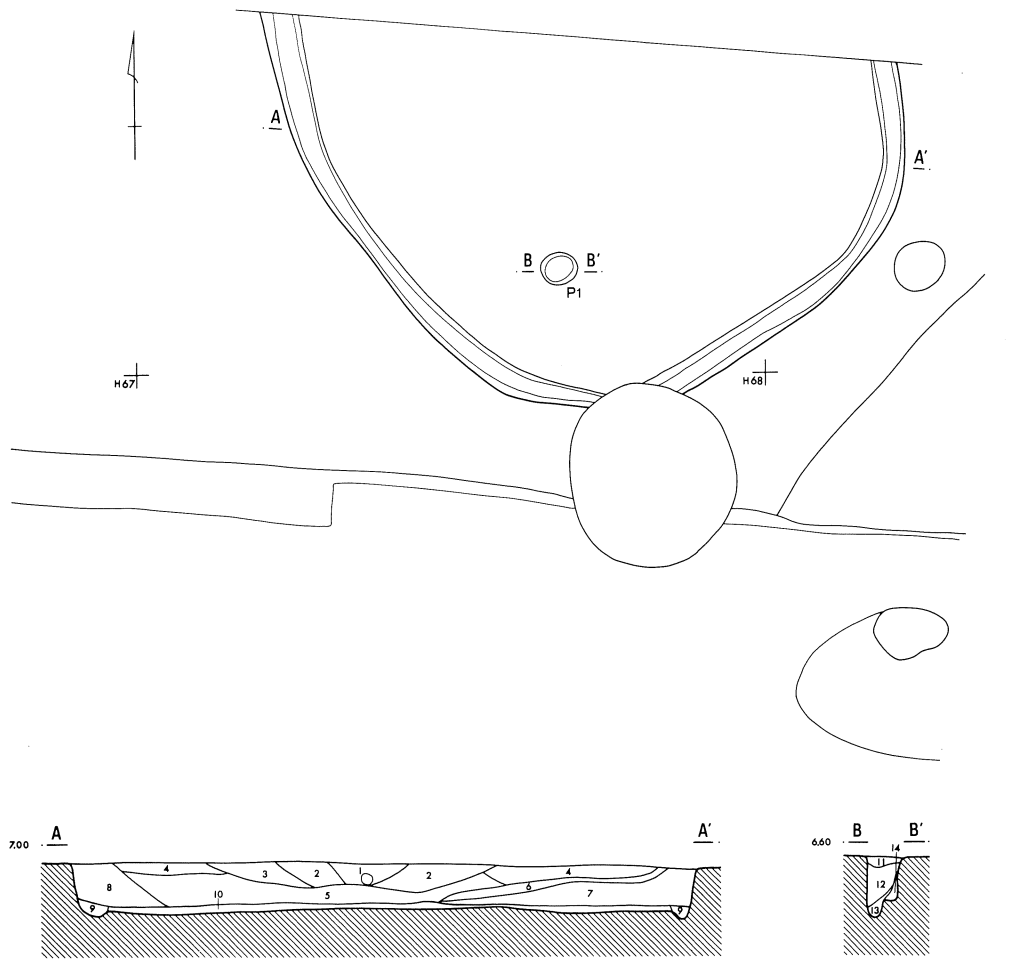
粘土紐の接合痕が残り、頸部には指圧痕跡が観察される。胎土には黒色砂粒を少量含む。焼成は良好、明茶褐色を呈している。

- 4 台付甕 接合部での直径 5.6cm、残高 4.0cm。内外面にハケ整形痕が観察される。外面の整形は脚部から胴部側へ施されている。胎土は、多量の赤色砂粒を含み器面がザラついている。二次加熱を受けやや脆い。色調は赤褐色。

第2号住居跡（第11・12・13図）

A区西端のG68・69Gridに位置し、約1mの間隔をあけ第1号住居跡の西側に隣接して検出されている。住居跡の北側約2/3を水路や水田造成のために削平され、南側コーナーの一部も第1号井戸跡に切られて消滅している。そのため詳細な規模や形状など不明である。残存部から推定すると、長辺約6m・短辺4.5m、南北方向を主軸とする不整楕円形を呈するものと考えられる。

覆土は、住居跡中央の最上層に水田供給用のエンビ管理設の客土が存在しているが、他には攪乱は存在していない。確認面から床面までの深さ32cm、長時間の自然埋没状態を示している。床面は第1号住居跡と同様に貼床（第10層）が見られ、よく踏み固められ硬化面を呈していた。壁は、明黄褐色土を掘り込みほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴は、床面検出時に主柱穴1基(P1)検出でき直径28cm・深さ48cmのしっかりしたもので、柱を埋設する部分が一段深く掘り込まれている。また掘り方精査時に主柱穴P1に対応するP2が検出された。直径45cm・深さ26cmとP1に比較して掘り込みが浅いものである。覆土の堆積状態や遺物の出土状態から、両者の柱とも抜き去られた後に埋没したと考えられる。壁直下には、幅18cm前後の周溝が全周するようである。貼床は、地山の明黄褐色土ブロックを多量に含む黒褐色土が貼られ、平均7cmの層厚であった。貼床下からは、南壁下に周溝から連続する溝と2基の浅いピットが検出された。炉跡は、検出することができなかった。



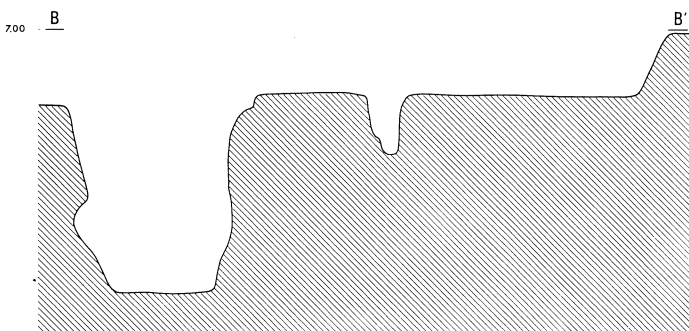
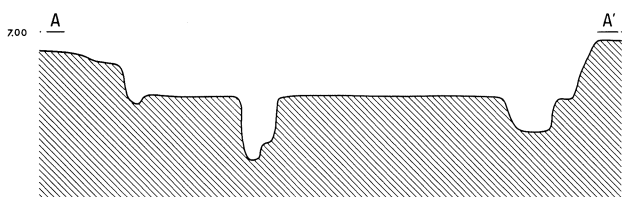
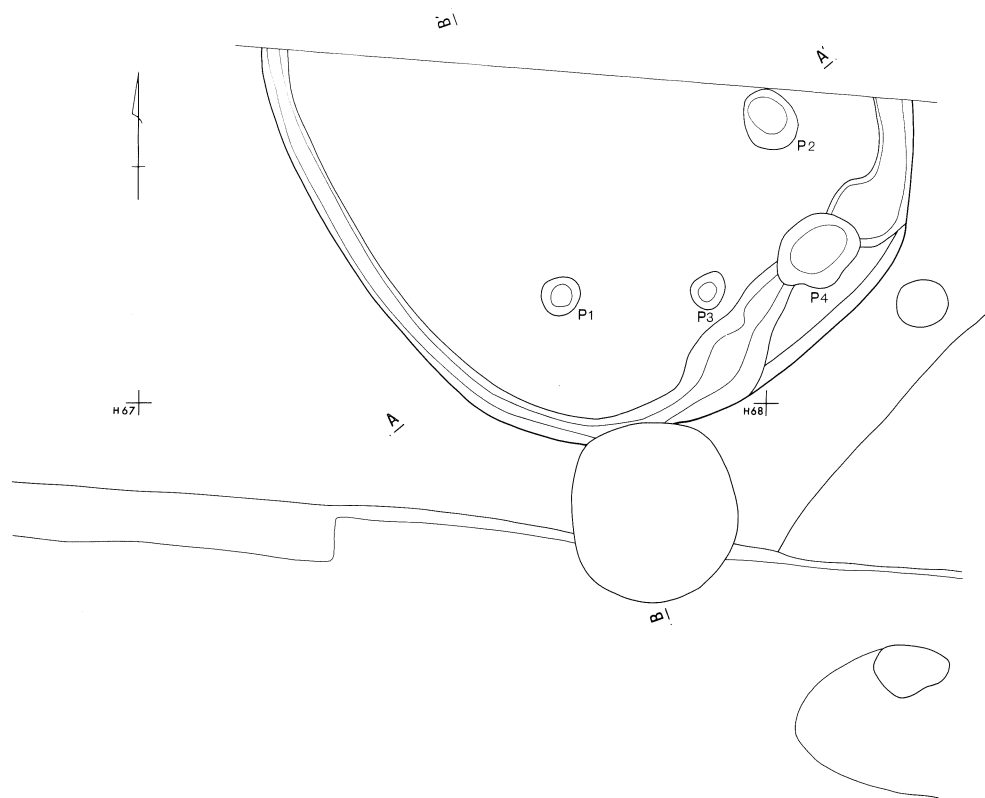
- | | | | |
|---------|-------------------------------|---------|------------------------------|
| 1 褐灰色土 | 客土 | 11 暗褐色土 | 明黄褐色土を少量含み粘性やや強い。焼土粒・炭化物粒含む。 |
| 2 黄褐色土 | 炭化物粒を微量含む。砂質強い。 | 12 暗褐色土 | 明黄褐色土を多量に、焼土粒・炭化物を少量含む。 |
| 3 黄褐色土 | 炭化物粒を微量含む。砂質強い。1層に比べ色調がやや暗い。 | 13 黒色土 | 下部に少量の焼土を含む。粘性強い。 |
| 4 黒褐色土 | 微量の炭化物を含む。砂質強い。 | 14 黄褐色土 | 砂質強い。 |
| 5 黒褐色土 | 明黄褐色土を少量霏降り状に含む。粘性やや強く硬いしまる。 | | |
| 6 黒色土 | 少量の炭化物含む。粘性弱い。 | | |
| 7 褐色土 | 明黄褐色土を多量にブロック状に含む。粘性強く硬いしまる。 | | |
| 8 明褐色土 | 明黄褐色土を霏降り状に少量含む。粘性強く硬いしまる。 | | |
| 9 明褐色土 | 明黄褐色土を霏降り状に少量含む。8層に比べより硬いしまる。 | | |
| 10 黒褐色土 | 貼り床。明黄褐色土を多量に含む。踏み固められ非常に硬い。 | | |

第11図 第2号住居跡(1)

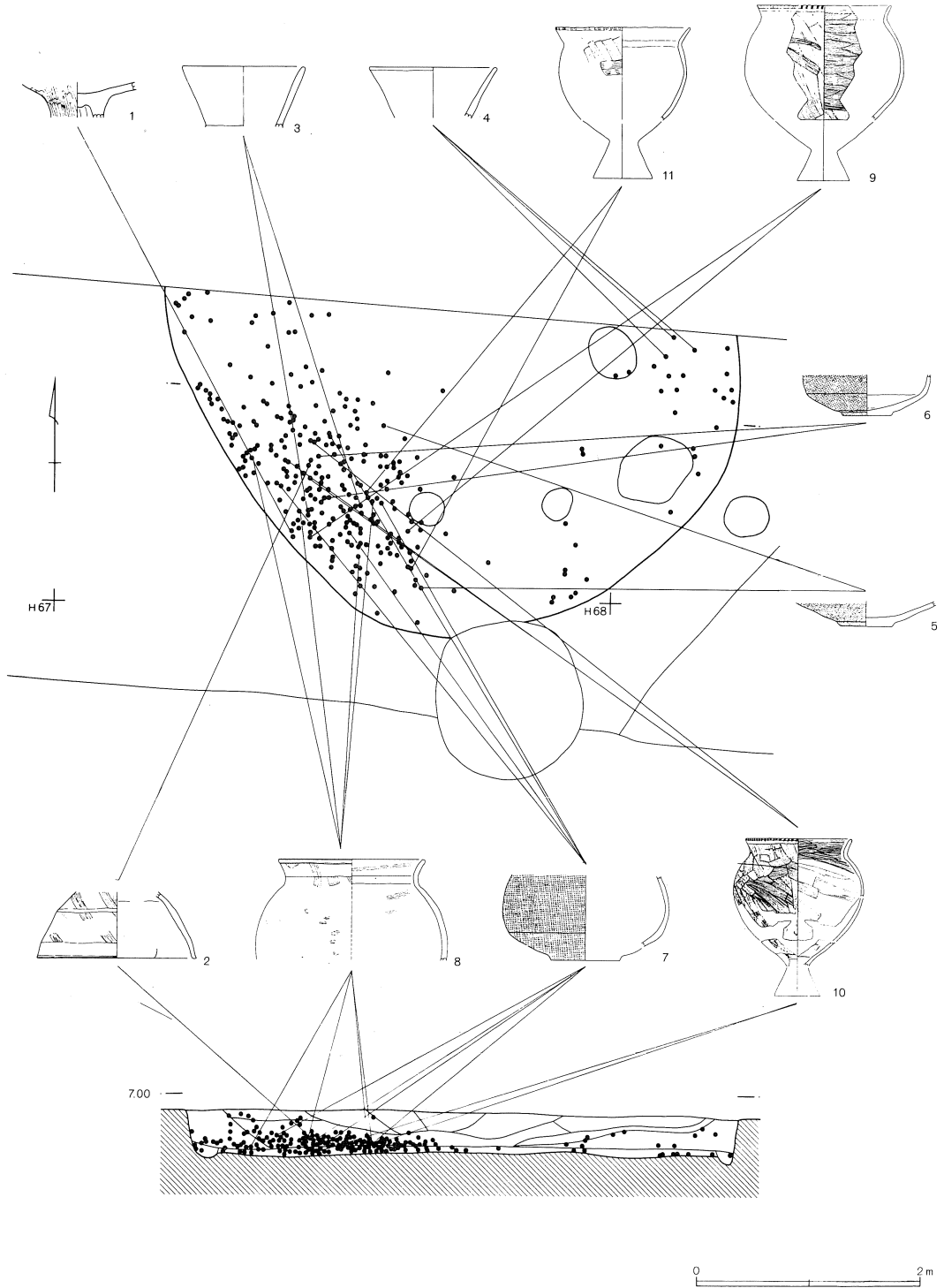
遺物は、280点あまり出土している。第1号住居跡と同様に完形もしくは完形に近い土器は存在せず、すべて破片の状態で出土している。

出土状態(第13図)は、平面分布では西壁側に偏在し、約9割の遺物が集中している。垂直分布では床面上に集中する傾向が見られ、覆土上層に浮いた状態のものは少ない傾向が観察される。遺物の多くは、住居廃絶時や住居廃絶後間もない時期に廃棄されたものと思われる。

接合した遺物の点数は少ないが、同層中での接合関係が観察された。



第12图 第2号住居跡(2)



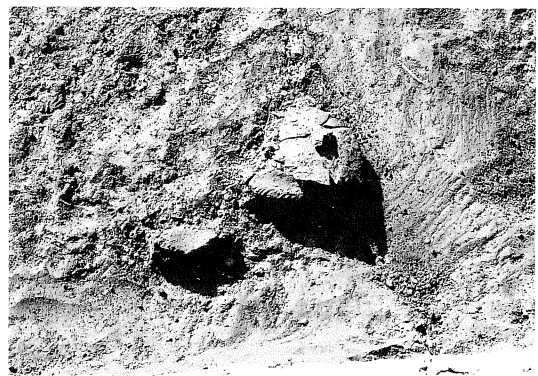
第13図 第2号住居跡遺物出土状態

第2号住居跡出土遺物（第14図）

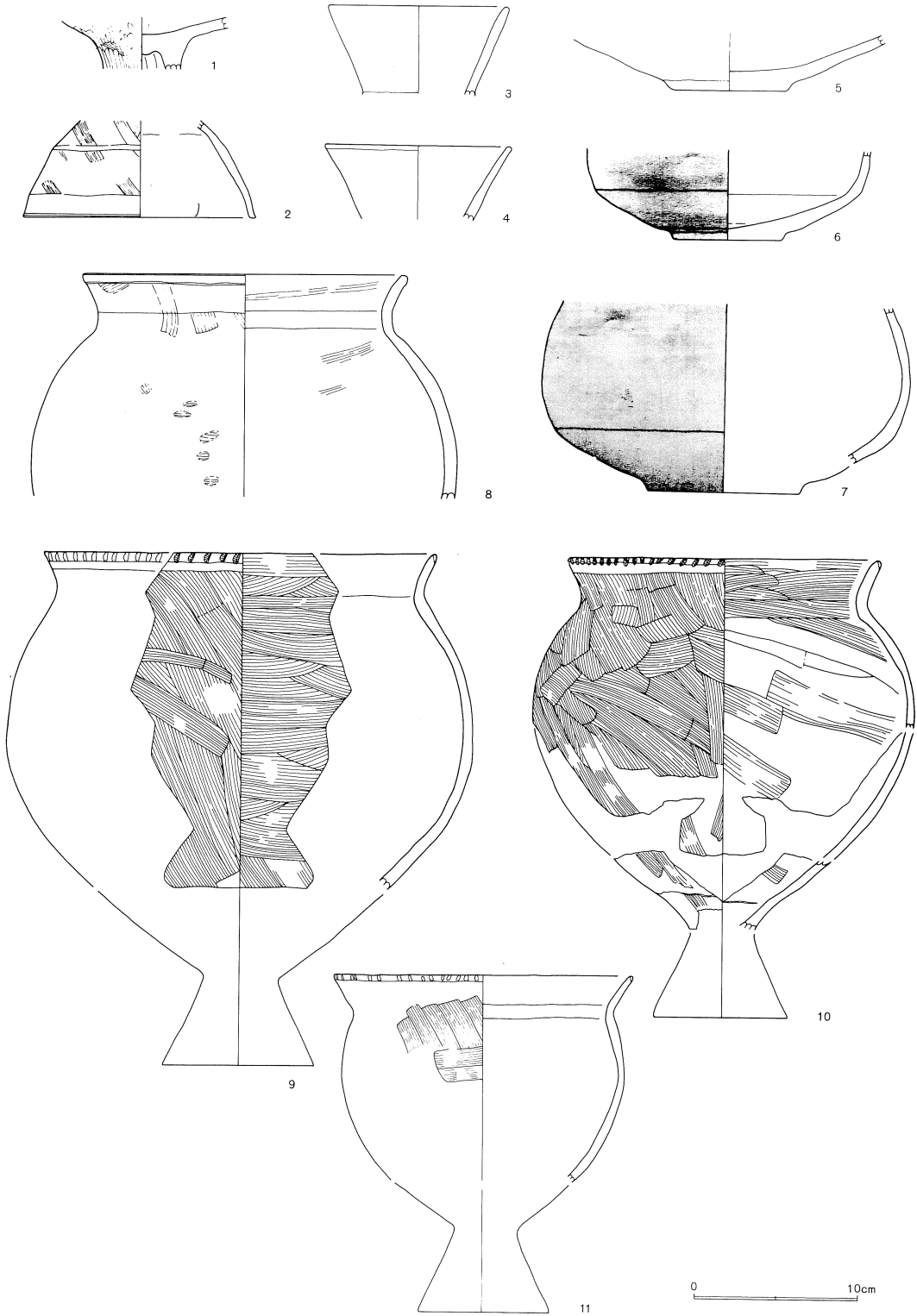
- 1 高坏 坏部と脚部の接合部の小片、接合部径 4.6cm。内外面ともハケ整形後へラ磨きが施され平滑である。胎土はきめ細かく、赤色砂粒を少量含む程度である。焼成は良好、茶褐色を呈している。
- 2 台付鉢 推定底径14.2cm・残高 5.9cm、高坏の脚部とは異なり緩い弧状を呈している。内外面ともハケ整形後へラ削りが加えられているが、外面には斜位のハケ整形痕が残る。脚端部は、ナデ整形が施されている。胎土には赤色砂粒多量、黒色砂粒少量含む。焼成良く、茶褐色。
- 3 壺 3・4とも壺の口縁部、推定口径は3が11.2cm・4が11.4cm。立ち上がり方がやや異なり、3が直線的に、4が緩く外反する。赤彩の有無は不明である。4の口唇部は丸く収められ下端が稜線となっている。器面の荒れが激しく整形の詳細は不明であるが、ハケ整形後へラ磨きが行なわれているものと思われる。赤・黒色砂粒を多めに含む胎土である。焼成はともに良好、茶褐色を呈する。
- 4 壺
- 5 壺 底径 6.8cm・残高 3.5cm。胴部の形状は不明であるが、赤彩が施された大形品である。内外面とも丁寧なへラ磨きを加えられ平滑である。胎土には、白色砂粒を多量に含んでいる。焼成やや不良で脆い。内面黒色、外面茶褐色。
- 6 壺 両固体とも下膨れ状に胴下半部に最大径を持ち、胴部と底部の接合面に明瞭な稜線が存在している。また、外面には赤彩が施されている。
6は、底径 6.6cm・胴部径 17.4cm、7は推定胴径22.6cmと大小がある。両固体とも器面の荒れがめだち、詳細な整形が不明であるが、残存部には丁寧なへラ磨きを加えられていることが観察される。胎土は、きめ細かく、少量の白色砂粒が認められる程度である。焼成は良好で、6は赤褐色・7は茶褐色を呈している。
- 7 壺
- 8 壺 口径20cm・残高13.5cm、5～7とは器形が異なり胴部が球形である。赤彩は、認められない。胴部から頸部がほぼ直立し、口縁部が緩く外反する。口唇部は角頭状に成形され、外面が低い隆帯状に突出している。内外両面ともハケ整形後へラ磨きが施されている。胎土には少量の茶褐色砂粒を含む。焼成は良好、黒褐色。



第2号住居跡遺物出土状態



第2号住居跡貼床内遺物出土状態



第14图 第2号住居跡出土遺物

- 9 台付甕 推定口径23.8cm、胴・脚部を欠く大形の台付甕。球形の胴部から口縁部が緩く外反し、口唇部が丸く収められ、口唇上にハケ状工具で刻みが施されている。
- 内外面ともハケ整形が施され、外部は斜位に、内面が横位に明瞭なハケ整形痕が残されている。口縁部外面は、ナデ整形が施された後刻みが加えられている。内面は、外面のナデ整形に対応する部分にハケ整形が見られ、胴部との接合部位が稜線となっている。茶褐色砂粒を多量に含む胎土で、器面がザラついている。二次加熱を受け脆い。茶褐色。
- 10 台付甕 推定口径19.2cm・器高28cm、胴部中位と脚部を欠いている。口縁部は緩く外反し、口唇上に刻みを持つ。内外面とも横位のハケ整形が施されているが、内面の整形はやや雑で、粘土紐の接合痕が残る。口縁部外面は、横ナデ整形が施されてから、ハケ状工具による刻みが加えられている。内面は横位のハケ整形で、頸部が平坦面となっている。胎土は、赤色砂粒を多量に含みやや荒れている。焼成良好、茶褐色。
- 11 台付甕 推定口径18.4cm・残高12.5cm、胴部下位と脚部を欠損した小形台付甕。口縁部の外反度が他の2個体より強い。口唇上の刻みの施文工具がハケかヘラか判然としない。
- 器面が荒れているため詳細な整形は不明であるが、一部に斜・横位のハケ整形痕が観察される。白・茶色砂粒を多量に含む胎土で、胴下半部が二次加熱を受け脆い。色調は、赤褐色を呈している

第3号住居跡（第15・17図）

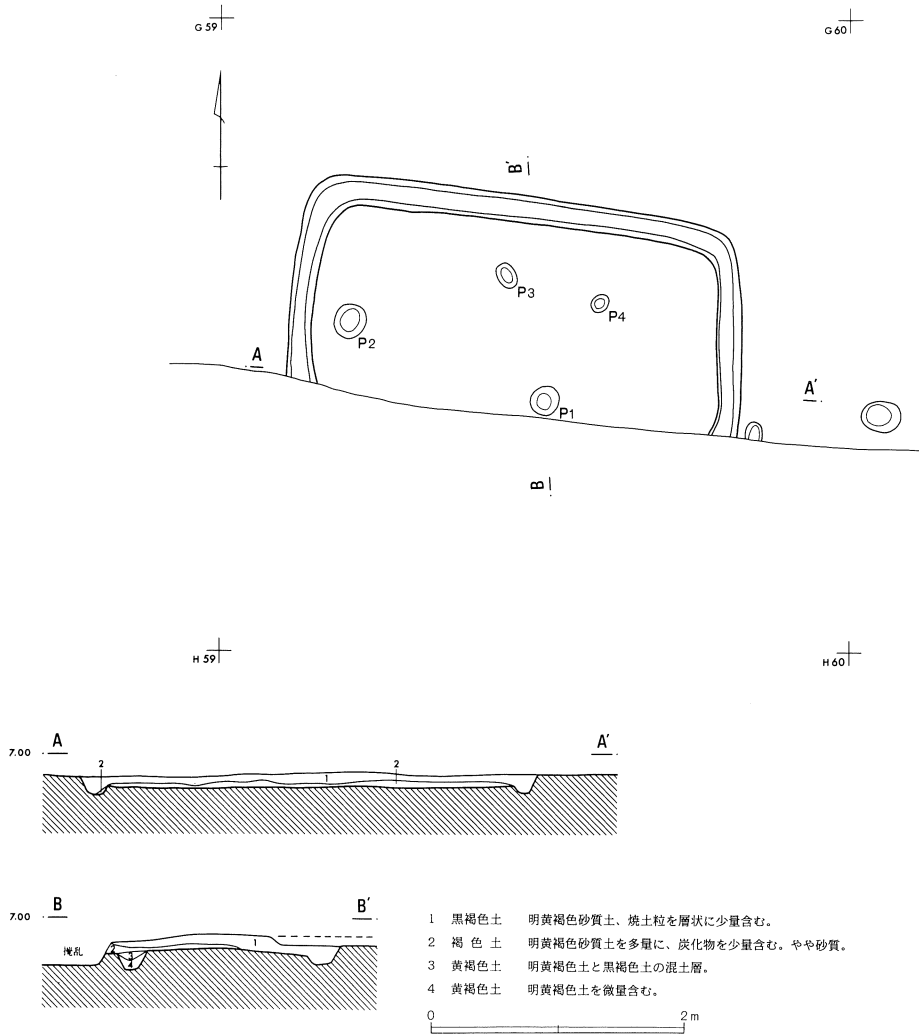
B区中央のG60Gridに位置している。南側を後世のトレンチ状の攪乱で切られ約1/2ほど消滅している。規模・形態の詳細は不明であるが、攪乱の反対側まで広がっていないことや北壁の遺存長が3.6mを測ることなどから一辺が3.6m前後の正方形プランの住居であると考えられる。

残存する部分も確認面から床面まで10cmと浅く、あまり良好な状態ではないが、覆土は黒褐色土と褐色土の2層に分層可能であった。

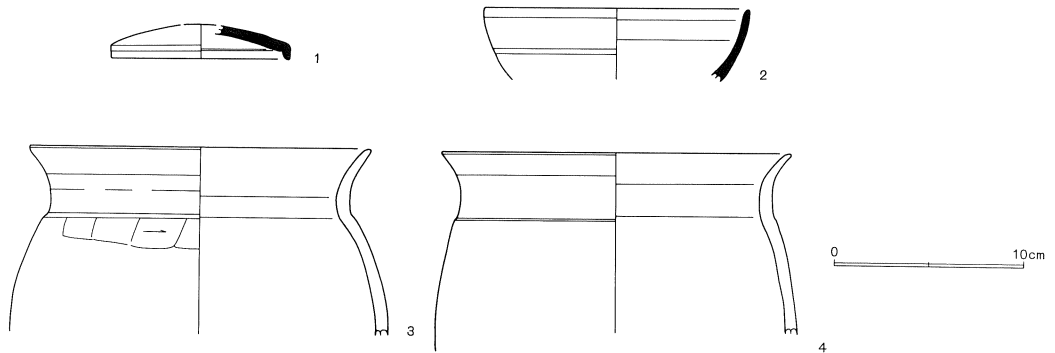
床面は、概平坦でありよく踏み固められ部分的に硬化面を呈していた。壁直下には、幅20cm・深さ7cm前後の周溝が存在している。柱穴は、4基検出できたが主柱穴と思われるものがP1とP2の2基である。覆土の観察では、両柱穴とも柱が抜き去られた後埋没したものと推定される。柱穴の規模は、P1で直径24cm・深さ20cmと掘り方が浅いもので、P2も同様な規模である。

カマドや貯蔵穴などの施設は確認することができなかったが、東壁側の床面上にわずかに焼土が確認できたことや付近の攪乱に焼土や炭化物の流れ込みが認められたため、カマドは東辺に構築されていたと思われる。

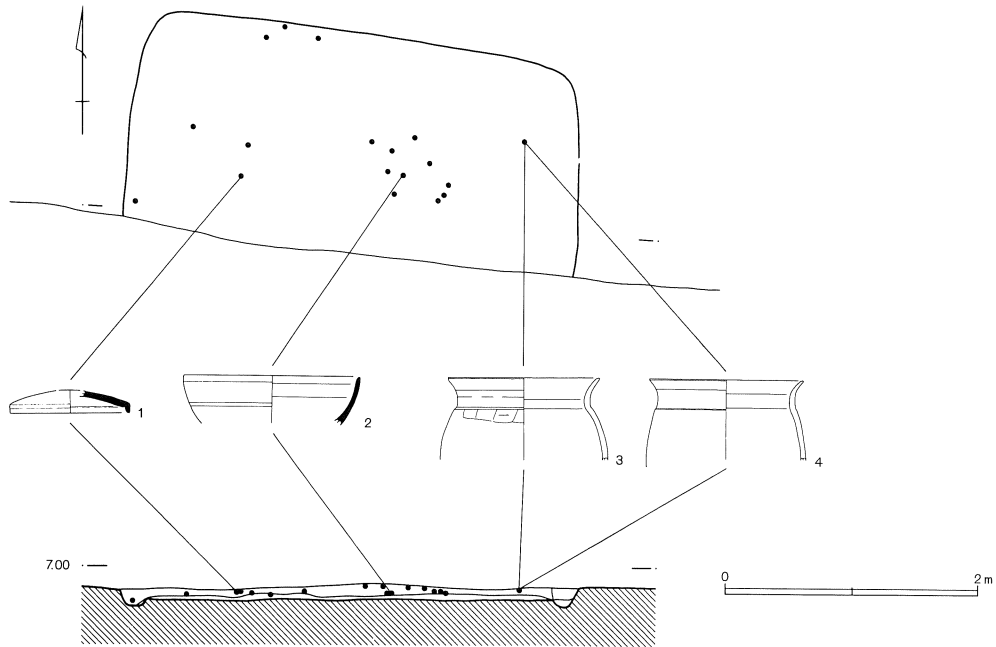
遺物は、わずかに18点出土しているに過ぎない。出土状態（第17図）は、床面上のものは認められず床面から浮いた状態の黒褐色土中に集中している。2点の甕が集中して出土した地点もあるが、完形・完形に近い土器は存在せず、すべて破片の状態で出土した。住居廃絶後あまり時間が経過しない段階に投棄されたものと推定される。



第15図 第3号住居跡



第16図 第3号住居跡出土遺物



第17図 第3号住居跡遺物出土状態



第3号住居跡遺物出土状態



第3号住居跡遺物出土状態

第3号住居跡出土遺物（第16図）

- 1 蓋
須恵器
- 推定口径 9.6cm・残高1.8cm、小形で厚みがある。鈕の付かない短頸壺の蓋と推定される。体部の器厚とほとんど変化せず、直立する折り返し部へと移行している。折り返し端部は、内剝状を呈し折部にヘラ押えの沈線が存在している。
- 内外面ともナデ整形が施されている。白・黒色砂粒を少量含む胎土である。焼成は良く、茶褐色。窯跡群不明。

- 2 坏
須恵器 推定口径14.2cm・残高3.7cm。丸味のある体部が緩やかに立ち上がり、口唇部が丸く収められている。内外面とも雑なナデ整形が行なわれ、やや凹凸がある。底部は、糸切り離し後無調整であろう。
- 白・黒色砂粒を多量に含む。焼成は良く強く焼き締まっている。茶褐色。
- 3 甕
土師器 推定口径18.2cm・残高9.8cm、口縁部径より胴部径が大きな長甕。膨らみのある胴部から頸部が直立し、口縁部が外反して開く。胴部は横位のヘラ削り、口縁部が横ナデ整形が施されている。内面は剥落が激しく整形が不明瞭であるが、頸部はヘラがあたりられ平坦面を形成している。白色砂粒を多量に含む胎土で、やや器面がザラついている。焼成は良好で、色調は赤褐色。
- 4 甕
土師器 推定口径18.6cm・残高9.5cm、口縁部と胴部最大径がほぼ同じで、3に比べ胴部の膨らみが少なく、頸部が直立している。また、頸部と胴部の接合部に明確な段差が見られる。内外面とも器面の剥落が激しく整形痕が不明瞭である。胎土には、白色細砂粒を少量含む。焼成は良好、赤褐色。

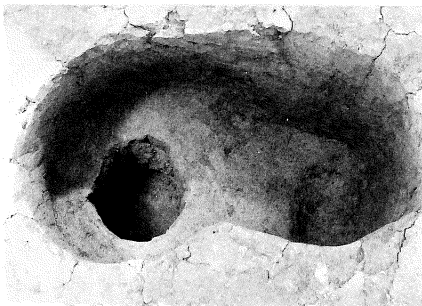
2 掘立柱建物跡 (SB)

第1号掘立柱建物跡 (第18図)

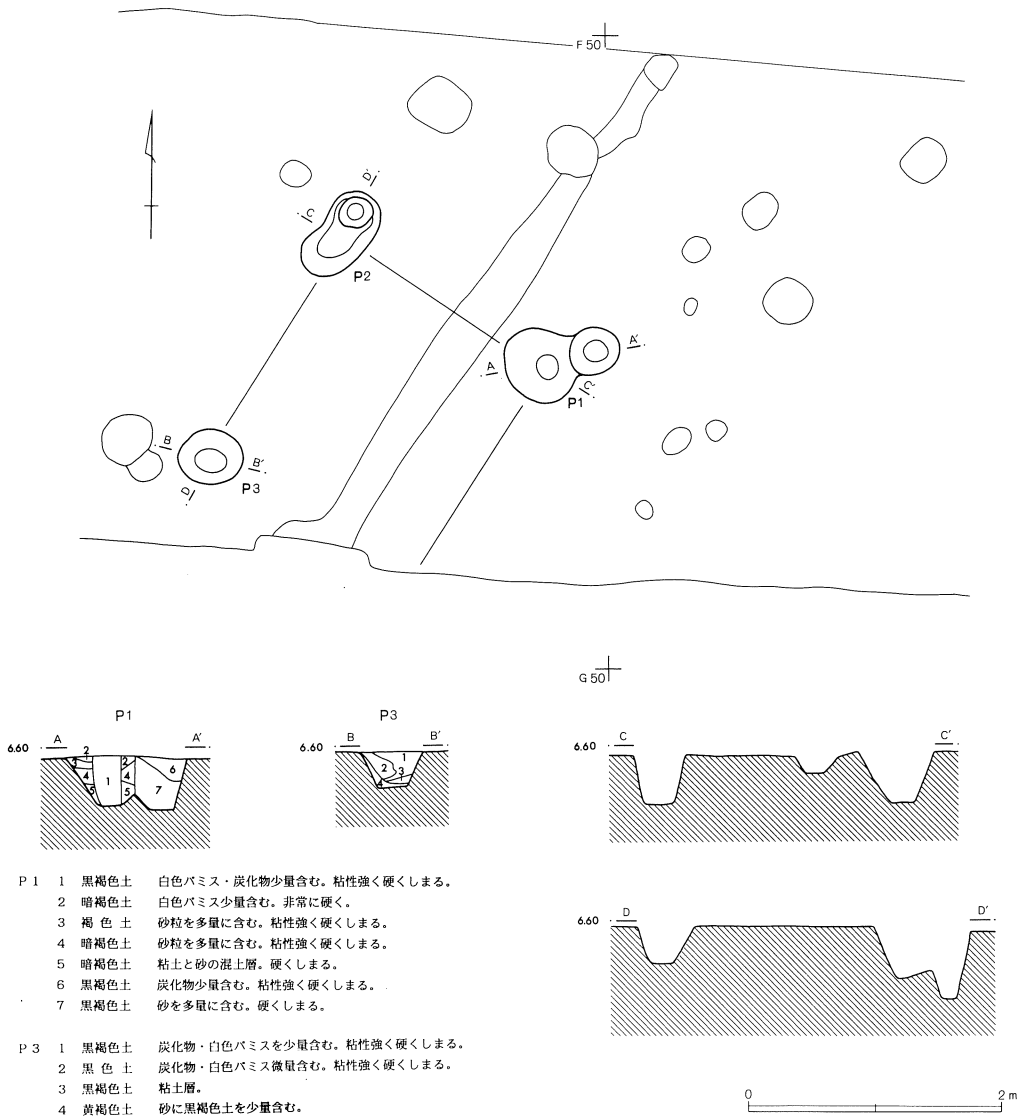
C区中央のF50Gridに位置し、重複関係は無いが建物跡の柱間に第9号溝、西側に第6・7号溝が近接し、東側にはC区柱穴群が分布している。南側をトレンチ状の攪乱で切られているため建物全体の規模は不明である。しかし、攪乱の反対側に同建物の柱穴が検出できないので、桁行2間・梁行1間程度の小規模な建物跡と推定できる。桁行4.0m・梁行1.9mほどの南北棟になろうか。柱間寸法は、桁行2m間、梁間は建替があり、建替前2.2m・建替後1.9m間である。主軸方位は、N-27°-Eを指す。

建替前の梁側柱穴は、直径40cm・深さ40~45cmで、建替後の柱穴に比べやや細いがしっかり掘り込まれている。建替後の柱穴は長径45~50cm・深さ30~40cmであった。すべての柱穴とも、平面形は円形を基本としている。覆土の観察では、すべての柱穴で、強く突き固められた黒褐色土と暗褐色土の掘り方埋土が見られた。また、P1では、直径20cmの柱痕が確認されている。

遺物の出土は、見られなかった。



右・SB1周辺
左・SB1P2



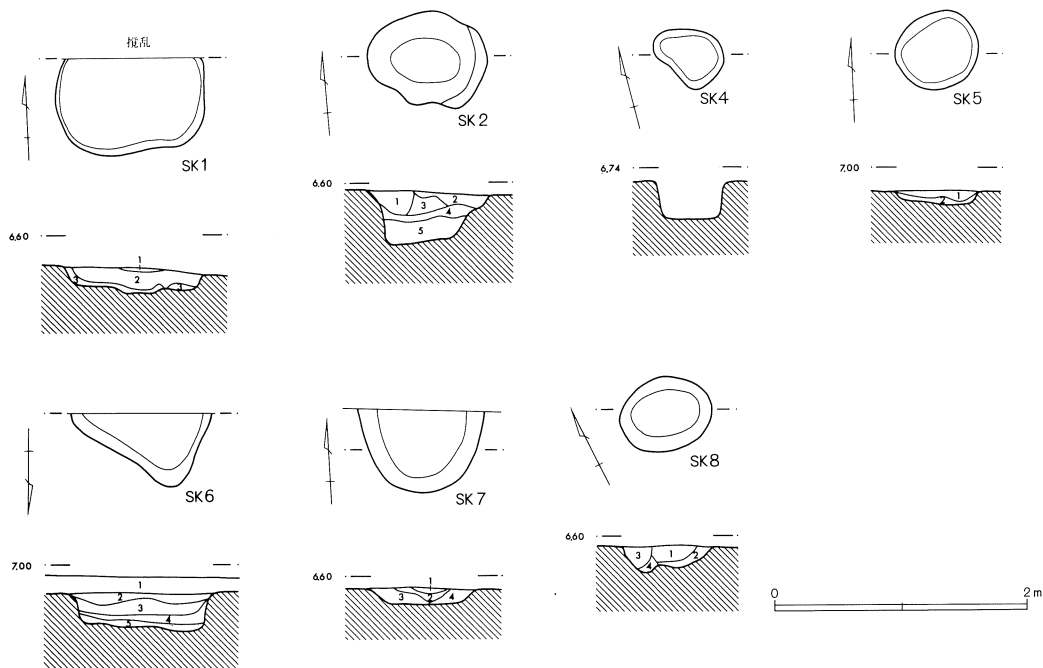
3 土壌 (SK)

土壌は、A区2基・B区3基・C区4基の合計9基検出された。特に集中して分布する地点は無く、調査区全域に散在して確認されている。

第1号土壌 (第19図)

A区G72Gridに位置し、第1号溝の北側で柵列跡に近接して検出された。北辺が用水の取り入れ口のため掘り込まれ消滅している。長軸118cm・深さ20cmを測り、短軸も同規模の隅丸方形と思われる。壁の立ち上がりが緩やかな皿状の土壌である。

覆土は、地山の明黄褐色土が多量に混入した褐色土が自然埋没の状態であった。遺物は、検出されなかった。



S K 1

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物を少量含む。
- 2 褐色土 暗褐色土と明黄褐色砂質土との混土层。
- 3 褐色土 暗褐色土に多量の明黄褐色砂質土を含む。

S K 2

- 1 黄褐色土 明黄褐色砂質土少量、炭化物を微量に含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色砂質土を霜降り状に、炭化物粒を微量含む。
- 3 黄褐色土 明黄褐色砂質土に黒色土を少量含む。
- 4 黒褐色土 粘性比較的強く明黄褐色砂質土を少量含む。
- 5 黒色土 明黄褐色砂質土ブロックを微量含む。

S K 5

- 1 黒褐色土 炭化物・白色パミスを少量含む。砂質強い。
- 2 褐色土 褐色砂質土を多量に含む。砂質強い。

S K 6

- 1 黄褐色土 水田耕作土。
- 2 黒褐色土 焼土・炭化物・白色パミスを少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化物を少量含む。
- 4 黄褐色土 明黄褐色粘質土を少量含む。
- 5 黒褐色土 炭化物を多量に含む、粘性強い。

S K 7

- 1 黄褐色土 灰色粘質土を少量含む。砂質。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土を少量含む。粘質強い。
- 3 黄褐色土 砂質強く、部分的に鉄分の沈着が見られる。
- 4 灰褐色土 灰色粘質土を多量に含む。

S K 8

- 1 褐色土 黒褐色粘質土ブロックを少量含む。砂質。
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。粘質。
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物を多量に含む。粘質。
- 4 暗褐色土 黒褐色粘質土を微量に含む。砂質。

第19図 第1・2・4・5・6・7・8号土坑

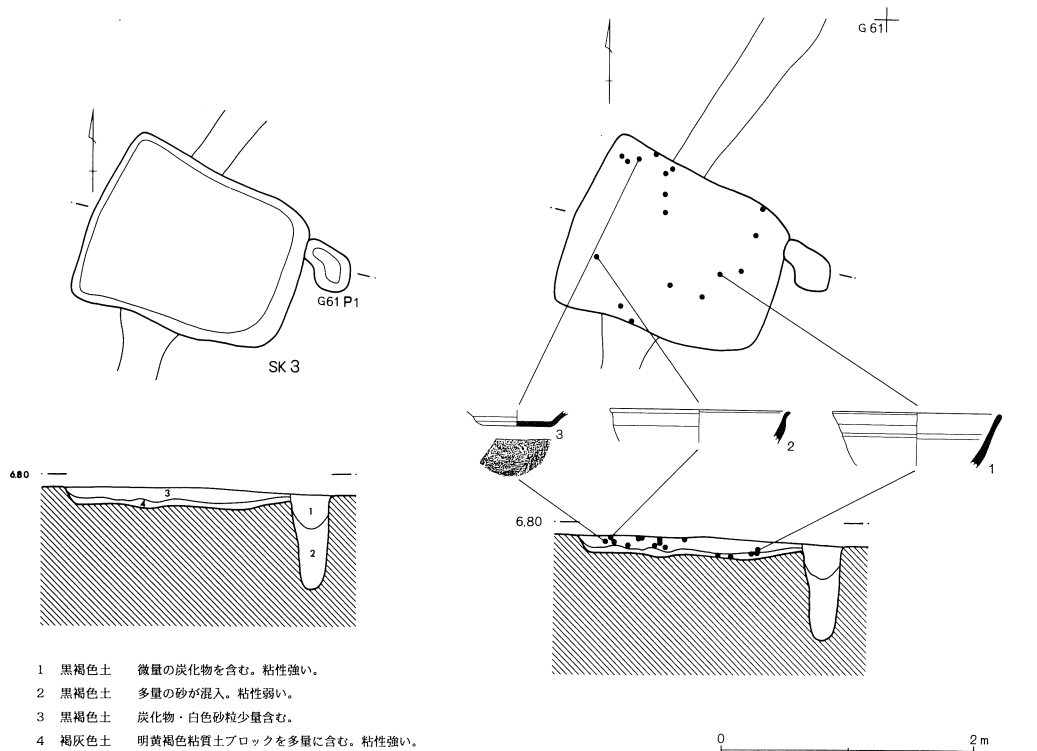
第2号土坑（第19図）

A区G71Gridに位置している。柵列跡のP4・5の中央北側に近接して検出された。長軸96cm・短軸73cm・深さ38cm、平面形は不整楕円形。東壁は中位に肩を持ち緩やかに立ち上がり、西壁は垂直に立ち上がる。底面は西壁側へ緩やかに下っている。覆土は、自然堆積であった。遺物の出土は無かった。

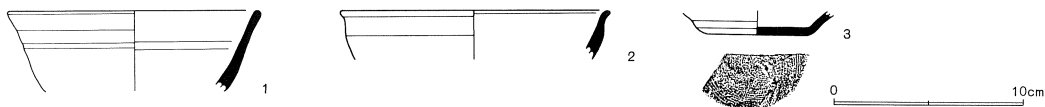
第3号土坑（第20図）

B区G61Gridに位置し、東側に第3号溝跡、西側に第3号住居跡の中間に検出された。第2号溝跡を切り、東北コーナーに近い東壁をG61P1の柱穴に切られている。規模は、長軸170cm・短軸（西壁）140cm（東壁）107cm・深さ16cmを測る。東壁側がややすぼまる台形状を呈している。

覆土は、自然堆積状態の黒褐色土・褐灰色土が観察された。遺物（第20図）は、黒褐色土中から13点、褐灰色土中から4点出土している。完形もしくは完形に近いものは見られず、すべて小片であった。器種としては、須恵器杯・土師器杯と甕が見られ、土師器甕が主体を占めていた。接合す



第20図 第3号土壌



第21図 第3号土壌出土遺物

るものはなかった。

第3号土壌出土遺物 (第21図)

- 1 坏 須恵器
推定口径13.4cm・残高 4.2cm、やや深みのある坏。口縁部が緩く立ち上がり、肥厚した口唇部が丸く収められている。内外面ともナデ整形痕が明瞭で、外面口縁下が強く押えられ一条の沈線となっている。胎土には、白・茶色砂粒を多量に含み、器面の荒れがめだつ。焼成は不良で脆い。色調は茶褐色。
- 2 坏 須恵器
推定口径12.4cm・残高 2.6cm。口縁部が体部に比べ非常に薄く仕上げられたもの。口縁部直下が外面より強く押えられ、ほぼ垂直に立ち上がり強く外反する。
非常にキメ細かな胎土で、焼成も良く堅緻である。濃青灰色を呈する。
- 3 坏 須恵器
底径 5.8cm、薄いつくりの坏。底部整形が糸切り離し後無調整。底部と体部の接合点に段差を持ち立ち上がる。胎土に小礫含む。焼成良好、赤褐色を呈する。

第4号土壌 (第19図)

B区 F 57Gridに位置し、周辺には柱穴群が集中して分布している。規模は長軸56cm・短軸43cm・深さ28cmを測る。平面形は、不整楕円形を呈している。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

覆土は明黄褐色土ブロックが混入した茶褐色土が堆積し、周辺の柱穴覆土とは明らかに異なっていた。遺物は、覆土から9世紀代に比定される須恵器坏と土師器甕の細片が検出された。

第5号土壙（第19図）

B区F58Grid、第4号土壙に隣接するGridに位置している。周辺には、柱穴群が分布している。規模は、長軸66cm・短軸60cm・深さ11cmの不整円形で浅い皿状の土壙である。覆土は、黒褐色土・褐色土の自然堆積が観察された。覆土中より底部糸切り離し後無調整の須恵器坏の細片が検出されている。

第6号土壙（第19図）

C区西寄りのG51Gridに位置している。調査区南壁直下に検出された。南半部が調査区外のため正確な規模や形態は不明であるが、深さ25cm・一辺105cm程度の隅丸方形を呈すると推定される。

調査区壁に掛かるため、表土より土層断面が観察できた。Ⅲ層の褐色土を掘り込んでおり、他の土壙とは異なり、新しい時期・近世の所産と考えられる。

遺物の出土は無かった。

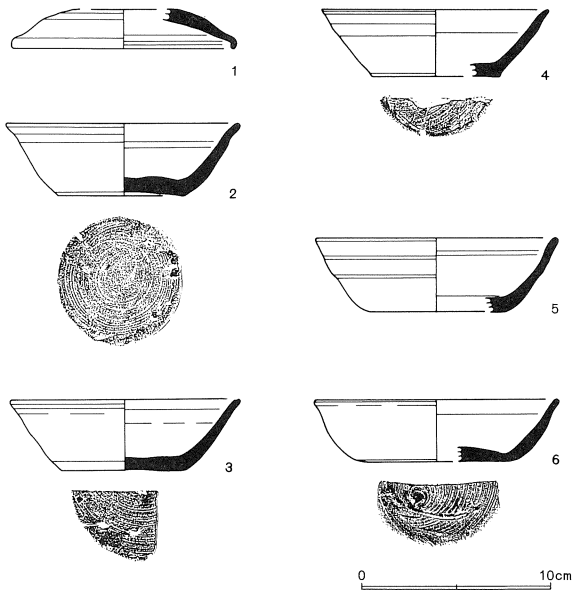
第7号土壙（第19図）

C区中央のF52Gridに位置し、北側を用水で切られた状態で検出された。残存部での長軸95cm・深さ12cmを測る。平面形は楕円形になろうか。底面は平坦で、壁が緩やかに立ち上がる皿状を呈している。遺物は検出されなかった。

第8号土壙（第19図）

C区東端のF54Gridに位置している。北西2mに第9号土壙が存在している。規模は、長軸73cm・短軸58cm・深さ17cmの楕円形。底面が西壁側に緩く下り、壁も緩く立ち上がる。

遺物の出土は無かった。



第22図 第9号土壙出土遺物

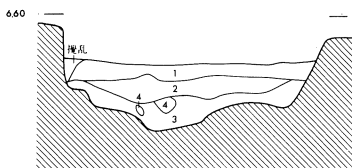
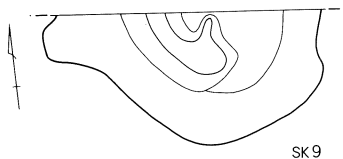
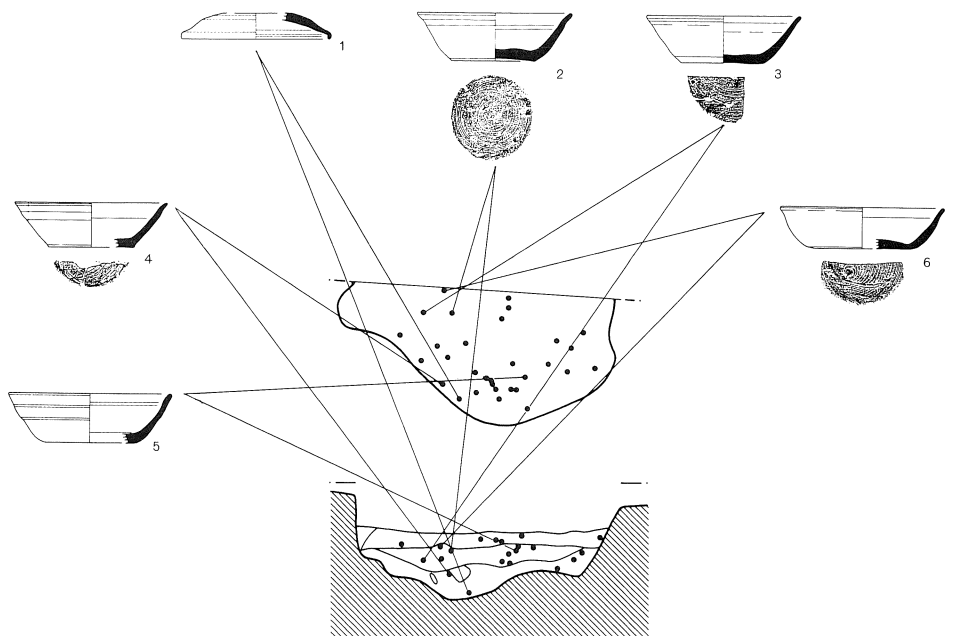
第9号土壙（第23図）

C区東端のF54Gridに位置している。第8号土壙が南東に近接して所在している。北側が用水掘削で消滅しているため規模・形態の詳細は不明である。

残存部の平面形は西壁が一部突出し、断面形では底面中央が「L字」状に一段掘り下げられ窪み、壁が垂直に立ち上がっている。

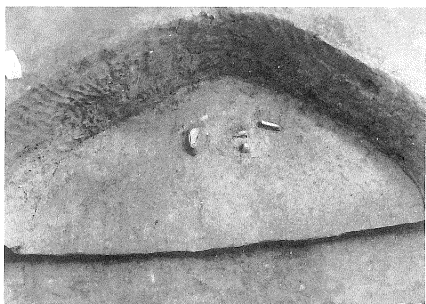
土層断面では、自然堆積の状態を示していたが、埋没過程の初期に一時期滞水したと推定される赤褐色鉄分の沈着が観察された。

覆土中から、完形・完形に近いものを



- 1 灰黄褐色土 多量の鉄分を均一に含む。砂質強い。
- 2 黒褐色土 鉄分を層状に含む。粘性強い。
- 3 黒色土 焼土粒を少量、鉄分を多量に含む。非常に粘性強い。
- 4 灰褐色土 明黄褐色粘質土をブロック状に含む。

第23図 第9号土壙遺物出土状態



第9号土壙遺物出土状態



第9号土壙遺物出土状態

含む遺物が出土している。須恵器坏を主体とする器種構成で、他には須恵器蓋・甕、土師器坏・甕がある。須恵器坏以外には細片が多く、実測可能なまでに接合するものは存在しなかった。

第9号土壙出土遺物（第22図）

- 1 蓋
須恵器 推定口径12cm・器高 2cm。天井部を欠き鈕の有無・形状は不明であるが、擬宝珠状鈕が付く坏蓋と思われる。天井部に比べ口縁部が極端に薄く仕上げられ、わずかに肥厚した口唇部は丸く収められやや内に入る。天井部がヘラ削り整形、口縁部にはナデ整形が施されている。白色砂粒を多量に含むため、器面がザラついている。焼成は非常に良く堅緻である。濃青灰色。
- 2 坏
須恵器 口径12.6cm・底径 6.4cm・器高 3.8cm。全形を知ることでできる唯一の個体。揚げ底の底部から緩く体部が立ち上がり、口縁部が強く外反している。内外面ともナデ整形が施され、底部は糸切り離し後無調整である。口縁直下が強く押えられ、浅い凹線となっている。胎土は、3mm 前後の小礫を少量含む。焼成は非常に良く、黒灰色を呈している。東金子窯跡群産か。
- 3 坏
須恵器 推定口径12.2cm・器高 2cm。器厚があまり変化せず、体部が底部から直線的に立ち上がり、口縁がわずかに外反する。内外面ともナデ整形が加えられているが、特に底部と体部の接合部のナデが強く平坦面となっている。底部の整形は、糸切り離し後無調整。胎土には、黒色砂粒と小礫を少量含む。焼成は良く、濃青灰色。東金子窯跡群産と思われる。
- 4 坏
須恵器 推定口径12cm・器高 3.5cm。粘土塊からの糸切りがやや低く行なわれたため底部が厚く、腰が高い坏。体部は直線的に立ち上がり、口縁下に膨らみを持つ。ナデ整形は丁寧に施されている。胎土には、白色砂粒を多量に含み、器面がザラ付いている。焼成は良好で堅緻である。色調は濃青灰色を呈す。東金子窯跡群産と推定される。
- 5 坏
須恵器 推定口径12.8cm・器高 3.9cm。体部は、わずかに内湾して立ち上がる。口縁下には突帯状の膨らみが存在し、口縁内面は平坦面となっている。内外面のナデ整形は丁寧で、底部は糸切り離し後無調整である。少量の白色砂粒を含む胎土でキメ細かく、焼成も良好。色調は濃青灰色を呈す。
- 6 坏
須恵器 推定口径12cm・器高 3.3cm。2～5とは器形がやや異なり、体部外面が肥厚しているため、器全体に丸みを帯びた浅めの坏。底部内面の突出部にわずかに糸切り痕が残る。底部整形は、糸切り離し後無調整、内外面のナデ整形は雑である。胎土には、白色針状物質を多量に含む。焼成良好、灰白色。南比企窯跡群産。

4 柵列跡 (SS)

A区の中央G70GridからG72Gridにかけて位置している。第1号住居跡の東側、Gridの東西ラインに平行して検出されている。調査当初は、掘立柱建物跡を想定して柱穴の検出に努めたが、相対する柱穴が確認できないので柵列跡と判断した。

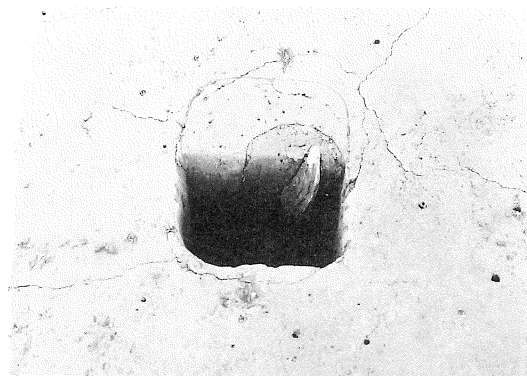
柱穴は、西から東へP1～P8の8基が確認されている。第1号住居跡を切るG69P1と第1・2号住居跡間に存在するG69P2は、柵列のライン上であるが、覆土や掘り方が全く異なるため除外した。

柱穴の平面形は、南北方向を長辺とした長方形を基本としている。規模は、長辺40cm・短辺30cm P5が深く48cmを測るが、他の柱穴は深さ20～25cm程度である。覆土は、地山の明黄褐色土を含む褐色土を主体に3層が観察され、P4・P8からは柱痕が確認された。柱間は1.8～1.9mを測り、P1～P4には建替が見られ、P1とP3・P2とP4が対応するようである。

柱穴内からの出土遺物は無いが、B・C区に多数存在する柱穴群とは形態や覆土状態が明らかに異なり、第1号溝跡との関連が予想される。



柵列跡 P 1～4



柵列跡 P 8 柱出土状態

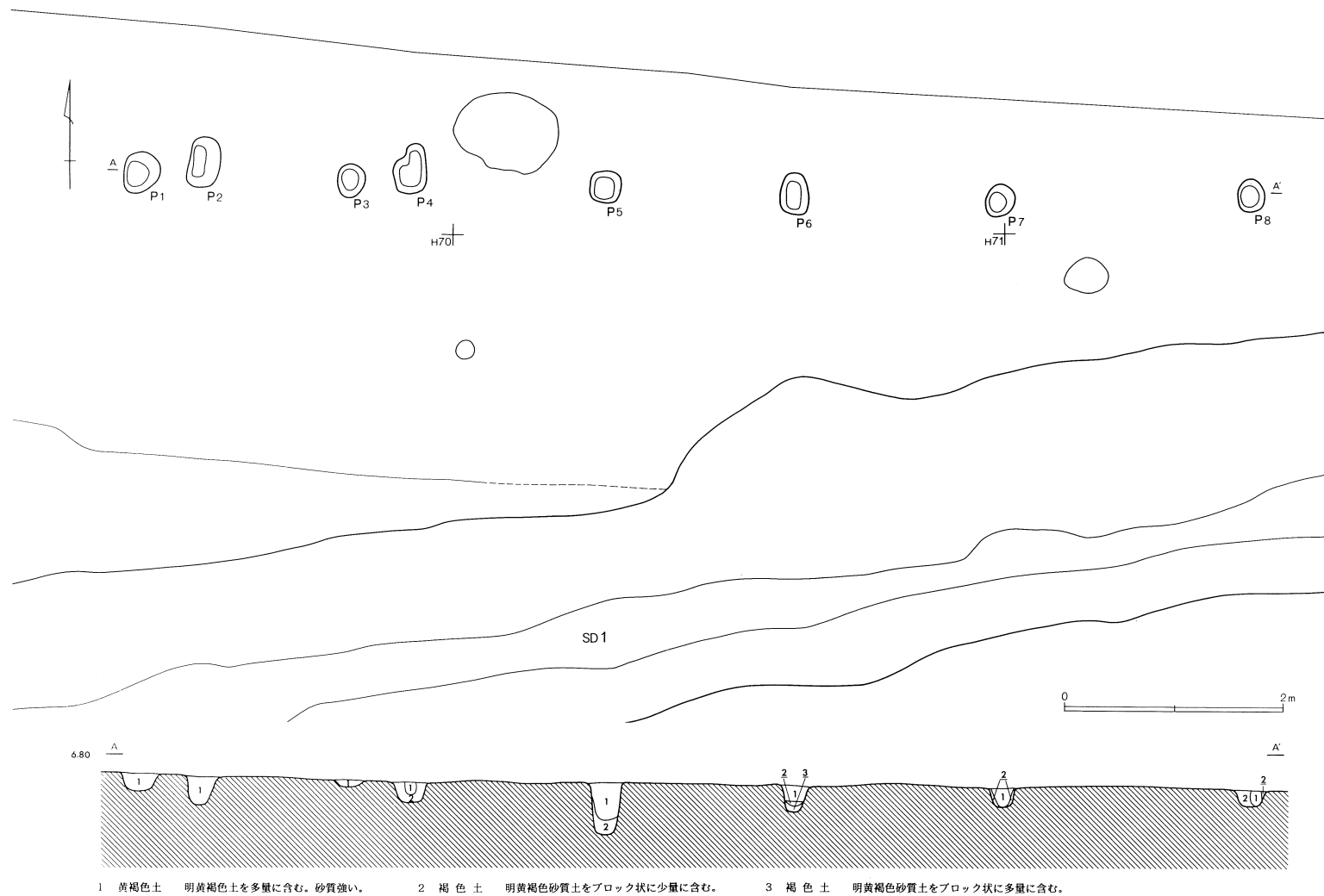
5 柱穴群 (SP)

B・C区から掘立柱建物跡の柱穴と推定される柱穴群が集中して検出されている。しかし、調査区の幅が狭い上、北側を用水掘削で、中央部を横断するトレンチ状の攪乱溝により多数の柱穴が消滅している。そのため建物全体を把握できるものが無い。ここでは、B・Cの調査区に分けてそれぞれの詳細を報告することにする。

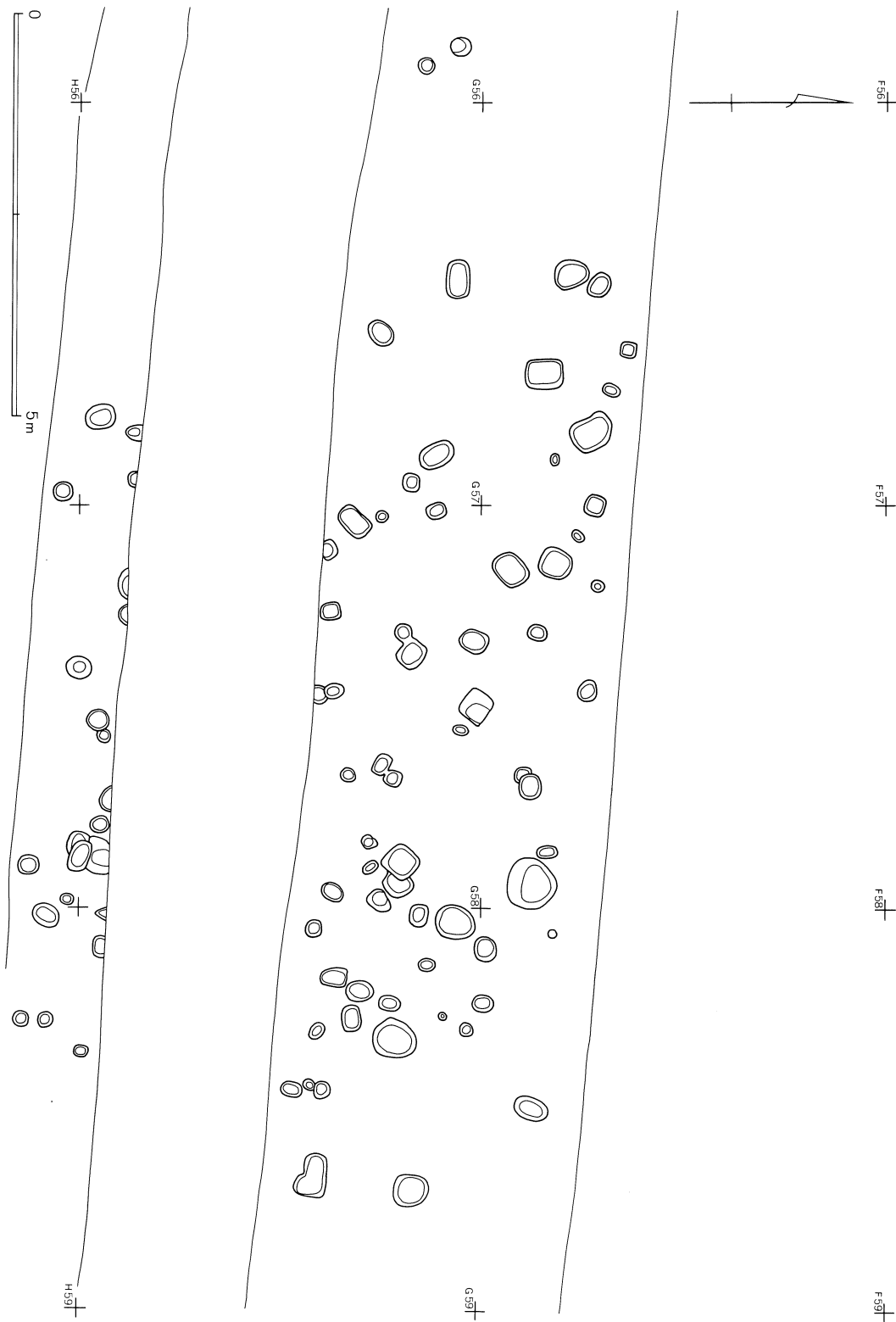
B区柱穴群 (第25・26・27・28図)

第3号住居跡の西側に集中して検出されている。攪乱溝の北側に特に集中するが、南側にも10基余り存在している。他の遺構は柱穴群内に第3・4号土壌が存在するが、柱穴群との重複関係は確認されなかった。

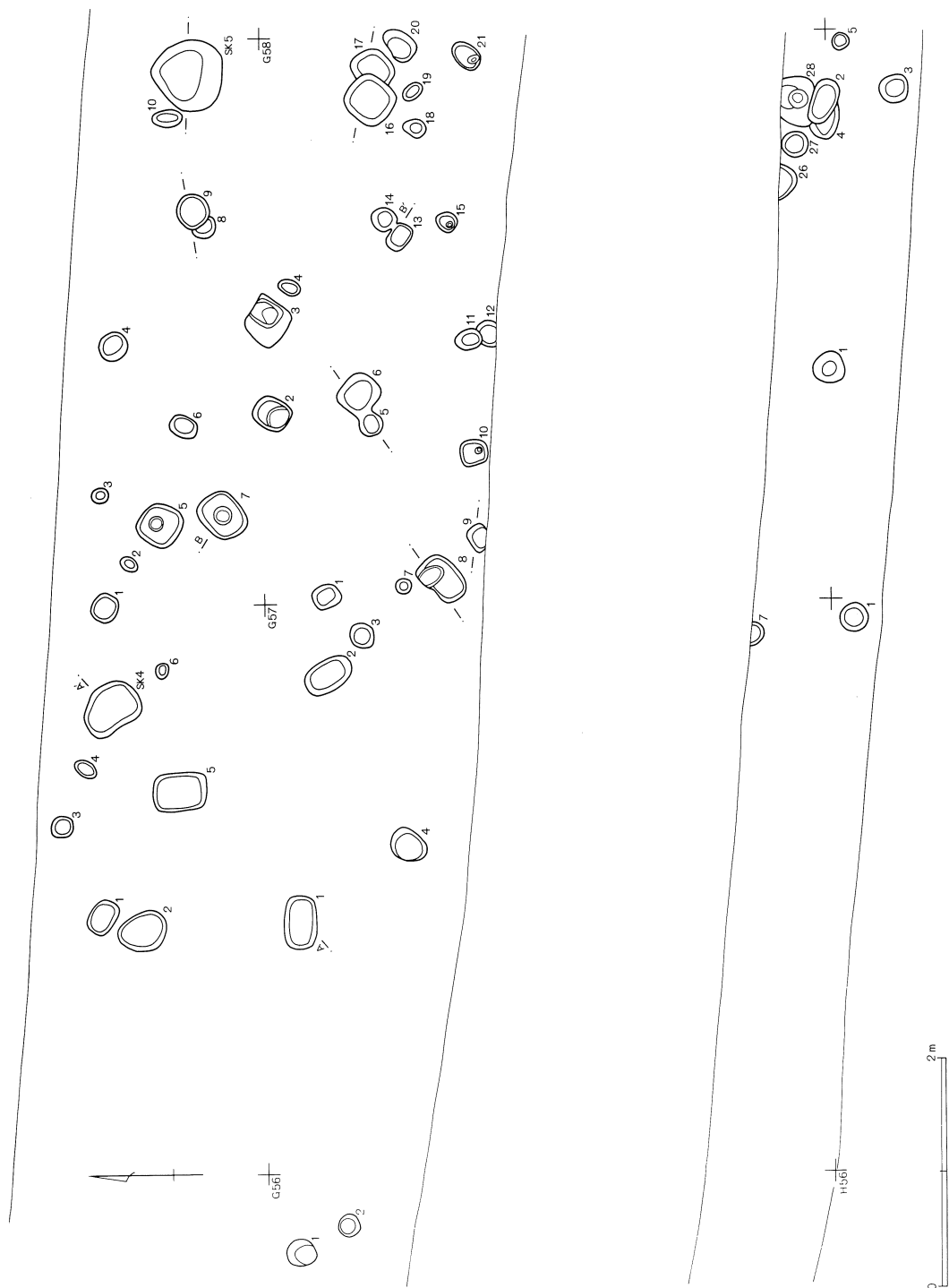
柱穴の平面形は、不整円形を呈するものも数基存在するが、本来は方形ないし長方形を基本とするものと推定される。基数の比率としては、ほぼ1:1であり、両者が混在している状況である。



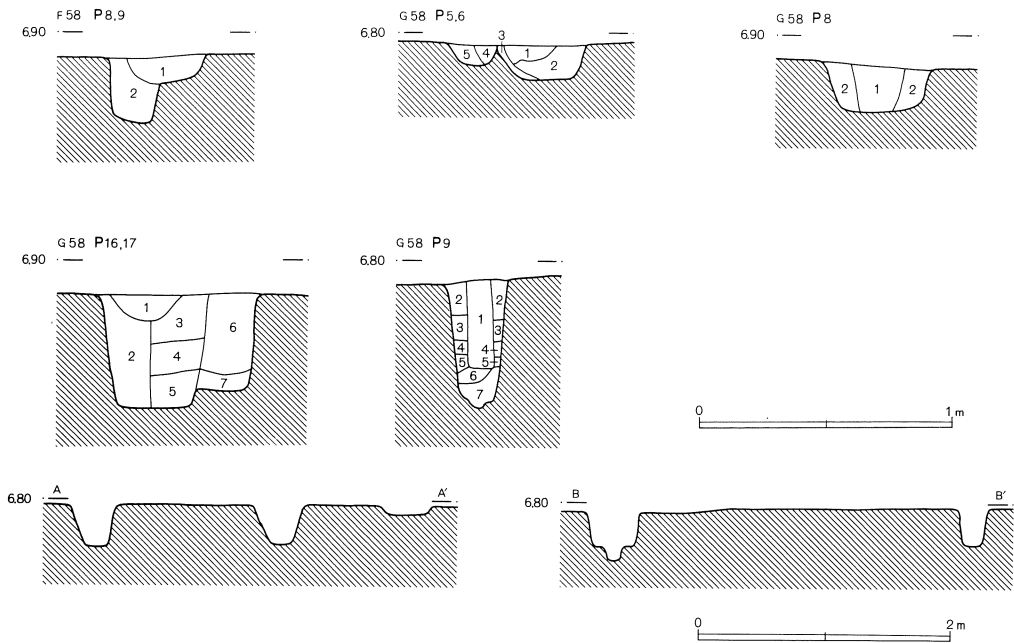
1 黄褐色土 明黄褐色土を多量に含む。砂質強い。 2 褐色土 明黄褐色砂質土をブロック状に少量に含む。 3 褐色土 明黄褐色砂質土をブロック状に多量に含む。



第25图 B区柱穴群全体图



第26图 B区柱穴群(1)



F58 Grid P8・9

- 1 褐灰色土 白色火山灰を少量含む。粘性強い。
- 2 暗褐色土 白色火山灰を微量、砂粒を少量含む。粘性弱い。

G58 Grid P16・17

- 1 黒褐色土 白色火山灰を多量に含む。弱い粘性。
- 2 黒褐色土 白色火山灰・炭化物を多量に含む。弱い粘性。
- 3 褐色土 白色火山灰・炭化物を多量に含む。強い粘性。
- 4 褐灰色土 褐灰色粘土と砂の混土層。弱い粘性。
- 5 褐灰色土 褐灰色粘土と砂の混土層。4層に比べ砂量が多い。弱い粘性。
- 6 暗褐色土 白色火山灰を多量に、炭化物を少量含む。強い粘性。
- 7 褐灰色土 第5層に近似するが、黒色土ブロックを少量含む。

G58 Grid P5・6

- 1 褐色土 白色火山灰を多量に含む。砂質強い。
- 2 灰褐色土 白色火山灰を少量含む。粘性あり。
- 3 黒褐色土 砂粒を多量に含む。砂質。
- 4 黒褐色土 炭化物を少量含む。弱い粘性。
- 5 黒褐色土 明褐色砂質土を少量含む。硬くしまる。

G58 Grid P9

- 1 黒褐色土 白色火山灰・焼土粒・炭化物を少量含む。砂質強い。
- 2 暗褐色土 白色火山灰を多量に含む。粘性強い。
- 3 暗褐色土 白色火山灰・炭化物を微量含む。粘性強い。
- 4 暗褐色土 炭化物を多量に含む。粘性強い。
- 5 暗褐色土 砂粒を多量に含む。砂質。
- 6 灰色土 少量の暗褐色土を含む。
- 7 褐灰色土 微量の灰色土を含む。砂質。

G58 Grid P8

- 1 黒色土 炭化物・白色火山灰少量。粘性強く硬くしまる。
- 2 暗褐色土 白色火山灰を少量含む。粘性強く硬くしまる。

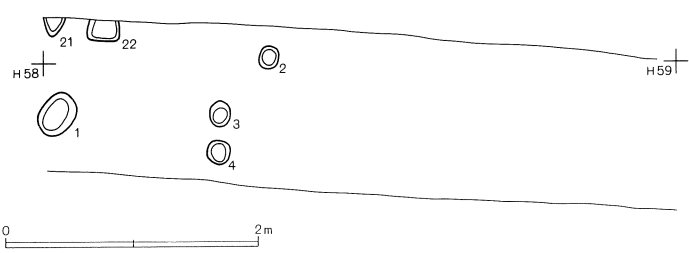
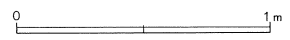
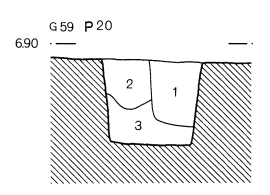
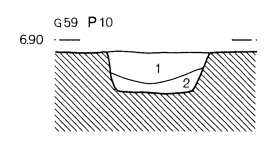
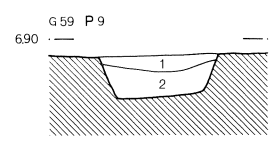
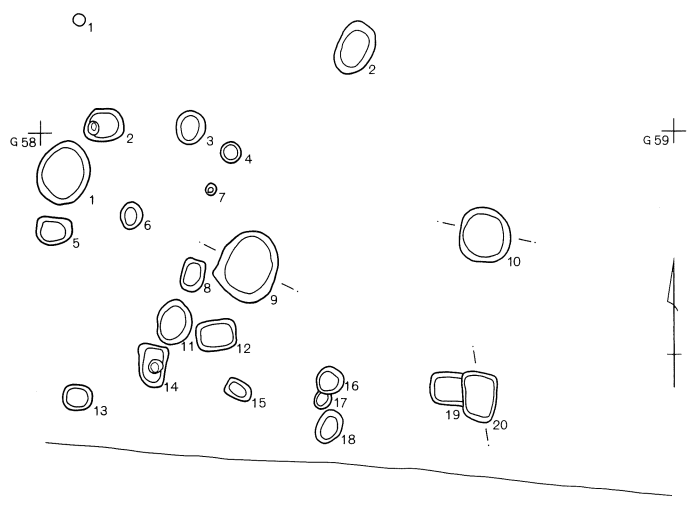
第27図 B区柱穴群(2)

方形の柱穴としてはF58P5・G58P3・G58P16 など、長方形の柱穴はF57P5・F58P1・P2 などが典型的な例である。

方形柱穴の規模は、一辺が20cm前後と40cm前後に概分類可能である。深さは、辺の長短にあまり関係が無く40～50cmと深く掘り込まれているものが大半を占める。覆土の断面観察では、G58P9・P16・P17 (第27図) などの様に褐灰色粘土と砂が混入した褐灰色土を掘り方埋土としたものが多く見られた。また、同柱穴の様に柱痕が認められたもの、柱位置に相当する柱穴底面を一段掘り窪めたものが数基存在している。

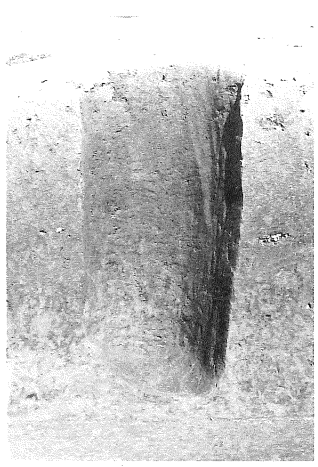
長方形柱穴の規模は、20×25cm、30×45cm前後に概分類できる。深さは、10～30cmと方形柱穴に比べて浅く掘り込まれたものが多数を占めている。断面観察では、G58P8・G59P9・10 の様に基盤層の明黄褐色砂質土ブロックを含む明褐色土を掘り方埋土とした柱穴が多数見られた。また、G58P8の様に柱痕が存在するものが数基確認できた。

遺物は、F58P7・F58P17・G61P1から実測可能な須恵器坏などが出土している。

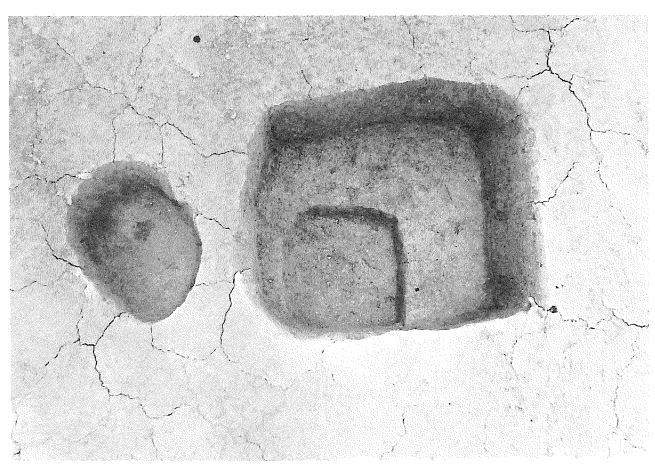


- G59 Grid P9
- 1 黒褐色土 炭化物・白色火山灰を少量含む。砂質強い。
 - 2 明褐色土 明褐色砂質土ブロックを多量に含む。砂質強い。
- G59 Grid P10
- 1 黒褐色土 粘土粒を極微量、白色火山灰少量含む。粘質強い。
 - 2 明褐色土 明褐色砂質土をブロック状に含む。
- G59 Grid P20
- 1 黒褐色土 柱痕、白色火山灰少量、炭化物を微量含む。
 - 2 黒色土 白色火山灰多量に含む。粘質強い。
 - 3 灰褐色土 黒色土と灰褐色砂質土の混土層。砂質強い。

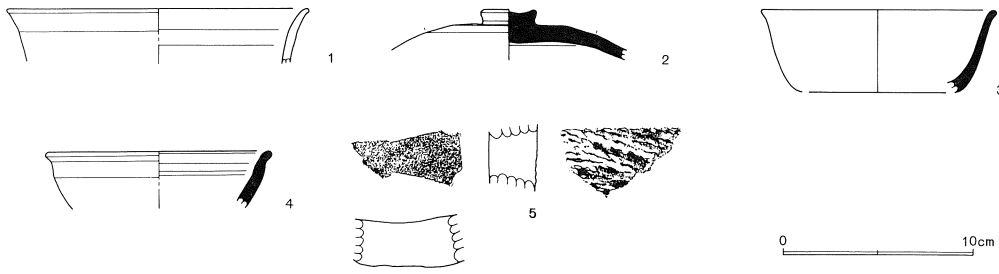
第28図 B区柱穴群(3)



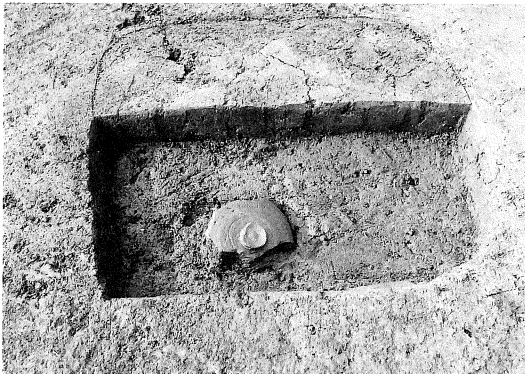
G58 P7



G58P1・P4



第29図 B区柱穴群出土遺物



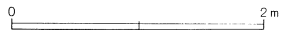
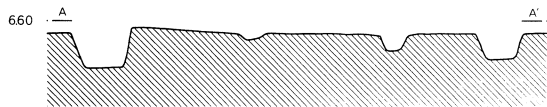
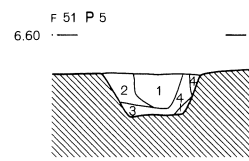
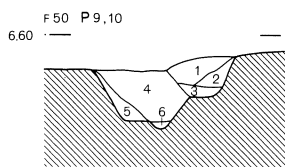
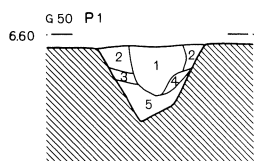
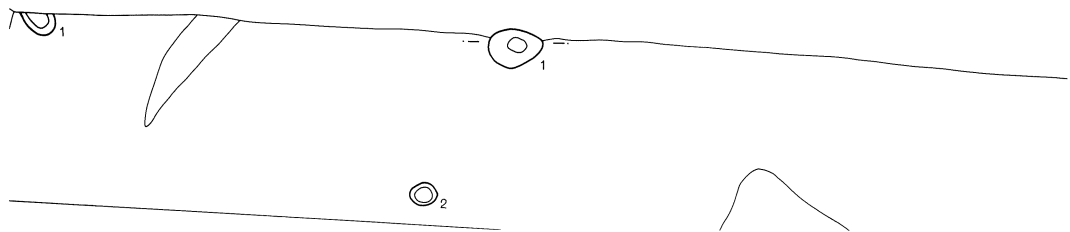
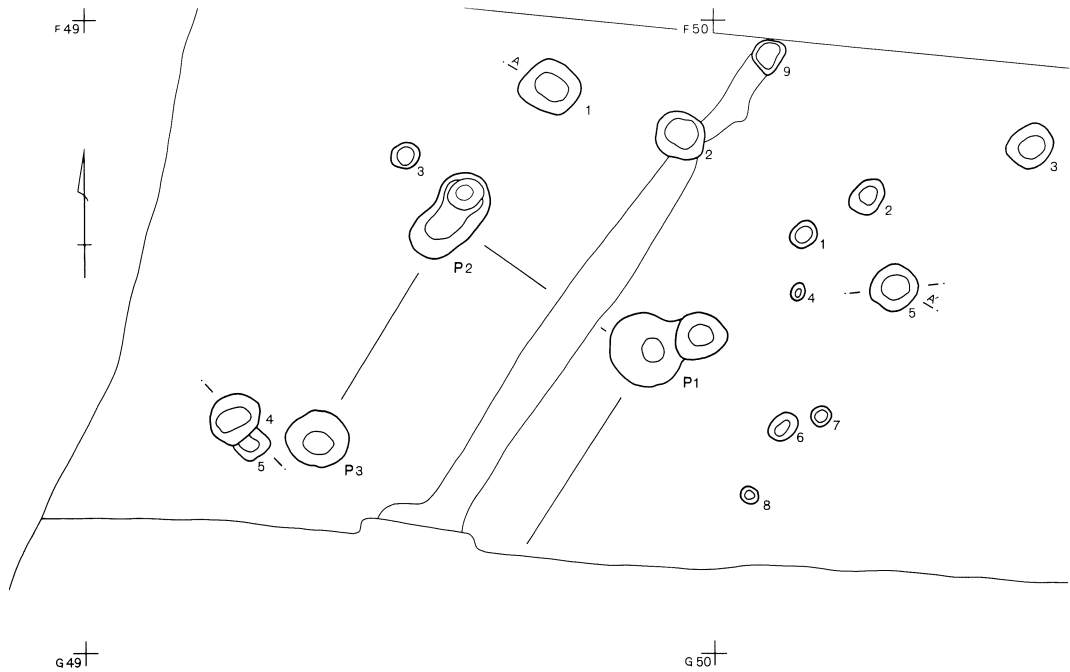
G 58 P 9遺物出土状態



G 58 P 17遺物出土状態

B区柱穴群出土遺物（第29図）

- 1 甕
土師器 小片のため口径不明。直立ぎみの頸部から口縁部が屈曲して外反する。口唇部は、角頭状に収められ突出し外面に明瞭な稜線が存在する。内外面ともナデ整形が施されている。赤・白砂粒を多量に含み器面が荒れている。焼成は良く、赤褐色。
- 2 蓋
須恵器 鈕径2.8cm。扁平な擬宝珠状鈕が残る天井部片。鈕の中心は、外周より低くわずかに膨らむ程度である。鈕基部より肩部にかけて二段のヘラ削りが見られ稜線を残す。肩部以下および内面はナデ整形が加えられている。胎土には、多量の白色針状物質が観察される。焼成は良好、濃い青灰色を呈す。南比企窯跡群産。
- 3 坏
須恵器 推定口径12.4cm。口径に比べ深みのある坏。体部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は肥厚し丸く収められている。内外面のナデ整形は雑に行なわれている。白色砂粒を少量含む。焼成は良く、濃青灰色である。
- 4 坏
須恵器 口径不明。肉厚で浅めの坏になると推定される。頸部が強めに押えられ垂直に立ち上がり、口縁部が屈曲して外反する。口唇部内面も押えられ平坦面を持つ。胎土には白色砂粒を少量含む。焼成は良く堅緻な土器である。青灰色。
- 5 平瓦 凹面布目痕、凸面縄叩き痕が観察される。両面および割れ面にも、濃緑色の自然釉が掛かっている。焼台として使用された可能性が強い。黒色砂粒を少量含む程度で非常にキメ細かな胎土である。焼成良く、青灰色を呈している。



- G 50 Grid P 1
- 1 黒褐色土 焼土・炭化物粒・白色火山灰を少量含む。
 - 2 褐色土 明褐色砂質土と黒褐色土の混土層。
 - 3 黒褐色土 焼土粒・白色火山灰を少量含む。粘質。
 - 4 褐色砂層 少量の鉄分を含む。
 - 5 灰褐色土 灰色粘質土を多量に含む。砂質。

- F 50 Grid P 9・10
- 1 黒褐色土 白色火山灰・明褐色土少量含む。
 - 2 黒色土 炭化物を微量含む。粘性弱い。
 - 3 暗褐色土 暗褐色粘土と砂の混土層。
 - 4 黒褐色土 白色火山灰を少量含む。粘性強い。
 - 5 黄褐色土 明褐色砂層と黒褐色土の混土層を含む。
 - 6 灰褐色土 灰褐色粘土に砂少量混入。砂質。

- F 51 Grid P 5
- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。
 - 2 褐色土 白色火山灰を多量、黒褐色土を少量含む。
 - 3 黒色土 炭化物を多量に、白色火山灰を微量含む。
 - 4 褐色土 第2層に近似する。やや粘性が強い。

第30図 C区柱穴群

C区柱穴群（第30図）

C区西半部の遺構が集中する地点、F 50・51Grid に位置している。第1号掘立柱建物跡を取り巻く様に検出されている。周辺には第7・8・9号溝跡や第2号溝跡などの遺構が集中している。B区同様中央および北側を攪乱されている。総数20基とB区に比較して小規模な柱穴群である。

平面形が楕円形や不整形形状の柱穴も数基存在しているが、基本形は方形ないし長方形と推定される。比率としては、3：2で、方形柱穴が主体を占めている。方形柱穴としては、F 50P1・P2・F 51P7などが在り、一辺の長さが20cm前後と40cm前後に概略分けることが可能である。深さは、辺の長さに比例して10cmから25cmと深く掘り込まれているが、B区と同形柱穴に比べ壁の立ち上がりが緩やかである。

長方形柱穴としては、G 50P1・F 51P2などが在り、長辺が20～30cmの範囲に包括される。深さは20cmを測るものが一基認められる以外10cm前後であり、方形柱穴より浅く掘り込まれ、皿状を呈している。

土層観察では、基盤層の明黄褐色砂質土を多量に混入した褐色土・暗褐色土を掘り方埋土とした柱穴がほとんどを占めていた。また、G 50P1・F 51P5には、柱痕が確認されているが、大多数の柱穴は柱が抜き去られた後に埋没したものと推定される。

遺物は、約半数の柱穴からB区柱穴群と同時期の土師器甕・須恵器坏・甕などの実測不可能な細片が出土している。



C区柱穴群



上・G 50 P 1土層 下・F 51 P 5土層

6 溝 跡 (SD)

溝跡は、A区で1条、B区で4条・C区で4条の合計9条が確認されている。A区の1条以外はすべて調査区を縦断する状態で検出されている。

第1号溝跡 (第31図)

A区I68GridからG75Gridにかけて位置している。調査区内を東西方向に横走する状態で検出されている。出土遺物から中世に属する溝と考えられる。

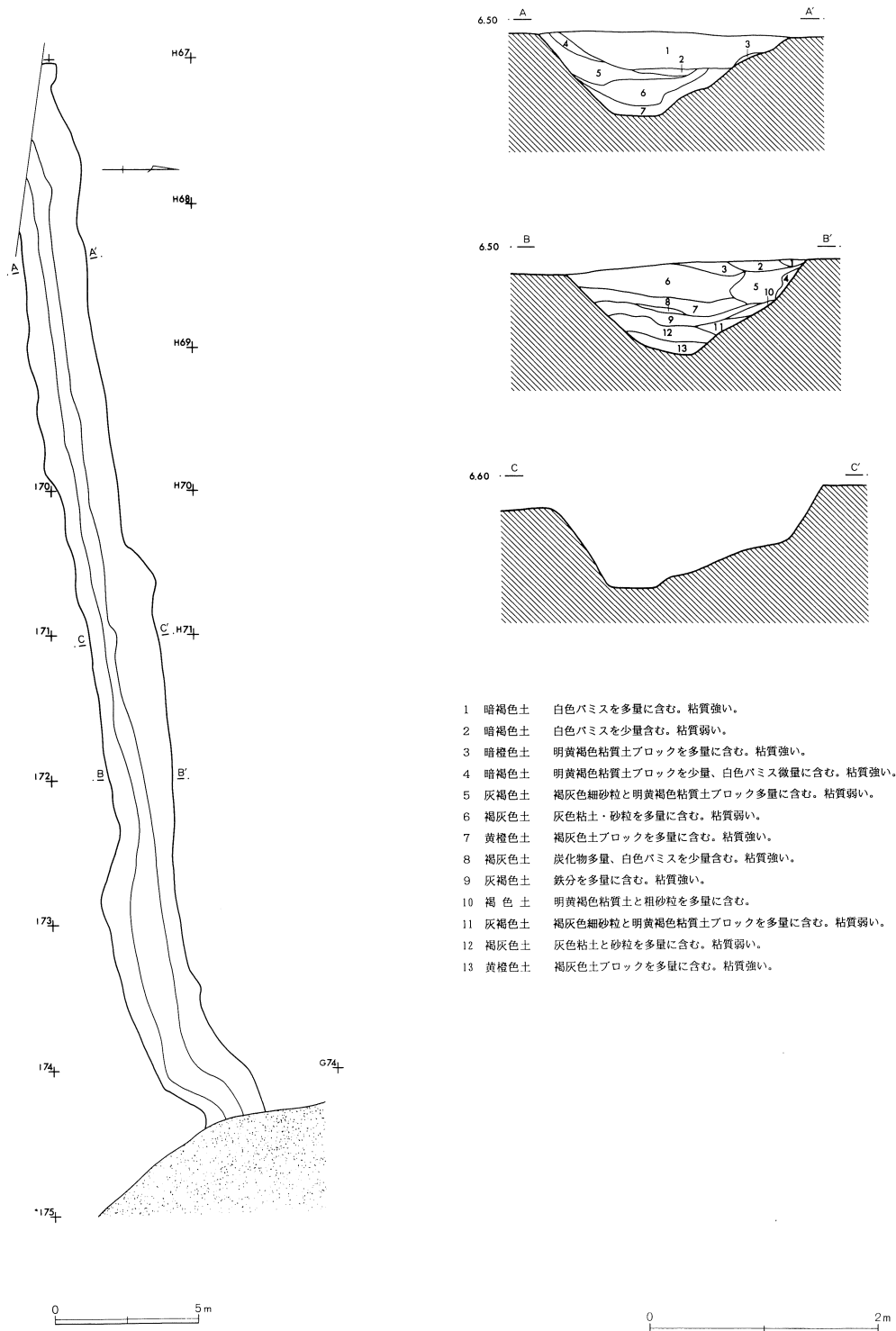
検出部分での規模は、長さ37mを測り、東端部がG74Grid地点で「L字」形にやや北へ折れ、埋没した沼地状の湿地に合流して消滅していた。幅および深さは、L69Gridで2.3m・0.68m、H71Gridで2.4m・0.68m・H73Gridで2.6m・0.66m、東端のH73Gridで2.3m・0.5mであった。底面での高低差は11cmと緩やかなものであるが、沼地へ流れ込んでいたものと考えられる。

平面形は、H73Gridで柵列跡側に突出する以外溝幅も変化せず、直線的に走行している。断面形は、北壁側の底面が部分的に崩れているが、本来箱葉研形であったものと推定される。覆土は、自然埋没の状態を示し、一部に黄橙色粘土の堆積が見られ一時期滞水していたことが窺える。

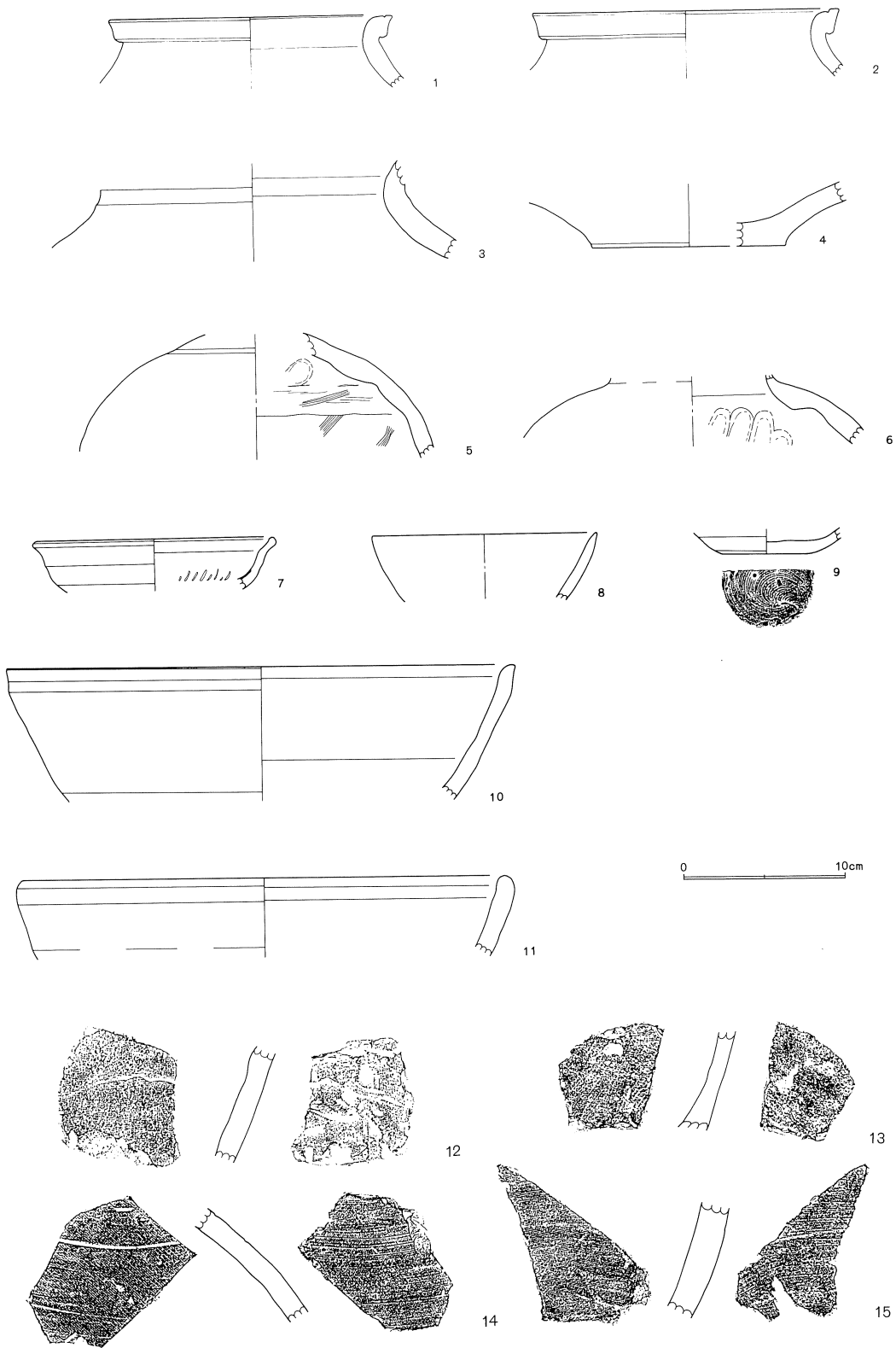
遺物は、溝底から14世紀代の常滑小壺、その他瀬戸産の皿・在地産の片口鉢など中世陶器類が出土している。

第1号溝跡出土遺物 (第32・33・34図)

- 1 壺
常滑 推定口径17.6cm・残高4.4cm、溝底部より出土。曲線的に外反する口縁部。口唇部は、折り返され幅1.2cmの縁帯が付く。縁帯の上下端は、ヘラ状の工具で押えられ、「V字」状の沈線となり、外面は強めのナデ整形が加えられ浅い窪みとなっている。内面も丁寧なナデ整形が施され平坦に仕上げられている。胎土には、白色砂粒と鉄分を多量に含む。焼成は良好で堅く焼き上り、濃茶褐色を呈している。
- 2 壺
常滑 推定口径19cm・残高4.2cm。口縁部の形状および整形が1に近似するが、折り返しの縁帯上端が強く上方に突出している。白色砂粒と鉄分を多量に含む胎土である。焼成は良好で堅緻。色調は、濃茶褐色を呈する。
- 3 甕
常滑 推定頸部径20.2cm。頸部から肩部への移行部にナデ整形時の凹線が見られる。内外面とも丁寧にナデ整形が施され平滑である。胎土は、白色砂粒と鉄分を多量に含む。焼成は、良好。色調は、茶褐色で、外面の一部に緑色の自然釉が掛かっている。
- 4 甕
常滑 推定底径12cm・残高3.9cm。胴部が強く外反しながら立ち上がる。底部直上に沈線が存在する。胎土に大粒の白色砂粒を多量含むが、鉄分の含有は少ない。焼成は、良く、堅く焼き上っている。茶褐色を呈し、内面には濃緑色の自然釉が掛かる。
- 5 瓶子
瀬戸 推定径不明。肩部の上端に二条の沈線が施されている。外面はナデ整形され平滑であるが、内面は指頭圧痕や粘土紐輪積痕が残り、凹凸も明瞭で雑な整形である。また外面には、淡緑色の釉が掛かっている。白色砂粒を少量含む胎土である。焼成は良好で、茶褐色を呈している。



第31図 第1号溝跡



第32图 第1号沟迹出土遗物(1)

6 瓶子瀬戸 推定径不明。5に比べ肩の張りが強い。外面には、淡緑色の釉が均一に掛かり整形不明。頸部と体部の接合部には、成形時の指頭圧痕が良く残る。胎土には、混入物も殆ど見られず、キメ細かい。焼成良好、茶褐色を呈している。

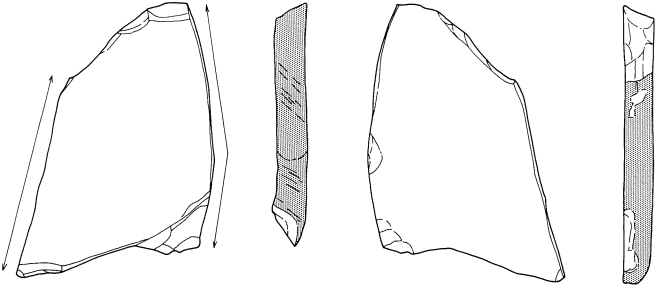
7 皿瀬戸 推定底径15.2cm・残高 3.2cmの下ろし皿。体部が緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部が一段屈曲して強く外反する。口唇部は、肥圧しやや角頭状に収められている。内外面とも丁寧なナデ整形が施され、内面底部にヘラ状工具で下ろし用の刻みが加えられている。

混入物が殆ど無くキメ細かな胎土である。焼成は非常に良く、灰白色。また、内面全面と外面体部中位まで淡緑色の灰釉が掛かる。

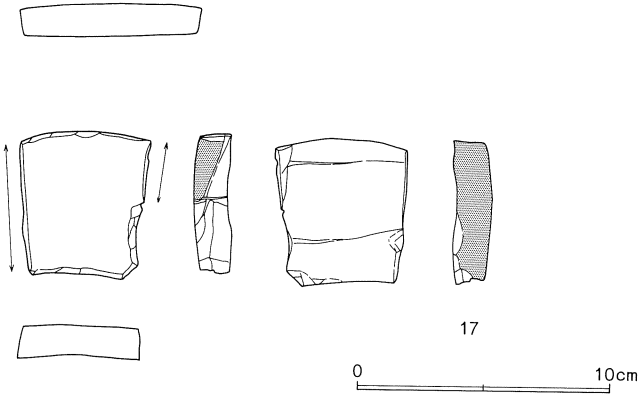
8 椀瀬戸 推定径不明。体部は、緩く内湾して立ち上がると推定される。内外両面ともナデ整形が施され平滑に仕上げられている。口唇部は、つままれ尖りぎみである。内外両面に緑茶褐色の灰釉が掛かる。混入物の無い胎土で、焼成も非常に良い。

9 皿瀬戸 底径 5.4cm・残高 2.1cm。両面ともナデ整形が加えられ、底部に糸切り痕を残す。胎土は、キメ細かく、焼成も良好。内面および底部直上まで緑茶褐色の灰釉が掛かる。

10 片口鉢在地産 推定口径31.6cm・残高 8.3cm。体部が緩く立ち上がり、口縁が直立する在地産須恵器系の鉢。内外面とも丁寧なナデ整形が施され、平滑である。特に内面は、使用度の高さを示すかのようにより平滑である。胎土には、小礫を少量含むが、キメ細かく、焼成も良好で堅緻である。色調は、黒灰色を呈している。

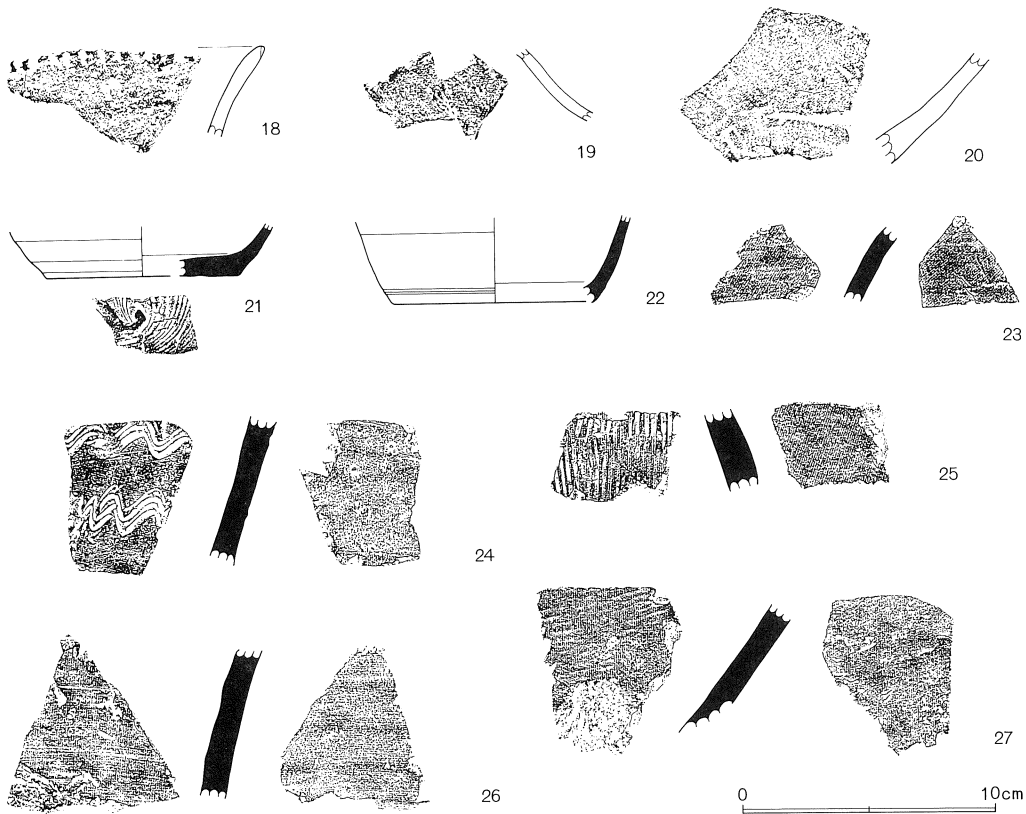


11 摺鉢在地産 推定口径31.0cm。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに内湾する。内外面とも雑なナデ整形が行なわれている。胎土は、白色の大粒砂粒を多量に含むため器面の荒れが目立つ。焼成は良く、灰白色。



12 甕在地産 12胴部下半、13が底部付近。両者とも内外面がヘラ整形されているが、12の内面は雑で、粘土紐の輪積痕が消されていない。

第33図 第1号溝跡出土遺物(2)



第34図 第1号溝跡出土遺物(3)

胎土には、大粒の白色砂粒を多量含むが、鉄分の含有は少ない。焼成は良好、茶褐色を呈している。

- 14 壺
在 地 産 肩部のやや高い位置に沈線が見られ、三筋壺を模したと推定される須恵器系の壺。内外両面とも丁寧なナデ整形が施され平滑である。白・黒色砂粒を少量含む。焼成は良好、濃茶褐色を呈している。
- 15 甕
在 地 産 須恵器系の甕底部。両面ともナデ整形が行なわれている。胎土は、黒色砂粒を少量含む。焼成良く、黒灰色。
- 16 砥石
17 常滑 常滑の甕の破片、16は底部、17が胴部を再利用して砥石に転用したものである。16は鋭利な上下端を両側から打ち欠き丸く再加工し、左右両側面を砥面として使用している。砥面は、斜位に使用痕が残り、滑沢な平坦面となっている。17は、全側面を特に土器の表面から打ち欠き、長方形に成形・再加工して両側面を砥面としている。左側面の砥面は全面を、右側面の砥面は凹凸があるため上端側を使用している。
- 18 台付甕
19 弥生 第1号住居跡付近の覆土中から出土している。18口縁部・19肩部・20底部である。いずれも器面の剝離が著しく、細かな整形は不明瞭であるが、わずかにハケ整形が器内外に残されている。胎土には、赤・黒砂粒を多量に含む。焼成は良好で、20が二次加熱を受け脆くなっている。色調は、茶褐色を呈する。

- 21 坏
須恵器 推定底径 7.6cm・残高 2.1cm。底部と体部の器厚差が顕著で、体部が緩く立ち上がる。内外面にナデ整形が施されているが比較的雑で粘土層が付着したり、凹凸が存在する。底部の整形は、糸切り離し後無調整である。胎土は、白・黒砂粒を少量含む。焼成良好で、濃青灰色を呈する。
- 22 坏
須恵器 推定底径 7.8cm・残高 3.3cm。体部がわずかに内湾し、口径に比べ深みがあると推定される。底部と体部の接合部に稜線が残る。内外両面のナデ整形は丁寧に行なわれている。白・黒砂粒を多量に含むがキメ細かな胎土である。焼成は、非常に良く堅い。濃青灰色を呈する。
- 23 甕
24 須恵器 23が無文で外反が強く、24は波状文が付き直線的に立ち上がる口縁部。内外両面ともナデ整形が丁寧に平滑になっている。両者とも胎土には、白色砂粒を少量含む。焼成良好。濃青灰色。
- 25 甕
26 須恵器 25肩部・26胴部中位・27底部付近。25は外面縦位の叩き・内面ナデ、26は内外面ともナデ、27が外面横位の叩き・内面ナデ整形が施されている。三者とも内面が平滑に仕上げられている。白色砂粒を少量含む胎土である。焼成は良好で、26青灰色、他は濃青灰色を呈している。

第2号溝跡（第35図）

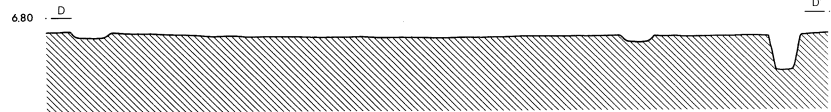
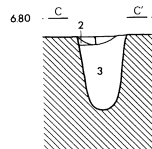
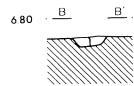
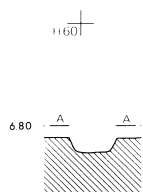
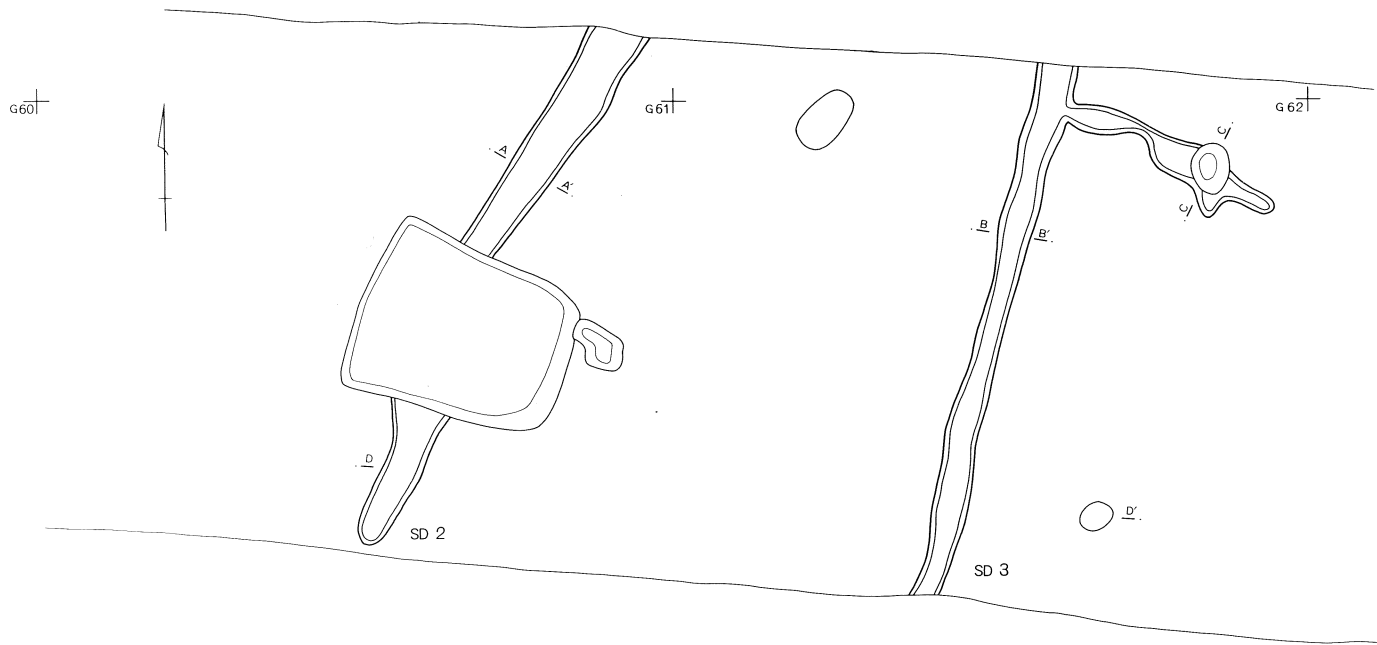
B区中央部のG61Gridに位置している。隣接する西側のGridに第1号住居跡、東側のGridに第2号溝跡が存在している。北側を用水掘削のために切られ消滅している。

第3号土壙と重複関係があり、先端近くを切られている。検出面での規模は、長さ4.5m・最大幅0.48m・最小幅0.23m・深さ6～10cmを測り、攪乱溝の直前に先端部が存在している。南から北へ7cmの勾配で緩く下る平底の浅い溝である。覆土は、基盤層の明黄褐色砂質土ブロックを多量に含む黄褐色土であった。遺物は、覆土中から土師器甕、須恵器坏・甕が出土している。

第2号溝跡出土遺物（第36図）

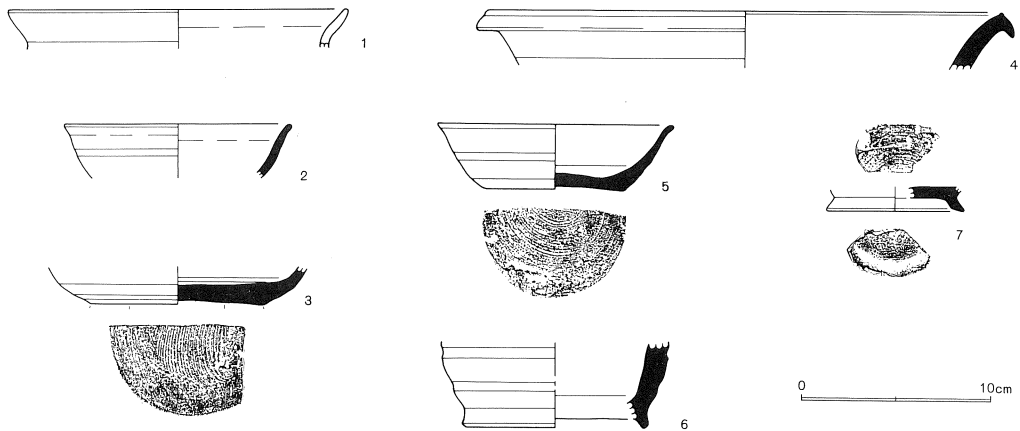
- 1 甕
土師器 推定口径18cm。口縁部が直線的に強く外反する。口唇部は丸く収められ、内面に平坦面が存在する。内外面とも丁寧なナデ整形が施されている。白色砂粒を少量含む胎土である。焼成良好で、濃茶褐色を呈する。
- 2 坏
須恵器 推定口径12cm・残高2.8cm。緩く内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部がわずかに外へ突出する。両面のナデ整形は丁寧に施され、底部は糸切り離し後無調整と思われる。胎土には、赤・白・黒色砂粒を多量に含むため、器面の荒れが目立つ。焼成やや不良、赤褐色を呈している。
- 3 坏
須恵器 推定口径9cm・残高1.9cm。底部揚げ底で、外縁のみ接地する。底部は回転糸切り離し後周辺ヘラ削りが行なわれ、体部には2段のヘラ削りが加えられている。胎土には、白色砂粒と白色針状物質を多量に含む。焼成は良好、濃青灰色を呈する。南比企窯跡群産。底部内面が滑沢化しており転用硯の可能性が認められる。

第35図 第2・3号溝跡



- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量、白色砂粒微量含む。
- 2 暗褐色土 明黄褐色粘質土と黒褐色土の混土层。
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物を微量含む。





第36図 第2・5・6・8号溝跡出土遺物

第3号溝跡 (第35図)

B区中央部のG 62Gridに位置している。第2号溝跡の東側5mにほぼ並行して検出されている。南側をトレンチ状の攪乱溝で切られ消失している。攪乱溝の反対側や調査区の壁に断面を検出することができなかったため、調査区内に端部が存在した可能性が強い。また、用水側には、柱穴を切り東へ1.75m 延びる分流が存在している。検出面での規模は、長さ4.3m、最大幅 0.28m・最小幅0.2m、深さ 2~4cm を測る浅い皿状の溝である。覆土は、焼土粒・炭化物を少量含む黒褐色土が堆積していた。

遺物は、図示不可能な土師器甕の細片が出土している。

第4号溝跡 (第37・38図)

B区東端側のG・H 64Gridに位置している。第5号溝跡に接して並行し、調査区を南北に縦断する状態で検出された。遺構確認作業では、両者の重複関係が判然としなかったが、土層観察で第5号溝跡に切られていることが確認されている。他の溝跡同様に北側を用水掘削、南側を攪乱溝で破壊されているが、溝の掘り込みが深いため攪乱溝下に壁中位以下が遺存していた。

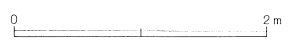
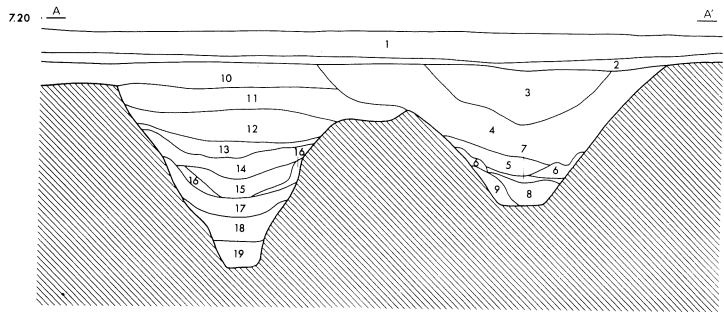
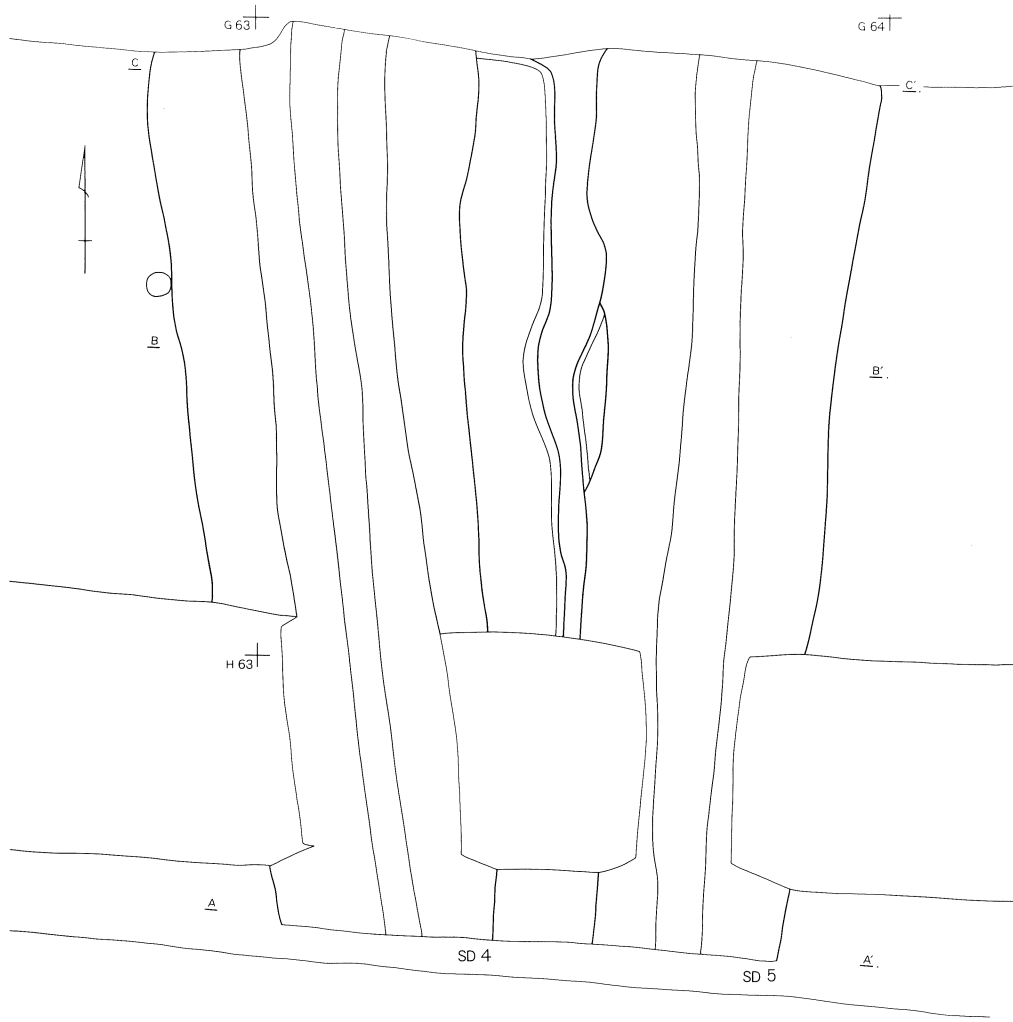
検出範囲での規模は、長さ 7.15m・最大幅 2.35m・最小幅1.7m・深さ 1.16mを測り、底面の標高差は、北と南側で 5cmあり緩く北へ下っている。断面形は、壁の立ち上がりが直角に近く、底幅が狭い葉研形である。覆土は乱れも無く、整然とした自然埋没状態を示し、黒灰色粘質土と基盤層の明黄褐色土を多量に含む褐色土・褐灰色土が主体に堆積していた。

遺物は、図示できない程の細片であるが、覆土上層から土師器坏・甕、下層の18・19層から弥生終末期の台付甕が出土している。

第5号溝跡 (第37・38図)

B区東端側のG・H 64・65Gridに位置し、調査区を南北に縦断する状態で検出された。西側に近接して所在する第4号溝跡を切って構築されている。

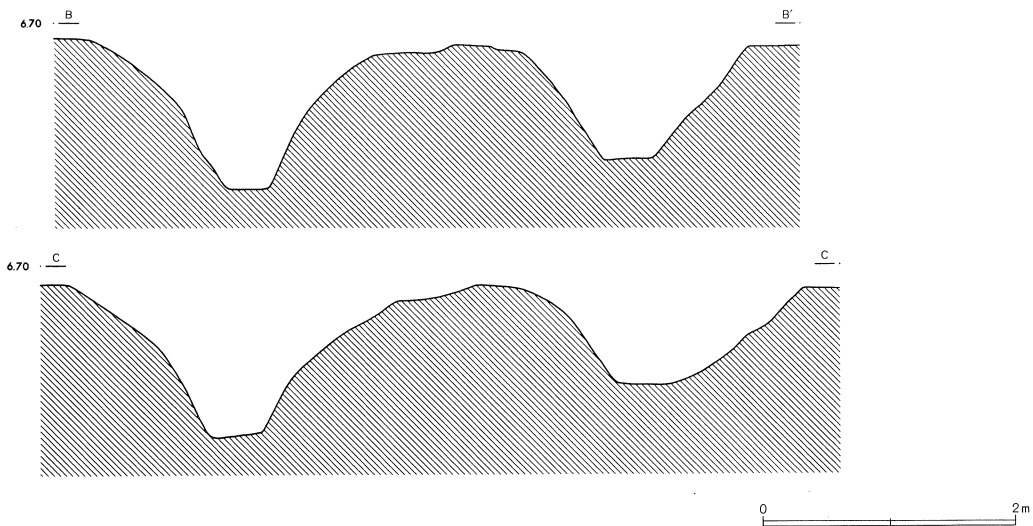
検出範囲での規模は、長さ 7.15m・最大幅 2.75m・最小幅 2.25m・深さ0.9mを測り、底面は標高差が無く平坦であった。断面形は、幅に比較して浅い箱葉研形を呈している。



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 水田耕作土。 | 6 黄褐色土 溝肩部の崩壊と灰褐色土の混土層。 |
| 2 暗褐色土 水田床土。 | 7 灰褐色土 褐色鉄分を多量に含む。粘性強い。 |
| 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒を少量含む。 | 8 褐灰色土 赤褐色鉄分を少量含む。粘性強い。 |
| 4 褐色土 少量の鉄分を均一に、焼土粒を微量に含む。 | 9 灰褐色土 明黄褐色粘質土と褐灰色土の混土層。 |
| 5 灰褐色土 褐色鉄分を少量含む。 | 10 褐色土 炭化物を微量、白色細砂粒少量含む。 |

- | | |
|---------|------------------------------|
| 11 黒褐色土 | 鉄分・白色細砂粒を少量均一に含む。 |
| 12 黒褐色土 | 鉄分・白色細砂粒を微量含む。 |
| 13 灰褐色土 | 鉄分を多量に含む。粘性強い。 |
| 14 褐色土 | 鉄分を多量に含む。粘性強い。 |
| 15 褐灰色土 | 少量の鉄分を含む。 |
| 16 暗褐色土 | 明黄褐色粘質土と褐灰色土の混土層。 |
| 17 灰褐色土 | 少量の鉄分を含む。非常に粘性強い。 |
| 18 褐灰色土 | 黒灰色粘質土と明黄褐色粘質土の混土層。少量の鉄分を含む。 |
| 19 褐灰色土 | 明黄褐色粘質土と鉄分を多量に含む。非常に粘性強い。 |

第37図 第4・5号溝跡（1）



第38図 第4・5号溝跡(2)

覆土は、第4号溝跡同様に自然埋没を示す状態であり、また、第1号溝跡と同じく10層(基本層序Ⅲ層)を切って掘り込んでいることが確認できた。

遺物は、検出できなかったが、中世所産の溝と推定される。

第6号溝跡(第39・40図)

C区西側寄りのF・G46・47Gridに位置している。周辺には、第1号掘立柱建物跡・柱穴群・第7～9号溝跡・第2号井戸跡などの遺構が集中している地点である。

中央をトレンチ状の攪乱溝で切れられ上端部が消滅している。また、攪乱溝の北で第7号溝跡に合流している。

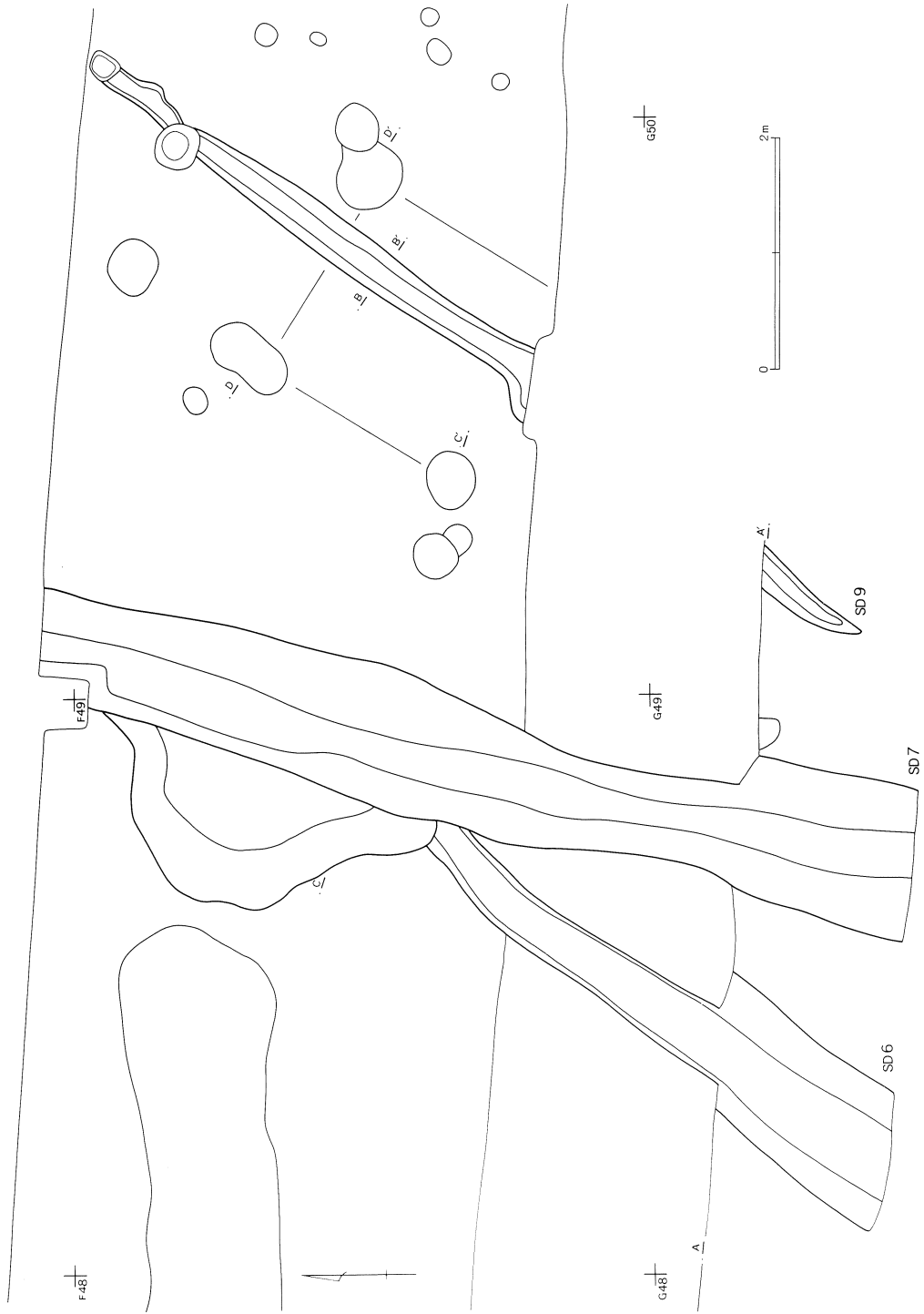
検出した範囲での規模は、長さ5.1m・最大幅1.23m・深さ0.38mを測り、高低差6cmで非常に緩く北へ傾斜している。平底で壁の立ち上がりが緩い浅い溝である。

覆土は、粘性の強い褐灰色土・黒褐色土が自然埋没の状態に堆積しているのが観察できた。また検出時に第7号溝跡覆土との相違が顕著に認められたので重複関係を精査したが、その事実は認められず同一の溝であると判断した。

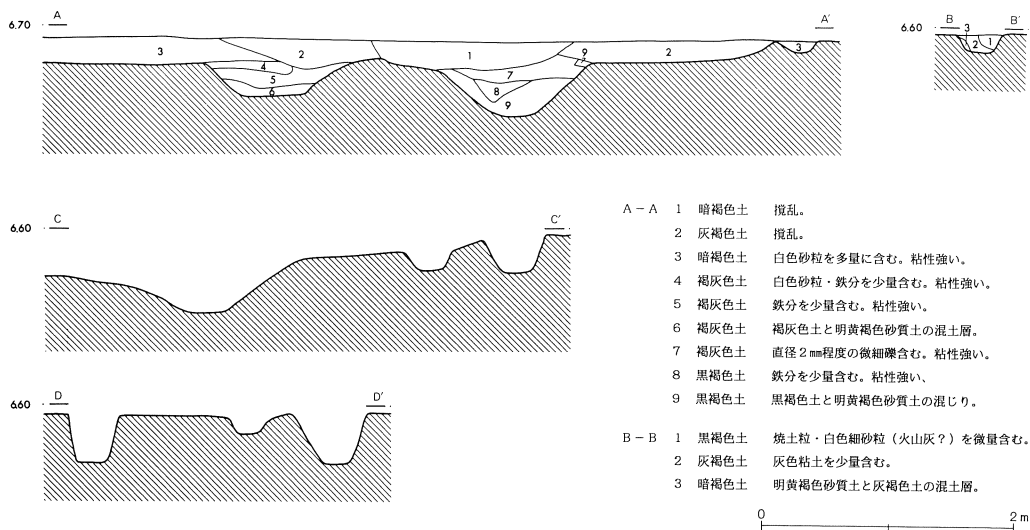
遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶が出土している。

第6号溝跡出土遺物(第36図)

- 5 杯 口径12.6cm・底径7.4cm・器高3.4cm。揚げ底の底部から体部が緩く立ち上がり、
 須恵器 肥厚して丸く収められた口唇部がわずかに外反する。底部整形は、糸切り離し後無調整、体部は雑なナデ整形が施され凹凸が目立つ。胎土は、白色砂粒を少量含む程度でキメ細かい。焼成は良好、濃青灰色を呈している。東金子窯跡群産と推定される。



第39图 第6·7·9号沟迹(1)



第40図 第6・7・9号溝跡（2）



第6（左）・7（右）号溝跡土層



第9号溝跡土層

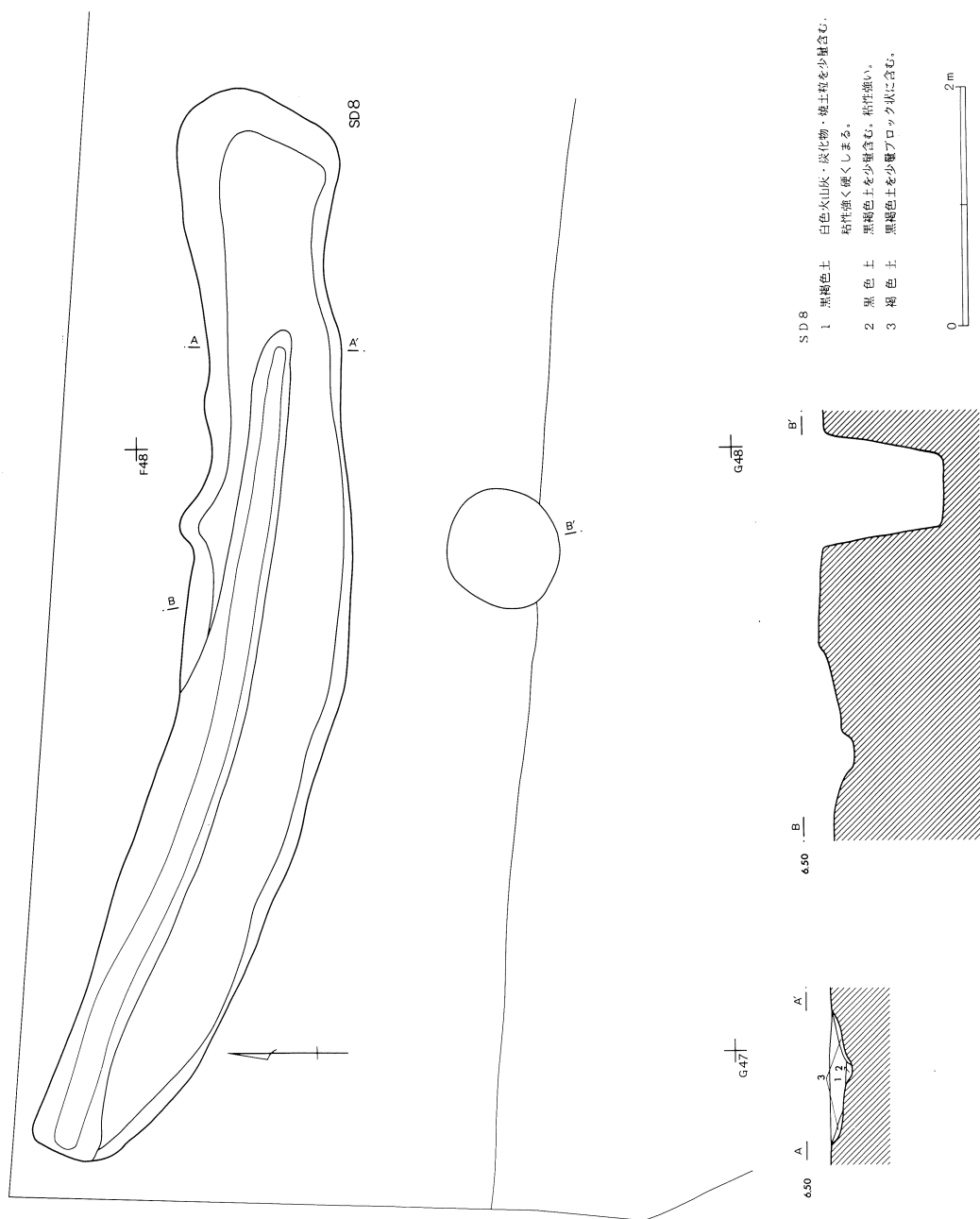
- 6 長頸瓶 底径不明、残高 4.5cm。ナデ整形が雑に行なわれ凹凸が明瞭な体部に外反の強い高
 須恵器 台が付く。高台は、角頭状に成形され端部内面のみ接地する。底部の整形は、回転糸
 切り離し後無調整であろう。胎土には、白・黒色砂粒を少量含む。焼成は、良く堅緻
 である。色調は、灰白色を呈している。

第7号溝跡（第39・40図）

F50・G49Gridに位置している。第8号溝跡と第9号溝跡の中間に検出された。他の溝跡と同様に北および南側の一部が攪乱で消滅している。

検出部の規模は、長さ 7.85m・最大幅 1.35m・最小幅 1.05m・深さ 0.55mを測る。北から南へ17cmの比高差で下っている。丸底で、壁の立ち上がりが緩い「U字」状の浅い溝である。第7号溝の合流点北には、不整円形の水溜り状の突出部が存在している。覆土には、基盤層の明黄褐色土を混入し粘性が強い褐灰色土・黒褐色土が自然埋没状態で堆積していた。

遺物は、図示できない程の細片であるが、南比企窯跡群産の須恵器坏と甕、土師器の甕が出土している。



第41図 第8号溝跡

第8号溝跡（第41図）

C区西端のF47～49Gridにかけて位置している。近接する他の溝跡と異なり東西方向に走行する状態で検出された。また、他の遺構との重複関係も無く、単独で構築されている。

平面形は、北に開く緩い弧状を呈し、両端部が開きぎみに収束している。断面形は、中央が一段深く掘り込まれた船底形である。

規模は、全長 9.25m・最大幅 1.32m・最小幅 0.98m・深さ22～29cmを測り、中央部が最も深

く掘り込まれている。覆土は、粘性の強い黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物は、土師器甕の細片と須恵器高台杯が出土している。

第8号溝跡出土遺物（第36図）

- 7 高台杯
須恵器 推定底径7.2cm、外縁部が接地する内剝状の高台が付く杯。円柱技法で成形されたと考えられ、底部上面に本来ナデ整形で消される糸切り痕が残されている。

覆土は、白・茶褐色砂粒を少量含む。焼成は良好、濃青灰色。

第9号溝跡（第39・40図）

F・G49・50Gridに位置し、第1号掘立柱建物跡のP1とP2間に検出されている。建物跡との切り合い関係は存在しないが、北端部をF50P2やF51P9に切られている。また、第7号溝跡などと同様に北および南側を攪乱で消失しているが、攪乱溝南に先端部が存在する。

調査区内での規模は、長さ8.28m・最大幅0.35m・最小幅0.2m・深さ7.5～20cmを測り、浅く小規模な溝である。

遺物は、黒褐色土中から土師器甕と南比企窯跡群産の須恵器杯の細片が出土している。

7 井戸跡（SE）

井戸跡は、A・C区で各1基ずつ検出されている。

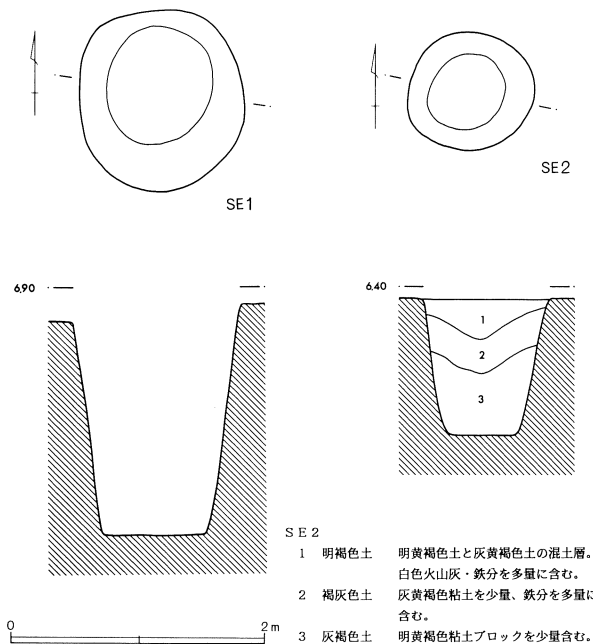
第1号井戸跡（第42図）

A区のH68Gridに位置し、第2号住居跡の南コーナーを切って掘り込まれている。長軸1.4m・短軸1.34m・深さ1.47mを測り、平面形は不整円形を呈している。

断面形は、壁が垂直に掘り込まれ、湧水層である濃茶褐色砂層および明黄褐色砂質土層が崩落した下膨れ状の素掘りの井戸である。近世瓦を多量に含む茶褐色土で人為的に埋められていた。覆土下層から明治期の陶磁器細片が出土している。

第2号井戸跡（第42図）

C区西端のF48Gridに位置し、第8号溝跡に近接して検出されている。南側一部を攪乱溝で切られている。直径1.05m・深さ0.95mの小形で浅い素掘りの井戸である。遺物は検出されなかったが、覆土の状態が周辺の溝跡に近似しており、同時期のものと推定される。



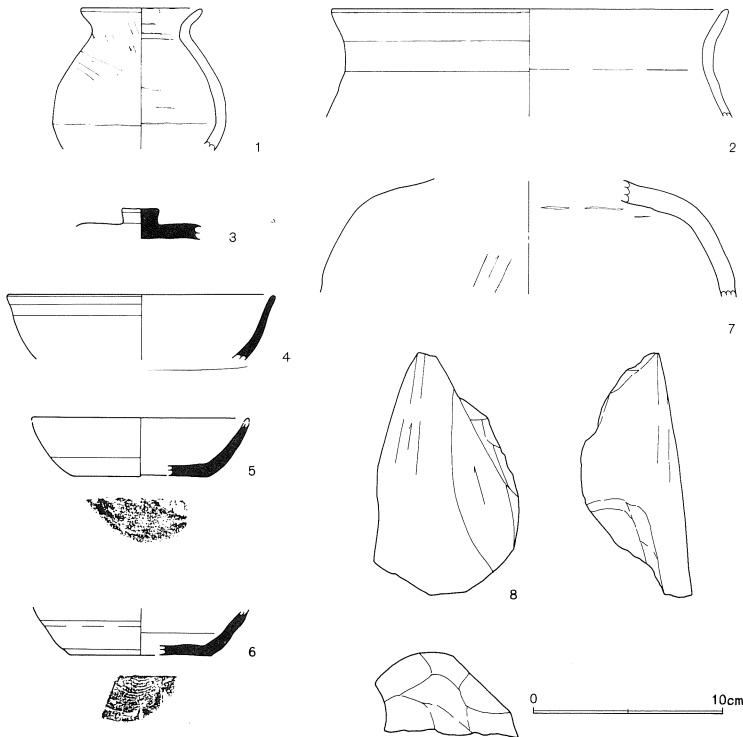
第42図 第1・2号井戸跡

8 グリッド出土遺物

調査区内には、水田耕作に関係した攪乱が存在し、随所で遺構を破壊している。ここで図示した遺物は、すべて各遺構の攪乱から出土したものである。

グリッド出土遺物（第43図）

- 1 壺
弥生 推定口径 6.4cm・残高 7.4cm。H64Grid・第4号溝跡攪乱より出土。胴部下位に最大径を持つ小形の壺。球形の胴部から口縁部が強く外反する。胴部下端は、強く屈曲し稜線を描出している。
頸部外面は縦位、胴部は斜位に、口縁部内面は横位にハケ整形が施されている。口唇部は、丁寧にナデ整形されハケ整形痕が消し去られている。胎土には、茶褐色砂粒を少量含む。焼成は良く、色調は茶褐色を呈している。赤彩の可能性が認められる。
- 2 甕
土師器 推定口径21cm・残高 5.7cm。G 60Grid・第3号住居跡南。内湾して立ち上がる胴部から頸部が直立し、わずかに肥厚した口縁部が緩く外反する。口・頸部は内外面ともナデ整形が施されている。胴部は荒れが激しく詳細不明であるが、ヘラ削りと推定される。赤・黒砂粒を多量に含む胎土である。焼成やや不良、赤褐色。
- 3 蓋
須恵器 鈕径 2cm。F 49Grid 第7号溝跡。体部から直立する円柱状の鈕で、頂部は外周より低く、わずかに痕跡を留める程度である。鈕部ナデ、天井部ヘラ削り整形が行なわれている。胎土は、白色砂粒を少量含む程度でキメ細かい。焼成良好で、濃青灰色。
- 4 坏
須恵器 推定口径14.2cm・残高3.4cm。H61Grid・第2号溝跡。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。
内外面ともナデ整形が丁寧に施され、器面が平滑である。
胎土に白色針状物質を含む。焼成良好



第43図 グリッド出土遺物

で灰白色を呈する。南比企窯跡群産。

5 坏
須恵器

推定口径11.6cm・残高 2.8cm。G 61Grid・第2号溝跡。体部が直線的に立ち上がる小形で浅めの坏。器面の荒れが激しく、詳細な整形は不明。底部は、回転糸切り離した後無調整。胎土は、白・茶褐色砂粒を少量含む。焼成不良で灰白色を呈する。

6 坏
須恵器

推定底径 7.4cm・残高 2.5cm。H 61Grid・第2号溝跡。わずかな揚げ底から緩く内湾しながら体部が立ち上がる。内外面のナデ整形が雑で凹凸が顕著である。底部の整形は、糸切り離した後無調整である。

白色砂粒と白色針状物質を少量含む胎土である。焼成は良好。青灰色である。南比企窯跡群産。

底部内面は、平滑化が著しく転用硯として使用されたものであろう。

7 瓶子
常滑

口径不明。H 69Grid・第1号溝跡。強く張った肩部から体部がすぼまりながら直線的に底部に至る器形と推定される。

外面には、胴部から頸部側へのヘラ整形痕が残り、内面は、ナデ整形が施されているが、粘土紐の接合痕が観察される。

白色砂粒と鉄分を多量に含む胎土で、器面がやや荒れている。焼成は、良好で堅く焼き締まり、濃茶褐色を呈している。

8 支脚

G 49Grid・第7号溝跡。全形は判然としないが、先端が細くなる円柱状になるものと推定される。基部側から先端側に、ヘラ削り整形を行ない器面を平滑に仕上げている。残存部全体に二次加熱を受け脆くなっている。

胎土には、白色砂粒を少量含む。色調は、赤褐色・黒褐色を呈している。

V まとめ

今回の調査で検出された遺構は、住居跡3軒・掘立柱建物跡1棟・土壇9基・柵列跡1列・柱穴群2か所・溝跡9条・井戸跡2基であるが、すべての遺構が断片的な把握に留まらざるを得なかった。従って、遺構に伴う遺物も不完全なものである。このように悪条件が重なっているが、限られた遺構と遺物からひとつおりの時期的な問題点などを整理しておきたい。

弥生時代後期後半の遺構としては、第1・2号住居跡と第4号溝跡がある。2軒の住居跡は、住居間が1mの近距離で構築されているため同時存在は不可能と推定される。前後関係は、両者からの出土土器が、現段階では区分が明確化していない同型式の範疇に含まれることや共通する判断材料を欠くこともあり、適切な判断は下せないが、余り時間差は無いものと考えられる。住居跡の形態は、隅丸長方形・楕円形であるが、該期大集落遺跡の富士見市南通遺跡（小出1983）や須黒神社遺跡（浜野1986）では、両形態に隅丸方形などを含めた住居跡が混在した状態で存在している。南通遺跡では、該期土器の4期区分（小出1983）が提示されているが、住居形態に置き換えてみると隅丸長方形→隅丸方形への変遷が想定されている。

伊佐島遺跡の2軒の住居跡に共通することは、床面が貼り床で掘り方を持つことである。須黒神社遺跡では半数強、札之辻遺跡（宮1986）では70%に認められ、南通遺跡・打越遺跡（小林1978）・北通遺跡（会田1984）でも普遍的に存在している。この住居構築方法が時期差や地域差など何に起因するのかは明確ではないが、該期の特徴の一つに挙げられるものと思われる。

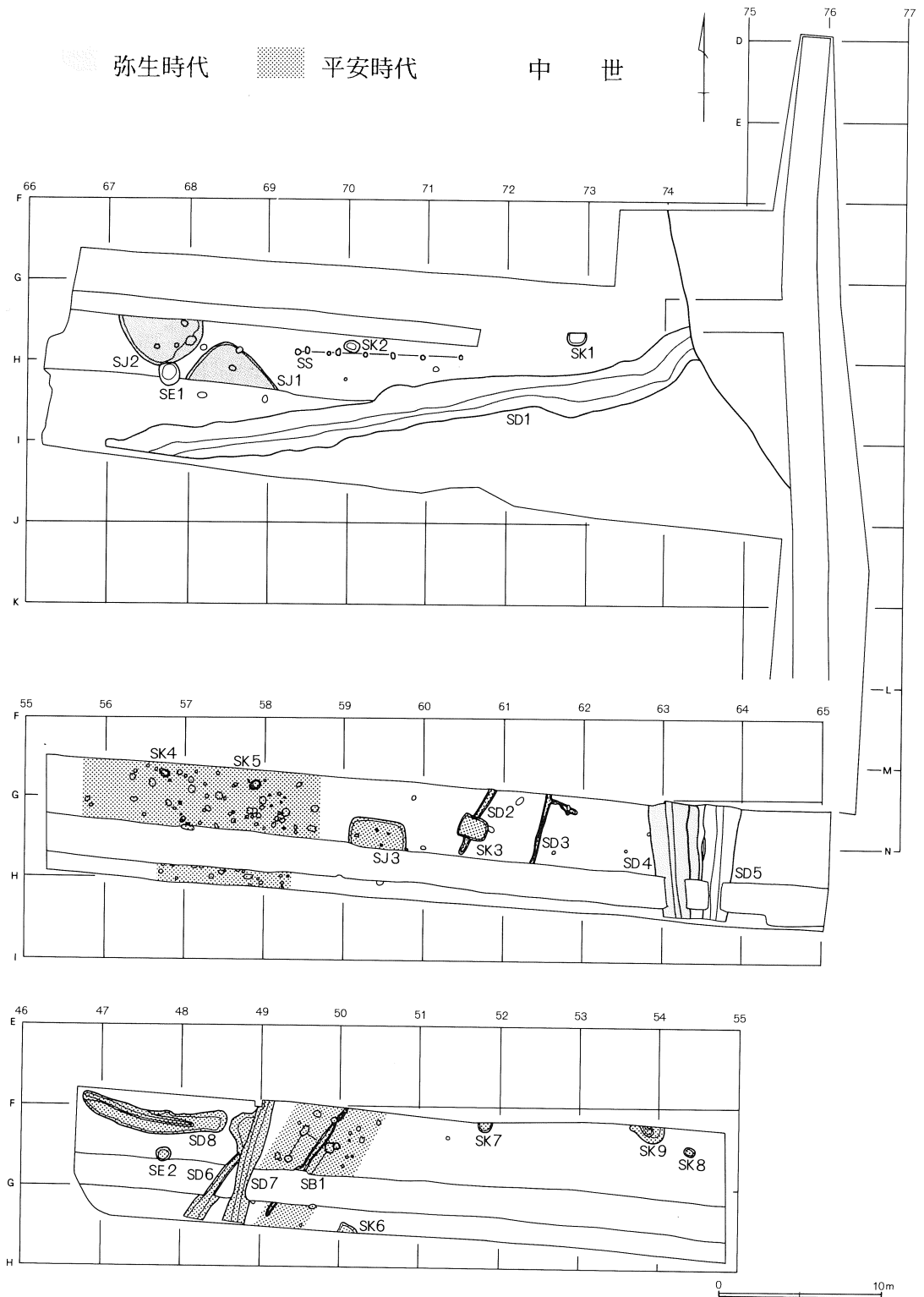
第4号溝跡は、断面形がV字形で、環濠と推定され、住居跡の西20mに検出されている。南通遺跡で検出された台地の基部を切って構築された溝状遺構も、溝外に住居跡が存在しないことを踏まえて同様な機能であろう。

住居跡から出土した土器は、前野町式に該当するものである。前野町式については、古墳時代初期の土器と深い関係が存在し、現在なお編年・帰属時期など問題点が指摘され続けている。そのため、ここでは本遺跡出土の該期土器の特徴を述べることにする。

両住居跡とも½以上が失われており、該期土器の器種構成をすべて備えたものではなく不十分な資料であるが、第2号住居跡からややまとまった資料が出土している。器種としては、高坏・台付鉢・壺・台付甕が存在しているが、全形を知り得るものは台付甕だけである。台付甕は、胴部に最大径をもち、内外面にハケ整形痕を残し口縁部にナデ整形を施した後、口唇部に刻みを加えていることを特徴としている。また、あくまでも推定径ではあるが、口径に大小が存在する。

壺には、胴部が球形・下膨れ状の2種が存在するが、下膨れ状の壺が主体を占めるようである。下膨れ状の壺は、胴部から底部への移行面に稜線が描出され、ヘラ磨き整形後、赤彩が施されている。球形胴の壺は、ハケ整形後ヘラ磨きが施され赤彩の痕跡は認められない。また、第1号住居跡の壺には、断面三角形の隆帯が、頸部に貼付されている。

以上、簡単ではあるが、出土土器の特徴をまとめてみた。県内の武蔵野・大宮台地では、400軒



第44図 遺構分布図

を優に超す該期住居跡が検出され、資料の蓄積が進行している。いずれ機会を改めて検討したいと考えている。

伊佐島遺跡の中核をなすと推定される平安時代の遺構群は、第3号住居跡、第1号掘立柱建物跡第3～9号土壇、第2・3・5～9号溝跡、B・C区柱穴群・第2号井戸跡である。位置的には、B・C区に集中して存在しているが、調査区内各所が攪乱されているとはいえ、A区から遺構はおろか遺物もほとんど出土しない事実が調査時の所見として認められた。該期の遺構が元よりA区側には存在していなかった可能性を示唆するものであろう。遺物は、量的にも質的にも貧弱なものであるが、第3号住居跡と第3・9号土壇を中心に時期を比定でき得る資料の出土を見た。

器種としては、土師器甕・須恵器蓋・坏である。土師器甕は、最大径を肩部に持ち、直立する頸部から口縁部が「コ」の字状に外反する器形である。須恵器蓋は、鈕を持たず、口縁部の屈曲が明瞭で、天井部のヘラ削りは、狭い範囲に施されている。坏は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部の外反が弱い。内外面にナデ整形痕が明瞭に残され、底部整形が回転糸切り離し後無調整のものである。時期的には、9世第Ⅱ四半期を主体にしているものと考えられる。

中世の遺構は、第1・4号溝跡、柵列跡が該当し、A区とB区東端に所在している。第1号溝跡と第4号溝跡の関係を直接確認することは不可能であった。しかし、規模や断面形態および土層状態に共通性が多々存在し、両者は同一である可能性が高いものと考えられる。ほぼ東西に走行する溝が直角に向きを変えているものと想定され、付随する施設として小規模であるが柵列が存在している。溝底から14世紀代の常滑壺が検出されており、該期には中世居館として機能していたものであろう。

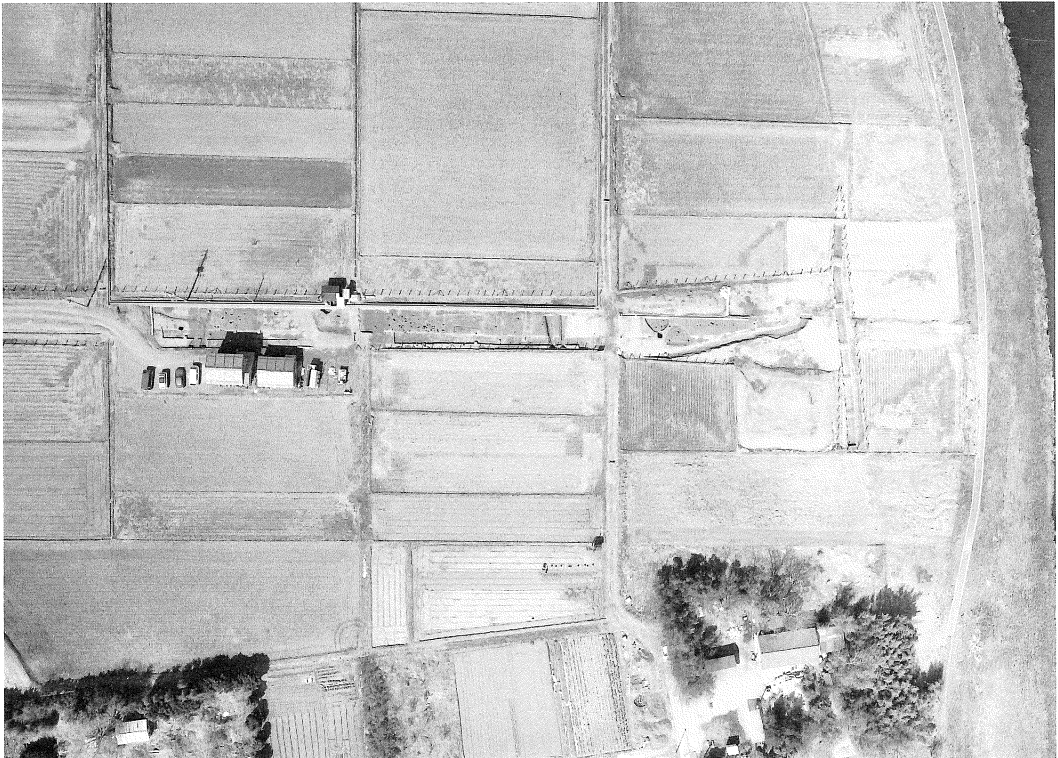
伊佐島遺跡の今回の調査は、県道改修工事に伴う事前調査であったため面的に広がり無しの狭長な調査区であった。それに加え、耕地整理やその後の水田耕作のために、調査区内の随所に攪乱が存在しているような状況であった。しかし、調査例が僅少な武蔵野台地下の荒川低地において、弥生時代後期後半・平安時代・中世の遺構が検出できたことと、遺跡の東・西・北限を確認できたことは大きな成果であると言えよう。

引用参考文献

- 会田 明 1980 『宮廻遺跡』 富士見市遺跡調査報告第10集 富士見市遺跡調査会
- 会田 明 1985 『難波田氏館跡発掘調査報告書(5)』 富士見市文化財報告第33集 富士見市教育委員会
- 荒井幹夫他 1986 『難波田氏館跡発掘調査報告書』 富士見市文化財報告第35集 富士見市教育委員会
- 熊野正也 1977 「弥生土器一関東 南関東3一」『考古学ジャーナルNo139』 ニュー・サイエンス社
- 小出輝雄 1978 『打越遺跡』 富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
- 小出輝雄 1983 『針ヶ谷遺跡群Ⅵ』 富士見市遺跡調査会調査報告第20集 富士見市遺跡調査会

- 小出輝雄 1983 『針ヶ谷遺跡群』 富士見市遺跡調査会調査報告第21集 富士見市遺跡調査会
- 小出輝雄 1988 『宮廻遺跡第10地点』 富士見市遺跡調査会調査報告第30集 富士見市遺跡調査会
- 小林佳子他 1983 『打越遺跡』 富士見市文化財報告第28集 富士見市教育委員会
- 佐々木保俊 1984 『針ヶ谷遺跡群』 富士見市遺跡調査会調査報告第23集 富士見市遺跡調査会
- 笹森健一他 1978 『川崎遺跡（第3次）・長宮遺跡発掘調査報告書』 郷土史料第21集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一他 1982 『長宮遺跡第8次の調査』 上福岡市遺跡調査会調査報告書第1集 上福岡市遺跡調査会
- 笹森健一 1985 『埋蔵文化財の調査（Ⅶ）』 郷土史料第31集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一 1986 『埋蔵文化財の調査（Ⅷ）』 郷土史料第32集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一 1987 『鷺森遺跡の調査』 郷土史料第33集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一 1988 『埋蔵文化財の調査（Ⅹ）』 郷土史料第35集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一 1989 『埋蔵文化財の調査（11）』 郷土史料第37集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一 1991 『埋蔵文化財の調査（13）』 郷土史料第41集 上福岡市教育委員会
- 高橋敦他 1985 『富士見市遺跡群Ⅲ』 富士見市文化財報告第34集 富士見市教育委員会
- 高橋敦他 1986 『富士見市遺跡群Ⅳ』 富士見市文化財報告第35集 富士見市教育委員会
- 高橋敦他 1987 『針ヶ谷遺跡群』 富士見市遺跡調査会調査報告書第27集 富士見市遺跡調査会
- 谷井彪他 1988 『埼玉の中世城館跡』 埼玉県教育委員会
- 浜野美代子 1986 『須黒神社遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第56集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮 昌之 1986 『札之辻・小井戸』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第55集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真図版



調査区航空写真



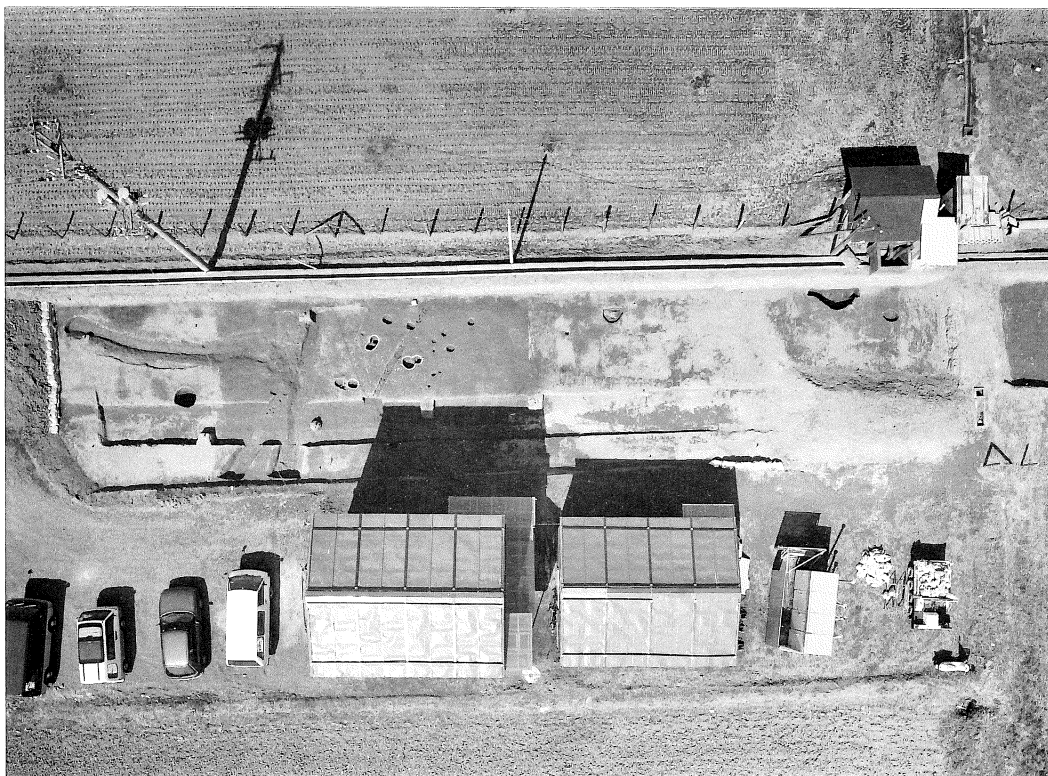
遺跡遠景



A区航空写真



B区航空写真



C区航空写真



第 1 号住居跡床面検出状態



第 1 号住居跡完掘状態



第 2 号住居跡床面検出状態



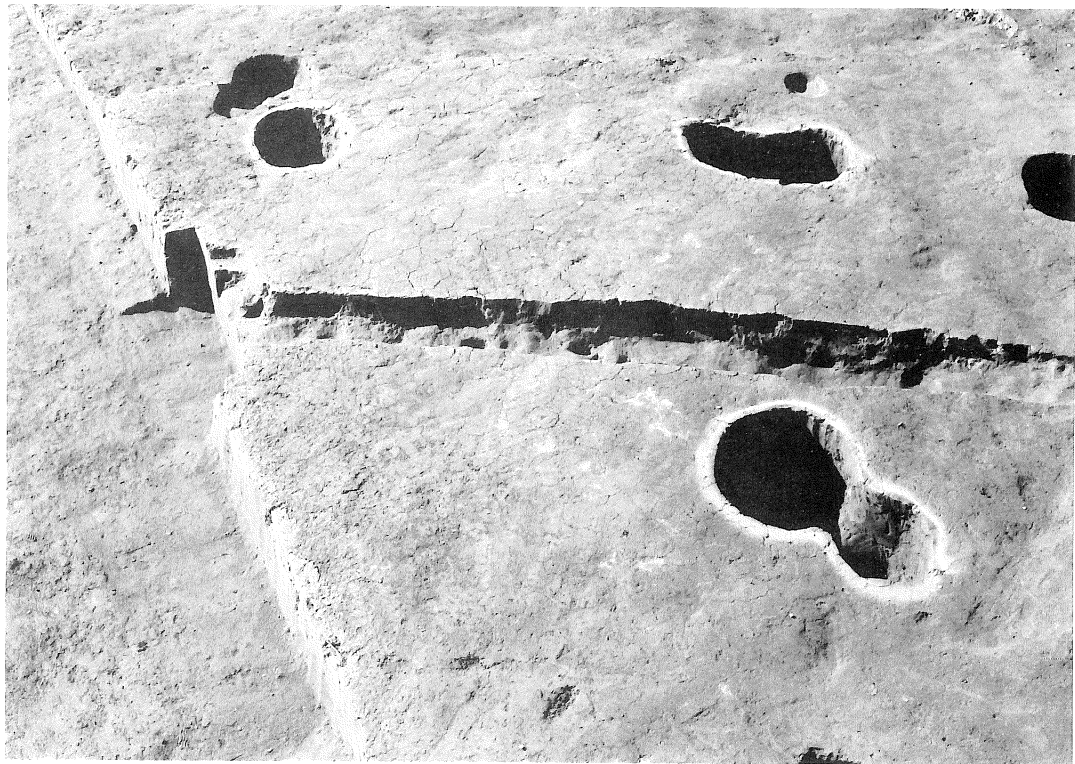
第 2 号住居跡完掘状態



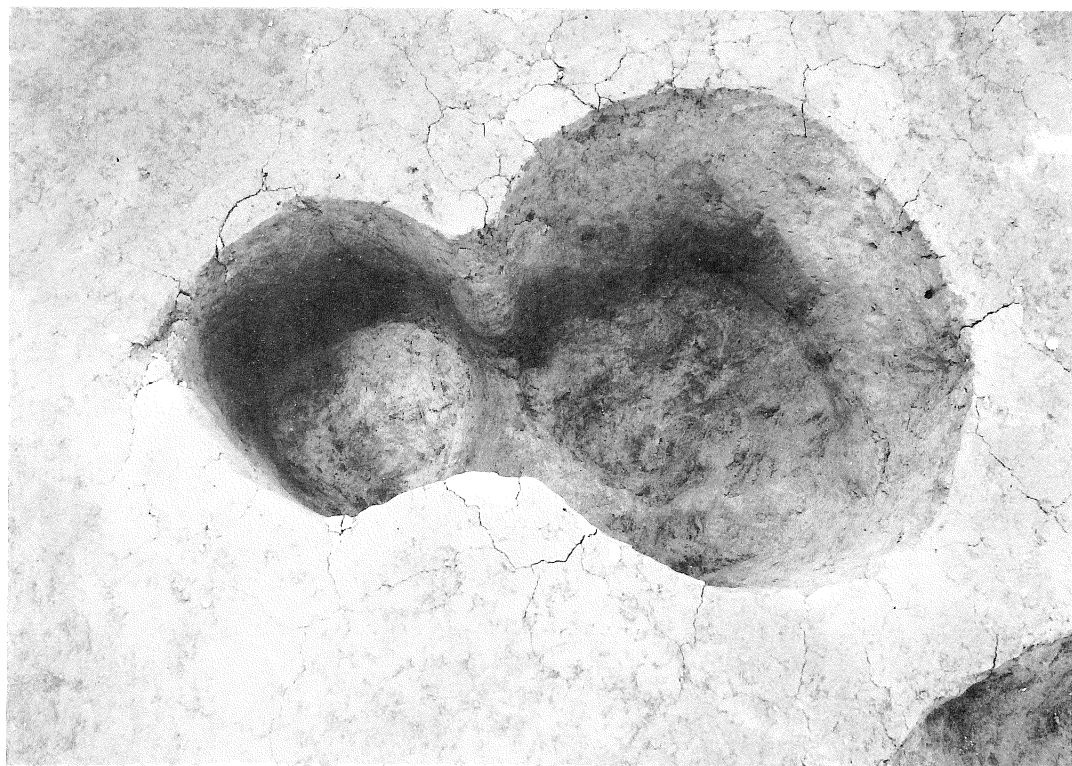
第 2 号住居跡土層



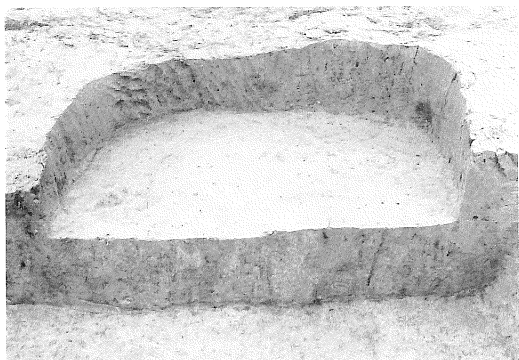
第 3 号住居跡完掘状態



第 1 号掘立柱建物跡



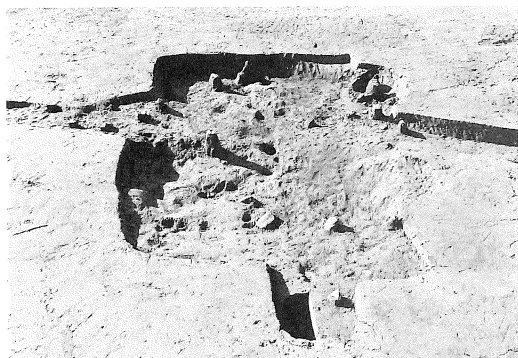
第 1 号掘立柱建物跡 P 3



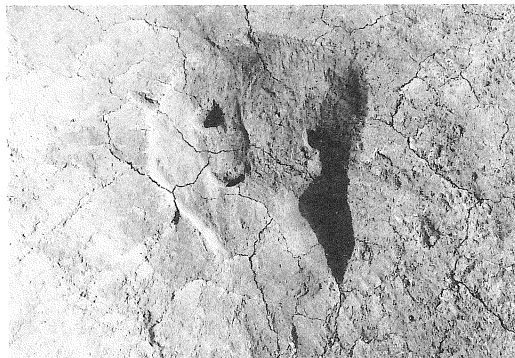
第 1 号土坑



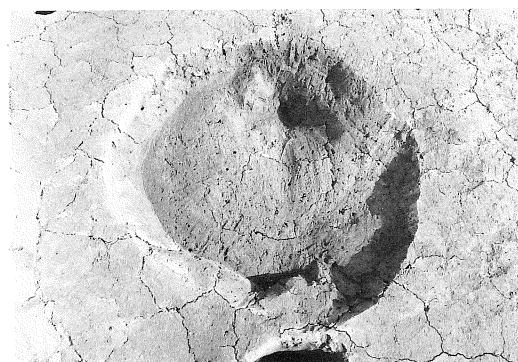
第 2 号土坑



第 3 号土坑



第 4 号土坑



第 5 号土坑



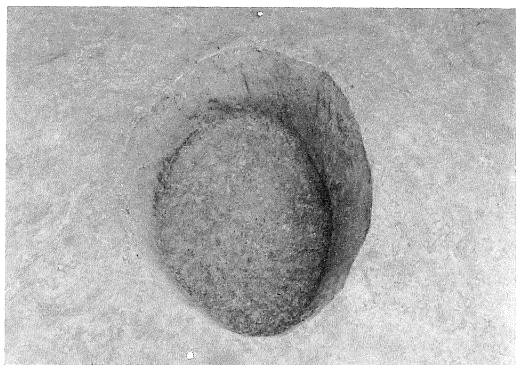
第 6 号土坑



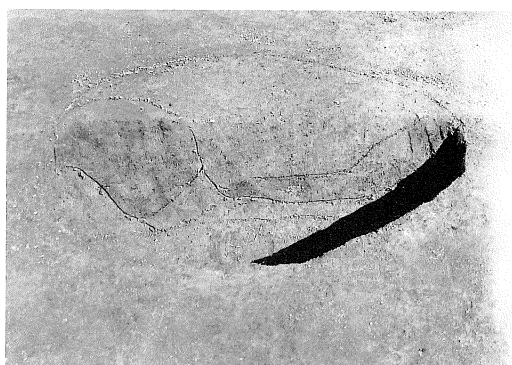
第 7 号土坑



第 7 号土坑土層



第 8 号土坑



第 8 号土坑土层



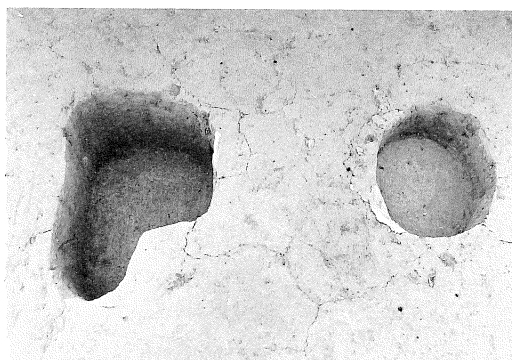
第 9 号土坑



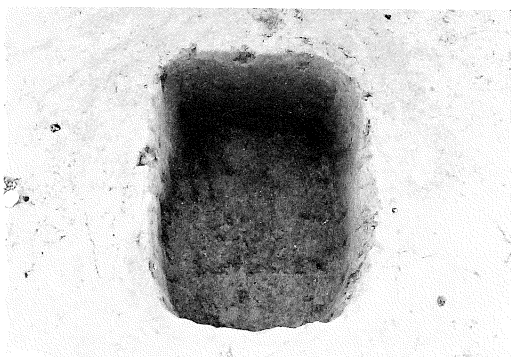
第 9 号土坑土层



栅列迹



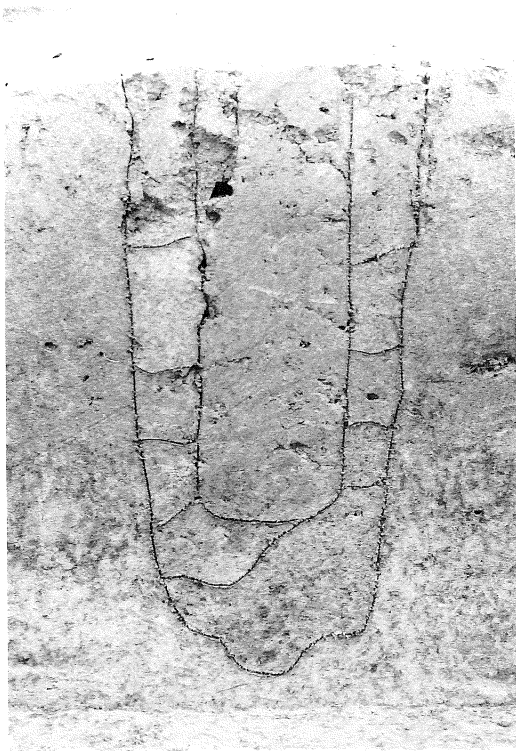
栅列迹 P 3 · 4



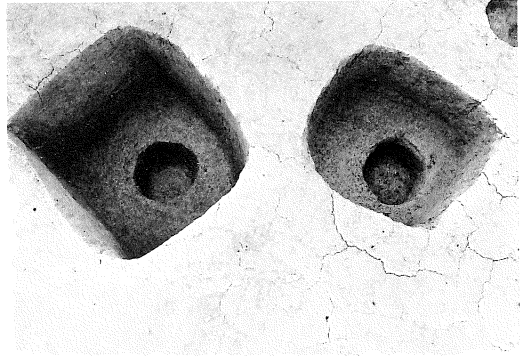
栅列迹 P 5



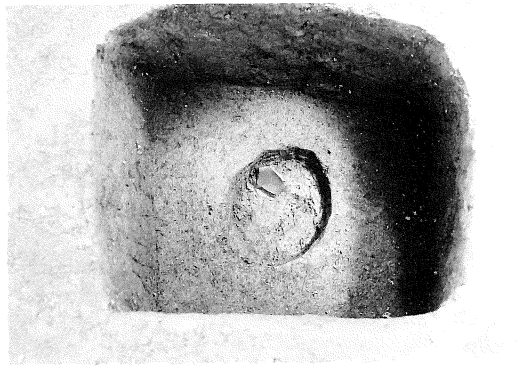
B 区柱穴群



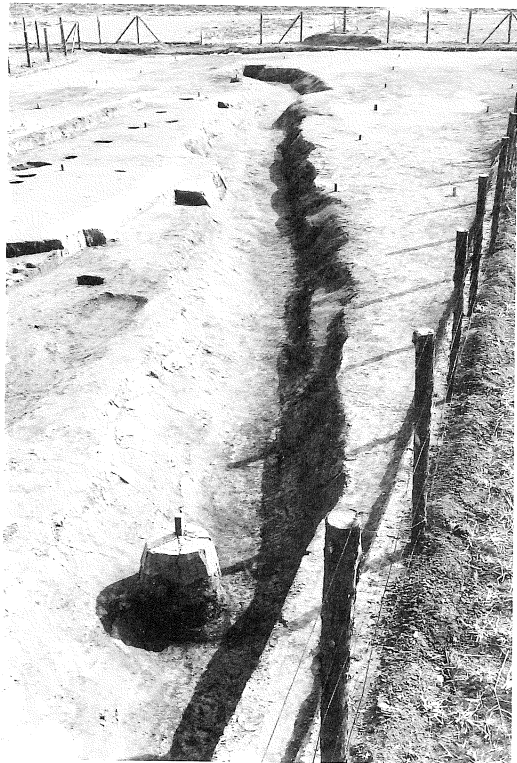
G 58P9 土层



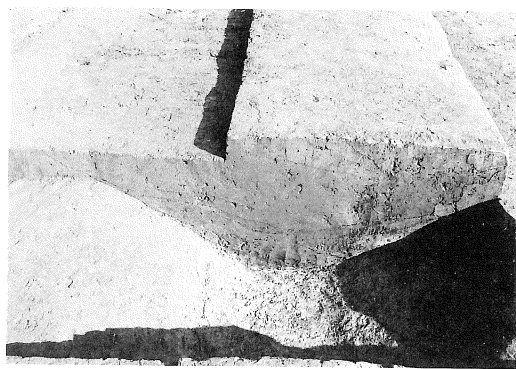
F 58P5·7



G 58P7



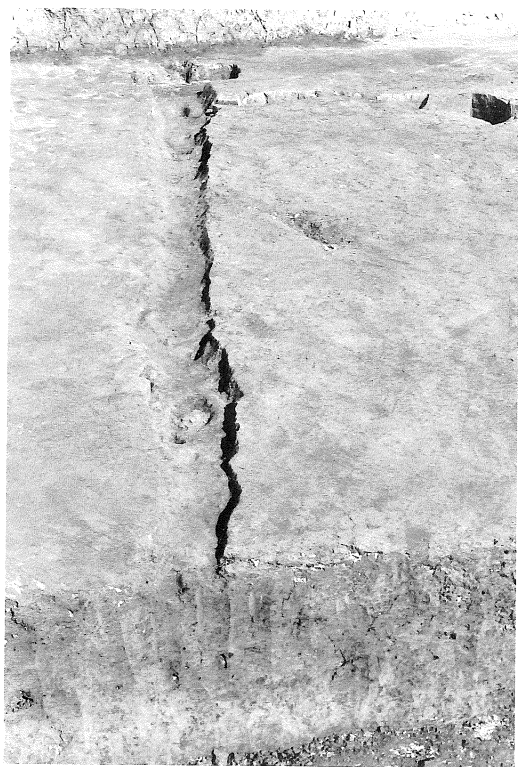
第1号沟迹



第1号沟迹土层



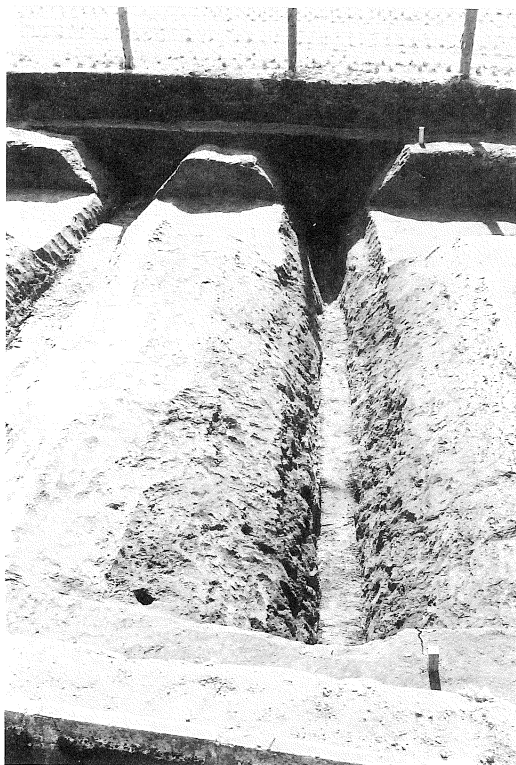
第1号沟迹遗物出土状态



第2号沟迹



第3号沟迹



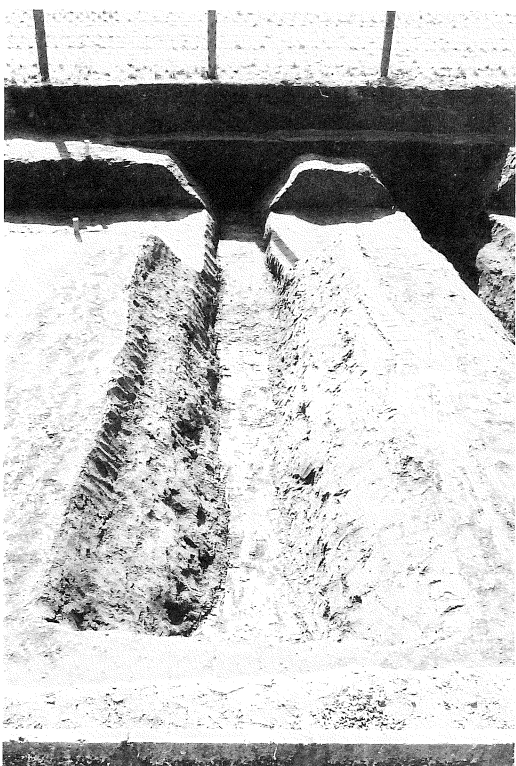
第4号沟迹



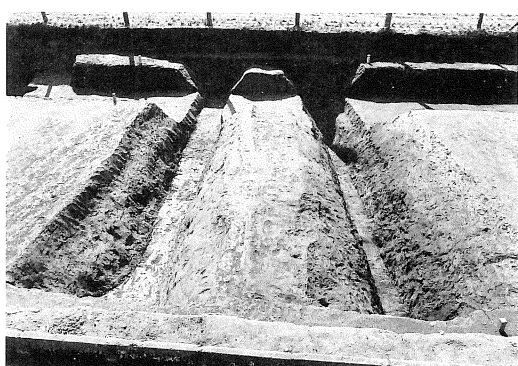
第4号沟迹



第4号沟迹土层



第5号沟迹



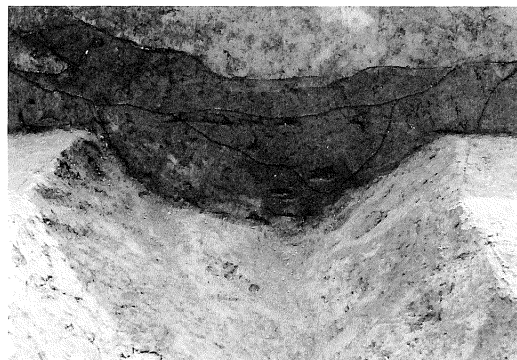
第4(右)·5(左)号沟迹



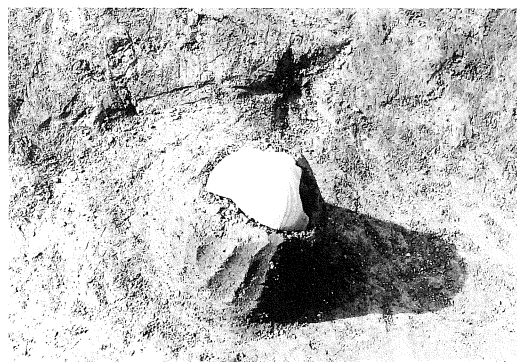
第5号沟迹土层



第6号沟迹



第6号沟迹土层



第6号沟迹遗物出土状态



第7号沟迹



第6(右)·7(左)号沟迹



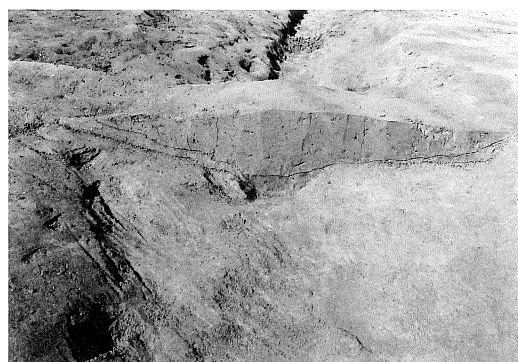
第7号沟迹土层



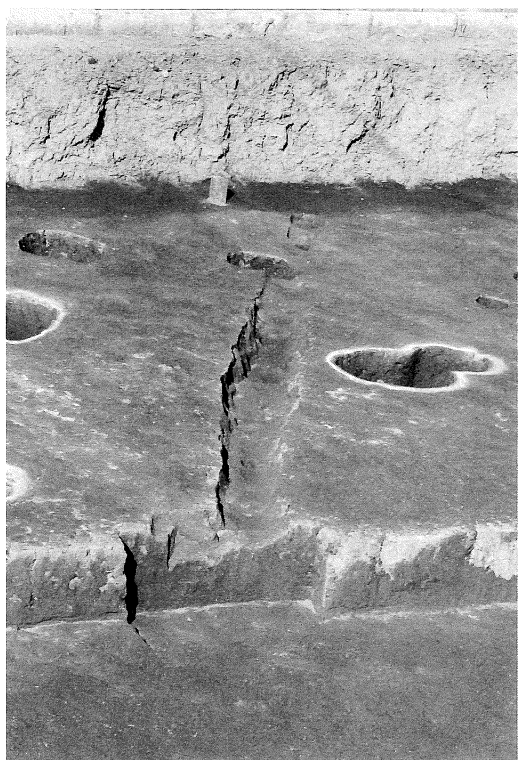
第 8 号沟迹



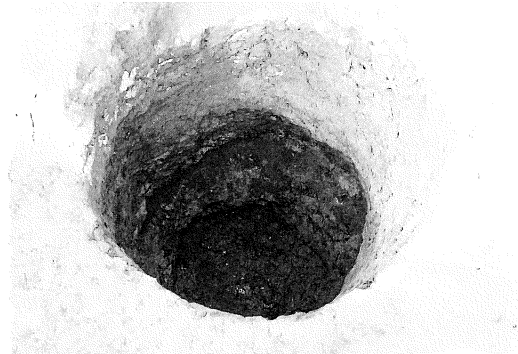
第 8 号沟迹



第 8 号沟迹土层



第 9 号沟迹



第 1 号井戸迹



第 2 号井戸迹



E区航空写真



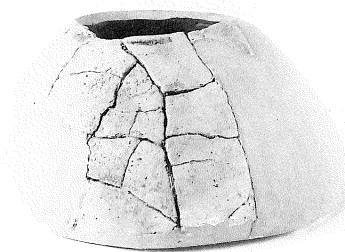
E区1~4トレンチ



E区17~19トレンチ



第1号住居跡 2



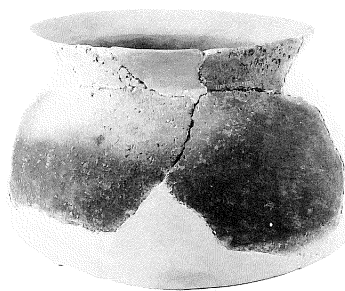
第1号住居跡 3



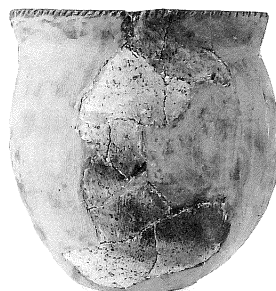
第2号住居跡 4



第2号住居跡 6



第2号住居跡 8



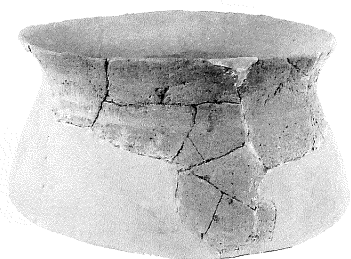
第2号住居跡 9



第2号住居跡10



第2号住居跡11



第3号住居跡3



第3号住居跡4



第3号土壙1~3



第9号土壙2



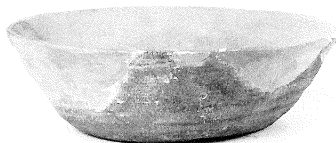
第9号土壙3



第9号土壙4



第9号土壙6



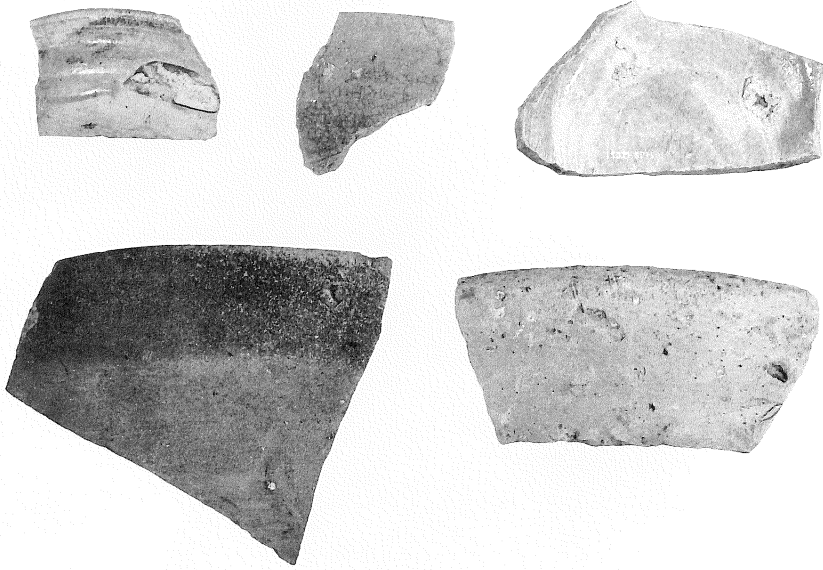
第6号溝跡



第1号溝跡出土遺物1～6（表）



第1号溝跡出土遺物1～6（裏）



第1号溝跡出土遺物7~11(表)



第1号溝跡出土遺物7~11(裏)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第116集

伊佐島

県道東大久保大井線関係埋蔵文化財調査報告

平成 4年 3月20日 印刷

平成 4年 3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 (0493) 39-3955

FAX (0493) 39-3576

印刷

凸版印刷株式会社